

福岡市博多区  
下月隈天神森遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第76集

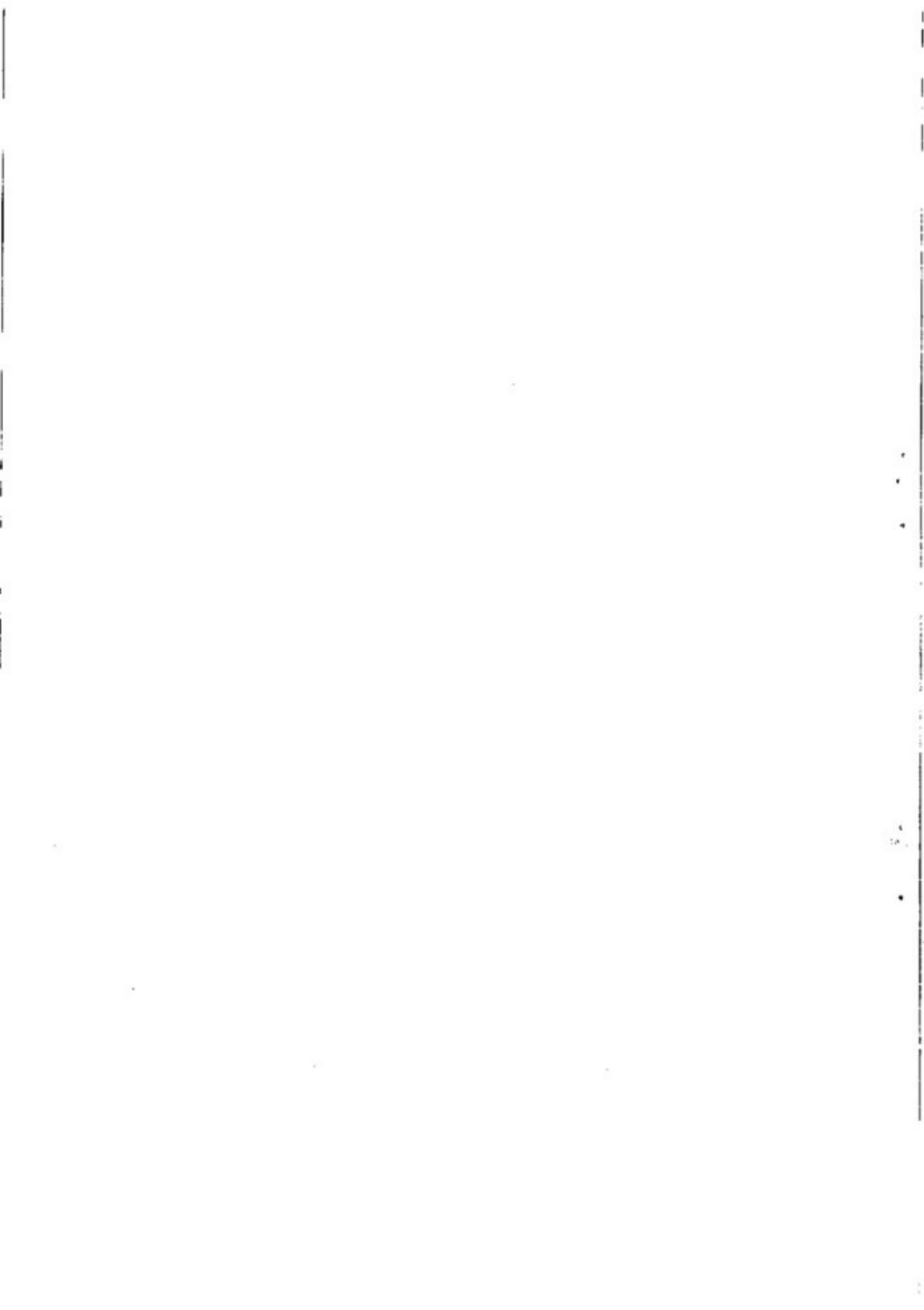
1981

福岡市教育委員会

福岡市博多区

下月隈天神森遺跡





## 序 文

福岡平野の席田丘陵から月隈丘陵にかけての一帯は、席田遺跡群、持田ヶ浦古墳群を始めとして、非常に多くの古墳が群集している丘陵地帯として著名な地域であります。

今回、発掘調査の対象となった下月隈天神森遺跡は福岡市が市道下月隈藤田正手線を新設するにあたり、その路線内に存在するため、調査が必要となったもので、教育委員会が調査主体となり、昨年の2月から3月にかけて発掘調査を実施いたしました。

発掘調査の結果は、報告書にみられるように、この地域の古墳の形成過程や、当時の墓制の型式等を知る上で、貴重な成果を得ることができました。

本書が古代史研究の手掛りとなり、郷土の文化財の保存のために役立つならば、誠に幸いと存じます。

調査にあたりよせられた多くの方々のご理解とご協力に、心から感謝を申し上げます。

昭和56年3月

福岡市教育委員会

教育長 西津茂美

## 凡　　例

- ・本書は、市道下月隈藤田正手線の新設に先立ち、1980年2月12日から3月31日にかけて福岡市教育委員会が実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- ・遺跡が福岡市博多区大字下月隈字天神森に位置するため、遺跡名を「下月隈天神森遺跡」とする。
- ・遺跡の発掘調査には、福岡市教育委員会文化課の飛高憲雄、力武卓治、岡島洋一（事務担当）が当り、本書の執筆・編集は飛高憲雄、力武卓治が行なった。
- ・本書の作成には、次の方々のご協力を得ました。ここに氏名を記して感謝の意を表します。（敬称略）

荒津孝治	安東 昇	岩永真弓
江越初代	河野徹也	関加代子
閑 直樹	閑 政子	武本延子
藤たかえ	中村満代	花畠照子
広田清美	藤田 太	溝口博子
実潤栄治	安武裕子	山内タツ子

福岡市博多区 下月隈天神森遺跡

目 次

序 文

凡 例

I	はじめに	(7)
II	発掘調査の概要	(11)
III	遺構・遺物	(13)
1.	土塙墓	(13)
2.	竪穴	(30)
3.	下月隈天神森1号墳	(31)
4.	下月隈天神森2号墳	(40)
5.	ピット群	(45)
6.	掘立柱建物跡	(46)
IV	おわりに	(47)

## 挿図目次

- 1 下月隈天神森遺跡と周辺の遺跡（縮尺1/25,000）……………(9)
- 2 下月隈天神森遺跡周辺のようす（縮尺1/5,000）……………(10)
- 3 下月隈天神森遺跡遠景（西から）……………(11)
- 4 下月隈天神森遺跡遠景（東方の月隈丘陵上から）……………(11)
- 5 下月隈天神森遺跡地形測量図（縮尺1/1,000）……………(12)
- 6 下月隈天神森遺跡遺構配置図（縮尺1/100）……………折り込み
- 7 土塙墓群全景（南から）……………(13)
- 8 1・2・10・17号土塙墓実測図（縮尺1/30）……………(15)
- 9 10号土塙墓……………(16)
- 10 17号土塙墓……………(16)
- 11 1号土塙墓……………(16)
- 12 2号土塙墓……………(16)
- 13 18号土塙墓実測図（縮尺1/30）……………(17)
- 14 6・7・11号土塙墓実測図（縮尺1/30）……………(18)
- 15 7号土塙墓……………(19)
- 16 6号土塙墓……………(19)
- 17 6号土塙墓出土石鏡実測図（縮尺3/5）……………(19)
- 18 6号土塙墓出土石鏡……………(19)
- 19 3号土塙墓実測図（縮尺1/30）……………(20)
- 20 4号土塙墓実測図（縮尺1/30）……………(20)
- 21 3号土塙墓……………(21)
- 22 4号土塙墓……………(21)
- 23 12号土塙墓実測図（縮尺1/30）……………(22)
- 24 12号土塙墓……………(22)
- 25 19号土塙墓……………(23)
- 26 19号土塙墓実測図（縮尺1/30）……………(23)
- 27 5・13・14号土塙墓実測図（縮尺1/30）……………(24)
- 28 13号土塙墓……………(25)
- 29 5号土塙墓……………(25)

30	「4号土塙墓」	(25)
31	16号土塙墓実測図(縮尺1/30)	(26)
32	16号土塙墓	(26)
33	16号T塙墓	(27)
34	15号土塙墓実測図(縮尺1/30)	(27)
35	8号土塙墓	(28)
36	8号土塙墓実測図(縮尺1/30)	(28)
37	9号土塙墓出土石鏡実測図(縮尺3/5)	(29)
38	9号土塙墓	(29)
39	9号土塙墓実測図(縮尺1/30)	(29)
40	整穴	(30)
41	整穴実測図(縮尺1/40)	(30)
42	下白隈天神森1号墳の発掘前のようす	(31)
43	下月隈天神森1号墳済丘測量図(縮尺1/100)	(31)
44	下月隈天神森1号墳封土除去後のようす(南西から)	(32)
45	下月隈天神森1号墳封土除去後測量図(縮尺1/100)	(32)
46	下月隈天神森1・2号墳全景	(33)
47	下月隈天神森1号墳と土塙墓	(33)
48	下月隈天神森1号墳石室実測図(縮尺1/50)	(34)
49	下月隈天神森1号墳石室全景①(石室入口がわから)	(35)
50	下月隈天神森1号墳石室全景②(石室奥壁がわから)	(35)
51	下月隈天神森1号墳右側壁	(35)
52	下月隈天神森1号墳左側壁	(35)
53	下月隈天神森1号墳石室内副葬品出土位置図(縮尺1/40)	(36)
54	耳筋りの出土状況	(36)
55	銛鎗の出土状況	(36)
56	下月隈天神森1号墳出土遺物実測図(縮尺1/3)	(37)
57	下月隈天神森1号墳出土遺物	(37)
58	下月隈天神森1号墳石室内出土遺物実測図(縮尺1/2・3/5)	(38)
59	下月隈天神森1号墳石室内出土遺物	(39)
60	下月隈天神森2号墳現況測量図(縮尺1/100)	(40)
61	下月隈天神森2号墳全景	(40)

- 62 下月殿天神森2号墳測量図（縮尺1/100）……………(41)  
63 下月殿天神森2号墳全景（覆土除去後のようす）……………(41)  
64 下月殿天神森2号墳石室実測図（縮尺1/50）……………(42)  
65 壁石裏がわに見える線刻……………(42)  
66 直刀・鎌の出土状況……………(42)  
67 下月殿天神森2号墳石室内出土鉄器実測図（縮尺1/2・1/4）…(43)  
68 下月殿天神森2号墳石室内外出土鉄器……………(44)  
69 ピット群全景（南西から）……………(45)  
70 ピット群出土青磁実測図（縮尺1/3）……………(45)  
71 ピット群実測図（縮尺1/100）……………(45)  
72 捜立柱建物跡（北東から）……………(46)  
73 捜立柱建物跡実測図（縮尺1/100）……………(46)  
74 下月殿遺跡群遠景……………(48)

## I はじめに

福岡市における朝夕の通勤時の交通混雑は、他都市に勝るとも劣らないものである。これを解消するためには、車両を既設道路に見合った数におさえることであろうが、今日の車優先社会においては、急増する車に対応するために道路の新設や拡張を余儀なくされ、そのためおびただしい埋蔵文化財と自然が破壊されている。

今回発掘調査が行なわれた下月隈天神森遺跡の場合も、市道月隈線の建設予定地に当る。当地は、1971年発行の「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表—総集編一」にみえる周知の遺跡（天神森古墳群）であったが、それ以外に喪棺墓や遺物包含層の埋蔵が予想されたため、数か所の地点を選んで遺構・遺物の有無を確認するための試掘調査を、1978年10月4日から7日にかけて実施した。その結果、丘陵上の西斜先端部のトレンチおよびその拡張区において、柱穴と溝状遺構が検出された。特に溝状遺構の中からは、細片ではあったが弥生土器の出土をみた。

このような経過から、福岡市文化課では、下月隈天神森遺跡には、古墳2基と溝状遺構および建物跡が埋蔵されていることを、最終的に確認した。

下月隈天神森遺跡が周知の遺跡ではあったが、道路の設計変更等が不可能ということで、われわれは、1980年2月12日から年度内の終了をめざして発掘調査に着手した。

下月隈天神森遺跡の発掘調査については、地元の人々をはじめ関係各位の絶大なる協力があったことを明記しなければならない。発掘調査には福岡市文化課の関係各位の外に次の方々のご協力を得ました。（敬称略）

荒津孝治 岩永真弓 江越初代 河野徹也 小島由美子 関加代子 関政子  
鶴田サヨ子 藤たかえ 花畠照子 藤田太 溝口博子 実測栄治 安武裕子  
山内タツ子

また、発掘調査事務所の設置には、片江英海氏、光安楳太郎氏および各ご家族の方々の絶大なるご理解とご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。

下月隈天神森遺跡は、福岡市博多区大字下月隈字天神森にある。

福岡平野の東を限る三郡山地より派生した大城山（標高410m）の山麓に、南東から北西に延びる標高100m～150mの月隈丘陵がある。下月隈天神森遺跡は、この月隈丘陵の西側に独立した東西約130m、南北約50m、高さ約20mの小丘陵上に位置し、福岡空港滑走路東南角より約300m東に当る。

月隈丘陵には西へ延びる支丘が幾つもあり、支丘と支丘の間の谷には、出口に堤防を築いた

用水池がみられる。下月限天神森遺跡の位置する丘陵が、かつては一支丘の先端部の高まりをなした部分であったかもしれないが、現在では、一独立丘の觀を呈している。

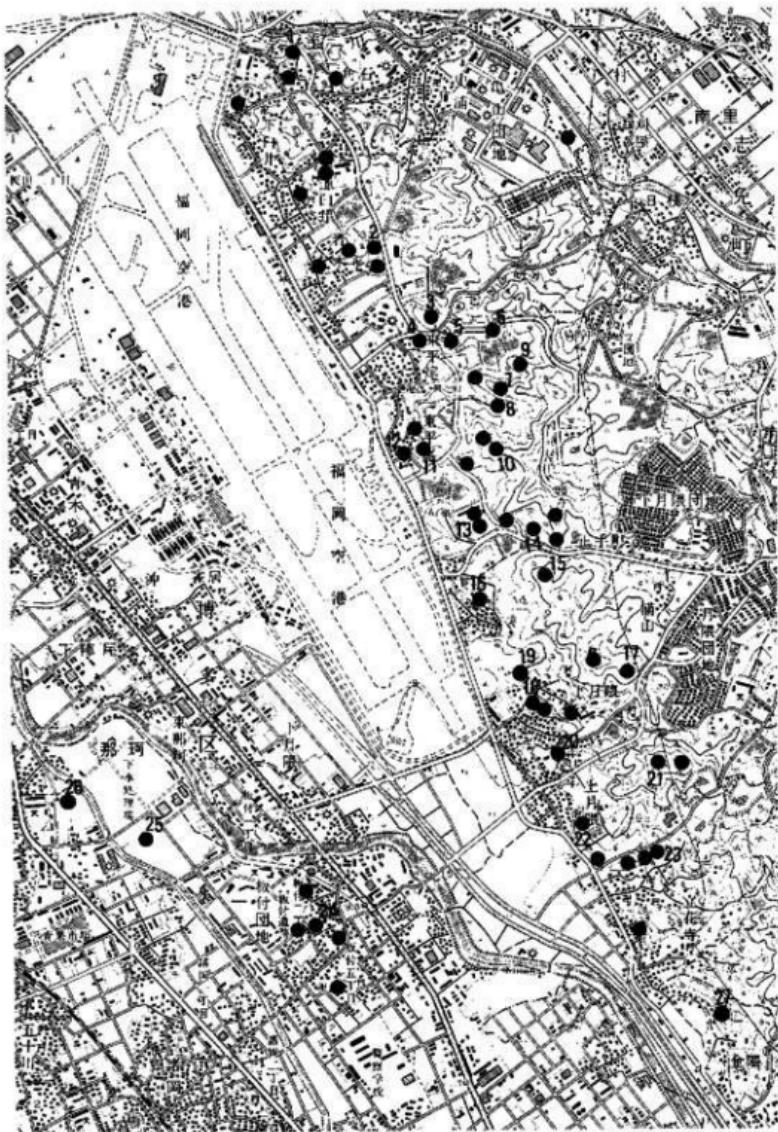
下月限天神森遺跡の立地する丘陵の北側は、戦後の一時期、米軍板付基地付属の射撃場になっていたため地形に変貌をきたしているが、地元の人々の話によれば、米軍に接收されるまでは、数基の古墳が保存されていたとのことである。また地元で博打穴と呼んでいた横穴式石室をもった古墳もこの中に含まれていたと聞く。一方、東側の月限丘陵には、福岡城築城の際の黒田藩の石切り場があったといわれ、現在でも崖面には石を切り出した痕跡が残されている。

月限丘陵では、弥生時代に至るまでのようすは目下のところ不明であるが、弥生時代中期以降になると人々の活発な動きがあったようで、数次におよぶ席田遺跡群の発掘調査によって生活跡や墓地のようすが明らかになりつつある。

弥生時代の葬棺墓遺跡としては、月限丘陵最北端に位置する下白井遺跡をはじめ、青木、北ノ浦、席田林崎、宝満尾等々の遺跡をあげることができる。しかしながら過半のものは、未調査のまま土取り、地下げ等によって消滅してしまった。古墳の場合も近世以降の盗掘あるいは抜石によって当初の面影をとどめるものは1基としてないよう、下月限天神森遺跡の2基の古墳もすでに大井石、壁石の大半は失われていた。下月限天神森遺跡の南東約200mのところには、弥生時代中期の下月限宮ノ後遺跡が、さらに南へ上月限、金隈等の葬棺墓遺跡へと連なり、また目を南西に転じれば、初期農耕集落遺跡として著名な板付遺跡が、さらに奥には奴国王の墓所といわれる須玖遺跡等が望まれる。

#### 下月限天神森遺跡と周辺の遺跡

- |                          |              |                         |
|--------------------------|--------------|-------------------------|
| 1. 下白井葬棺墓遺跡              | 2. 青木葬棺墓遺跡   | 3. 北ノ浦古墳<br>(東平尾古墳)     |
| 4. 北ノ浦葬棺墓遺跡              | 5. 席田中尾遺跡    | 6. 席田堤ノ上遺跡              |
| 7. 席田貝花尾1号墳              | 8. 席田貝花尾2号墳  | 9. 席田新立表古墳              |
| 10. 席田大谷遺跡<br>(上ノ浦池遺跡)   | 11. 席田久保岡遺跡  | 12. 席田林崎遺跡              |
| 13. 宝満尾遺跡                | 14. 宝満尾東遺跡   | 15. 上ノ池古墳群              |
| 16. 雀居古墳                 | 17. 下月限古墳群   | 18. 下月限宮ノ後遺跡<br>(下月限遺跡) |
| 19. 下月限天神森遺跡<br>(天神森古墳群) | 20. 上月限葬棺墓遺跡 | 21. 上月限古墳群              |
| 22. 文殊谷古墳群               | 23. 谷頭古墳群    | 24. 板付遺跡                |
| 25. 那珂若狭遺跡               | 26. 那珂深ヲサ遺跡  | 27. 金隈遺跡                |



1 下月天神森遺跡と門辺の遺跡（縮尺1/25,000）



2 下月限天神森遺跡周辺のようす（縮尺1/5,000）（上）今から約40年前（下）現在

## II 発掘調査の概要

下月限天神森遺跡では、試掘調査の結果から、2基の古墳と柱穴および溝状遺構の確認された地点を中心に、下草を刈り、写真撮影と地形測量を実施し、発掘調査を開始した。丘陵東部の標高約20mの最高所に約10mの間隔で、ほぼ南北に並ぶ古墳は、北側のを下月限天神森1号墳、南側のを下月限天神森2号墳とした。この2基の古墳を結ぶ線が、丘陵の棱線と一致することが地形測量図と調査後の地山の地形測量図とから判明した。1号墳は南西に開口する横穴式石室をもつ円墳である。副葬品として耳飾り、鉄鎌、鉄斧、刀子が残存し、覆土中から須恵器が出土する。2号墳は、東と西に壁石と思われる大石が残るのみだが、1号墳同様に内部構造は横穴式石室であろう。副葬品として鉄鎌、直刀、鉄鎌がある。

古墳の石室下を含めて合計19基の土塙墓が検出され、特に6・9号土塙墓からは、石鎌が出土する。

丘陵西側先端部に柱間4間×2間の掘立柱建物跡を検出するが、出土遺物はない。

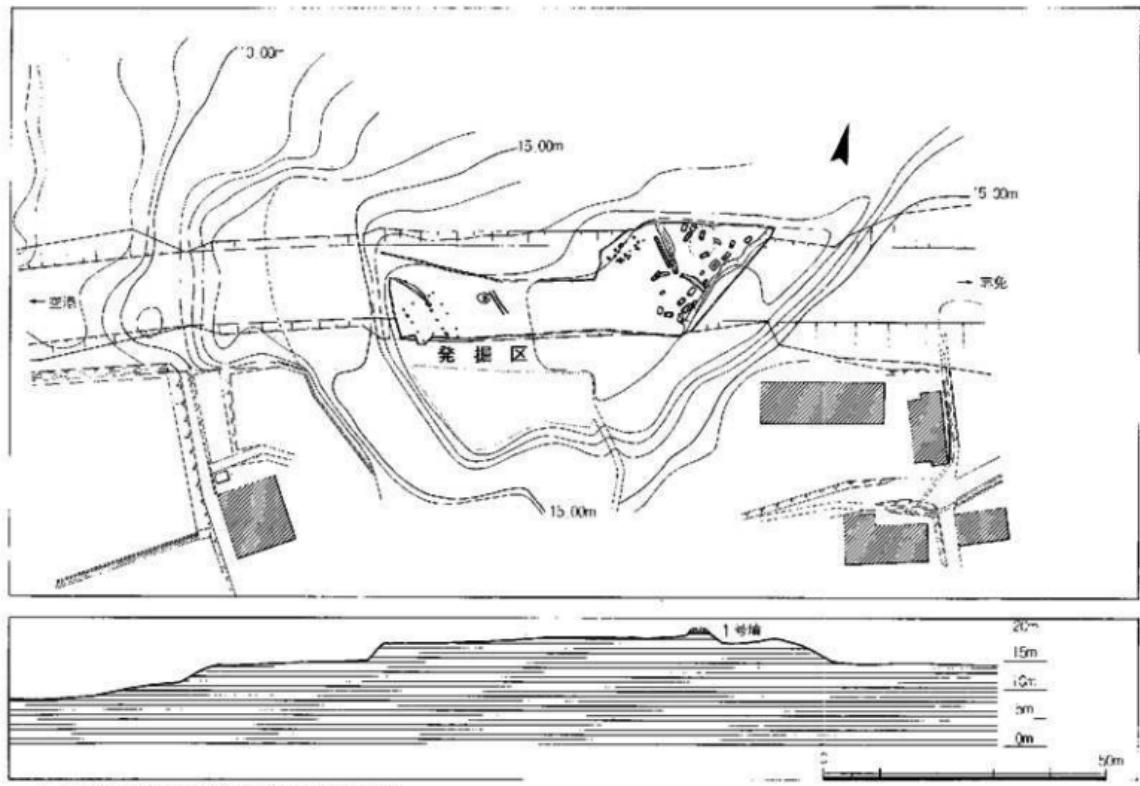
この北側から、建物に先行する溝状遺構を検出するが、出土遺物はない。この遺構は試掘時に確認され、弥生土器の細片が出土したものである。掘立柱建物跡の北東から竪穴を検出するが、出土遺物はない。1号墳の南北斜面からピット群が検出されるが性格は不明である。



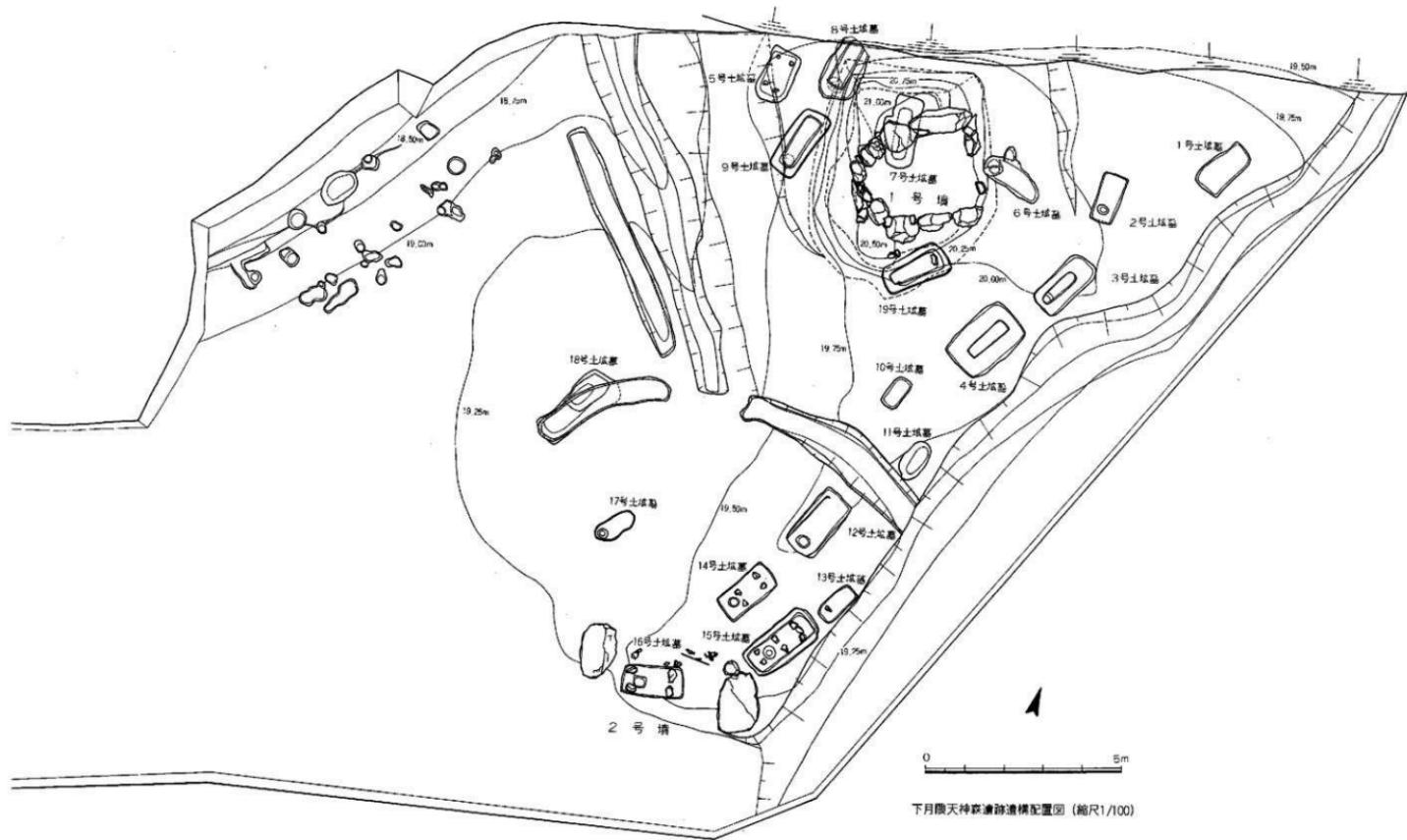
3 下月限天神森遺跡遠景（西から）



4 下月限天神森遺跡遠景（東方の月限丘陵上から）



5 下ノ賀天神森遺跡地形測量図 (縮尺1/1,000)



### III 遺構・遺物

#### 1. 土塙墓

下月限天神森遺跡は、古墳2基と掘立柱建物跡等をもってそのすべてであると考えて、発掘調査を開始した。ところが、下月限天神森1号墳の外部施設の有無を探るべく東側の表土除去を進めていたところ、長方形の浅い落ち込みを検出する。塙底をわずかに残す程度のものではあったが、これが1号土塙墓であった。当然ながら土塙墓が単独で存在するはずはないということで、さらに周辺の表土を除去し、赤褐色を呈した丘陵地山面で調査を進めたところ、土塙墓が続々と検出され、2基の古墳の周辺すなわち当丘陵の最高位に集中して営まれているということが明らかになる。このことは、また、2基の古墳の下部からも土塙墓が検出されるのではないかという予測を立てておられたのに充分であった。

下月限天神森1号墳と同2号墳の調査完了後に石室床下の精査を行なう。予想どおりに土塙



7 土塙墓群全景（南から）

墓の検出をみる。最終的には、相当に破壊がひどくて不明確なものをも含めて、総数19基にのぼる。特にグループを構成することはないようであるが、主軸を南北に近い方向にとるものと、これとは直角のもの、あるいは、まったく別の方向をとるものなどがある。土塙群が比較的小さな範囲に19基も形成されているにもかかわらず、切り合がまったくなく、土塙墓の中での先後関係はまったく不明であるが、短期間に當まれたものであろうといふことはいえる。

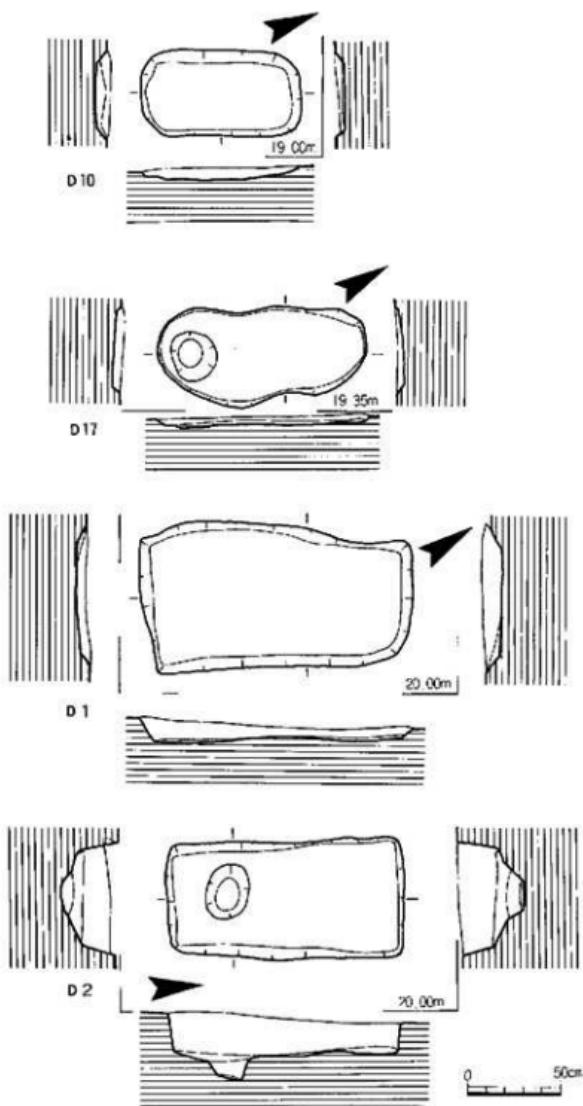
特記すべきことは、先端部あるいは基部を欠失した石鎚を出土した土塙墓があるということと、塙底に角礫を配したり、あるいは、塙底の足位と思われる個所に円形または方形のピットをもつたものがあるということであろう。

土塙墓計測値一覧表

(単位 cm)

No	方 向	平 面 形	一段目掘り込み 長さ×幅×深さ	二段目掘り込み 長さ×幅×深さ	備 考
1	N-31°-E	長 方 形		146×76×10*	
2	N-3°-E	長 方 形		127×63×23*	ピットあり。
3	N-28°-E	隅丸長方形	168×80×36	108×31×9	ピットあり。
4	N-34°-E	長 方 形	191×127×27	126×53×46	木棺か。
5	N-2°-E	隅丸長方形		137×80×11*	木棺か。角礫4個。
6	E-19°-S	不 整 形 (長方形)		163×62×16*	ピットあり。石鎚3本。
7	N-14°-E	隅丸長方形		185×45×37	
8	N-14°-E	長 方 形		(復原) 180×95×45	ピットあり。木棺か。 粘土床(131×45×9)
9	N-18°-E	長 方 形		183×78×30	ピットあり。木棺か。 粘土床(146×45×10)
10	N-22°-E	隅丸長方形		85×45×6*	
11	N-18°-E	隅丸長方形		109×97×9*	
12	N-24°-E	長 方 形	181×90×25	158×66×20	ピットあり。木棺か。
13	N-28°-E	長 方 形		108×52×13*	角礫あり。
14	N-35°-E	長 方 形		157×75×25	ピットあり。角礫4個。
15	N-36.5°-E	長 方 形	201×95×20	181×65×30	ピットあり。角礫7個。
16	N-79°-E	長 方 形		160×80×38	方形ピットあり。角礫4個。
17	N-28°-E	隅丸長方形		112×50×4*	ピットあり。
18	N-30°-E	不 整 形 (長方形)		120×60×26*	
19	N-46°-E	隅丸長方形	178×78×20	143×55×12	石枕様角礫あり。

\*は、上面が削平され、深さが不正確と思われる。

**10号土塙墓**

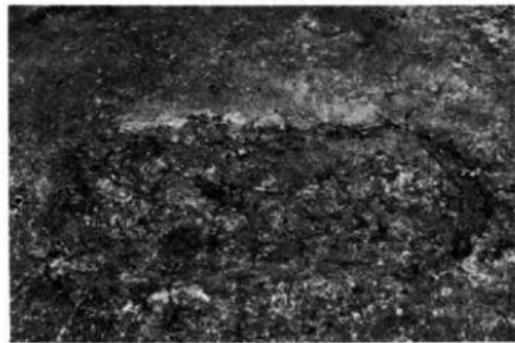
4号土塙墓の南西1.3mのところにあって主軸をN-22°-Eにとる。素掘りの小型の土塙墓で、長さ85cm、幅45cm、深さ6cmを測る。上部を削平され、土塙底を残すのみである。

**17号土塙墓**

14号土塙墓の西3.5mに位置し、主軸をN-28°-Eにとる。素掘りの小型の土塙墓で、長さ112cm、幅50cm、深さ4cmを測る。足位に径24cm、深さ1cmの円形ピットがある。

**1号土塙墓**

土塙墓群の中で最北東に位置し、主軸をN-31°-Eにとる。上部を削平され、土塙底を残すのみであるが、長さ146cm、幅76cm、深さ10cmを測る素掘りの土塙墓である。



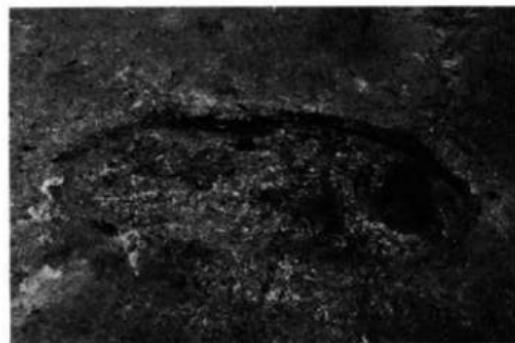
9 10号土塚墓



11 1号土塚墓



12 2号土塚墓



10 17号土塚墓

**2号土塙墓**

6号土塙墓の東1.5mにあって主軸をN-3°-Eにとる。長さ127cm、幅63cm、深さ23cmを測る。足位に径25cm、深さ11cmの円形ピットがある。素振りの土塙墓である。

**18号土塙墓**

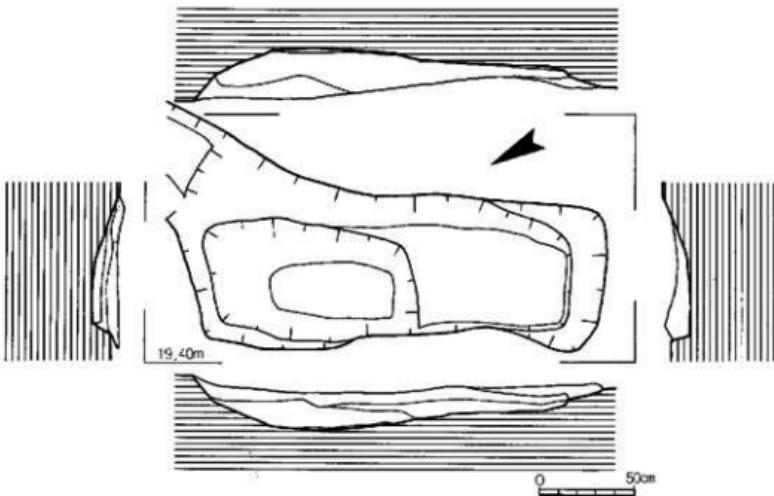
17号上塙墓の北西にあって、土塙墓群の中で最も西に位置する。下月限天神森2号墳の溝によって破壊されているため、平面は不整形であり、かろうじて底が残っているだけである。主軸をN-30°-Eにとり、現状では長さ120cm、幅60cm、深さ26cmを測る。

**7号土塙墓**

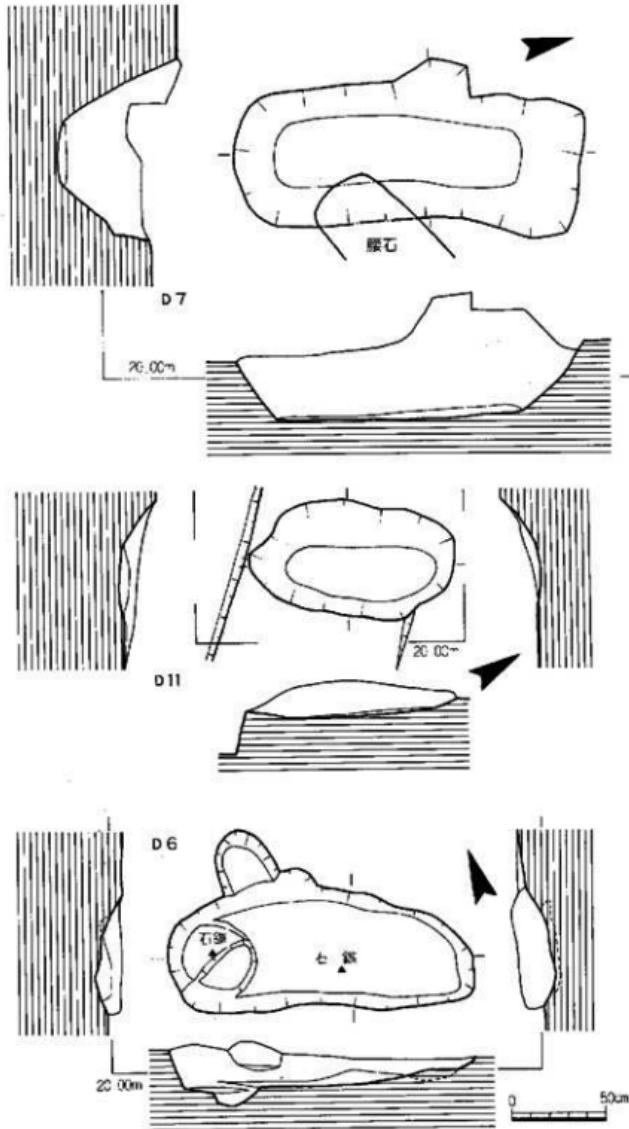
8・9号土塙墓の東1.5mに位置し、下月限天神森1号墳の左側壁の構造に際して一部を破壊されている。腰石が土塙墓の南を斜めに横切る状態でえつけられている。主軸をN-14°-Eにとり、平面形が隅丸長方形の土塙墓である。長さ185cm、幅45cm、深さ37cmを測る。

**11号土塙墓**

10号土塙墓の南東1mのところにあって、主軸をN-18°-Eにとる。上部を削平され底を



13 18号上塙墓実測図(縮尺1/30)



14 6・7・11号土塙墓実測図(縮尺1/30)

残すのみであるが、長さ 109cm、幅97cm、深さ9cmを測る。南がわ短側壁は、下月隈天神森2号墳の周溝によって破壊されている。

#### 6号土塙墓

2号上塙墓の西1.5mの位置にあって、主軸をE-19°-Sにとる平面不整形の土塙墓である。西がわ短側壁が、下月隈天神森1号墳の奥壁のはば直下になる。上部は削平されているが、長さ163cm、幅62cm、深さ16cmを測る。足位には径25cm、深さ9cmの円形ピットがある。石錐3本の出土を見る。2本は塙底のはば中央部から、1本は円形ピットの中から半折した状態で出土する。

## ▶ 15 7号土塚墓

下月隈天神森1号墳の左側壁の腰石が上にのる。



## ▶ 16 6号土塚墓

石鏡3本を出土した土塚墓。



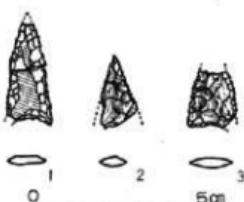
## 6号土塚墓出土石鏡

1は、足位の円形ピットから出土。中央部で折れているが、現存長3cm、最大幅1.35cm、厚さ0.25cmの安山岩製。

抉り込みは浅く、周辺剥離は細かく整い、片面のみ中央部を磨いている。先端と基部片側は欠失している。

2は、土塚墓中央部から出土。基部を欠失して原寸法は不明である。灰色黒縞石製。周辺の剥離は非常に細かい鋸歯状で、先端は尖って調整されている。

3は、土塚墓中央部から出土。黒縞石製。先端と基部片がわを欠失するが、比較的幅広で、うすく剥離され、抉り込みはごく浅く、両側はやや外側にカーブして全体として丸みをもった形である。



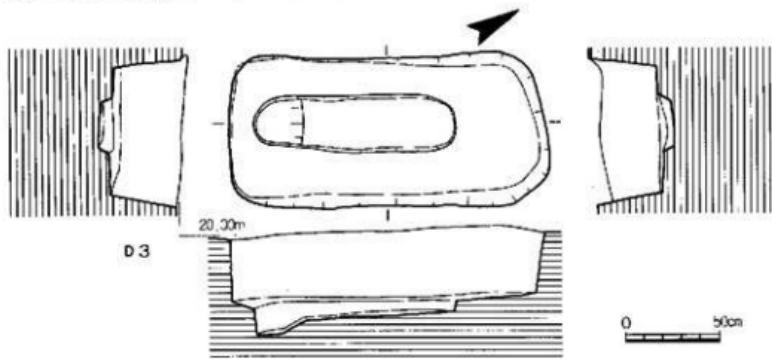
17 6号土塚墓出土石鏡実測図  
(縮尺3/5)



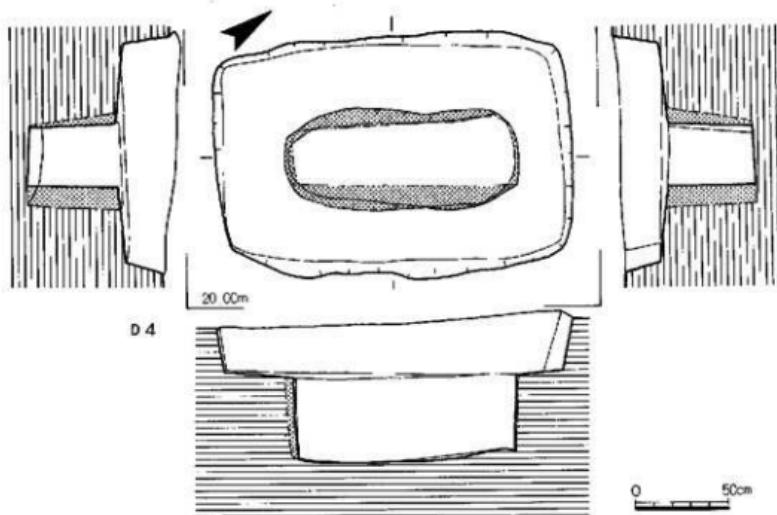
18 6号土塚墓出土石鏡

## 3号土塙墓

3号土塙墓は、2号土塙墓と4号土塙墓との間に位置し、主軸をN-28°-Eにとり、平面形が隅丸長方形を呈する。二段掘りで、一段目の掘り込みは、長さ168cm、幅80cm、深さ36cmである。二段目の掘り込みは、一段目の掘り込みより相当西に片寄った位置を選んで、長さ108cm、幅31cm、深さ9cmで形成されている。塙底は一段目の掘り込みと同様に足位の方がやや低くなっている。短側壁から25cmの範囲が、深さ8cmで掘りくばめられている。おそらく、円形



19 3号土塙実測図(縮尺1/30)



20 4号土塙実測図(縮尺1/30)



▲21 3号土塙墓

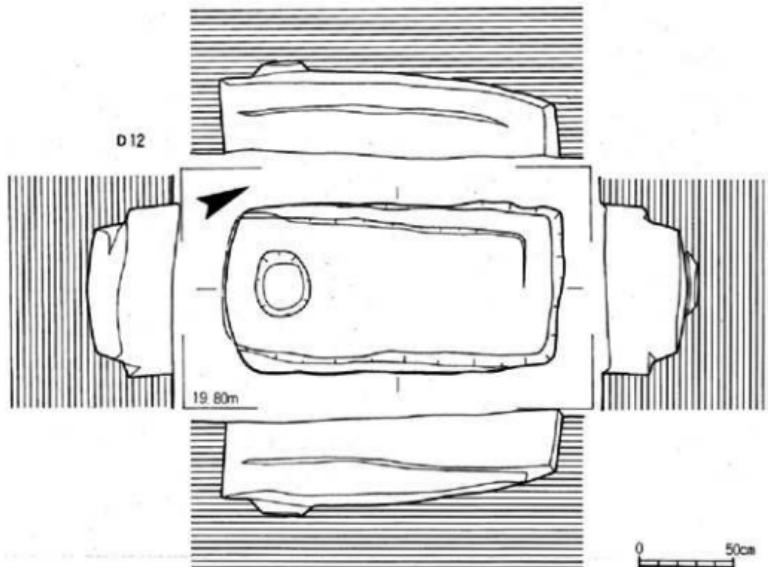


▼22 4号土塙墓

ピット状を呈していたものと思われる。13号土塙墓あるいは17号土塙墓と、まったく同一の方向をとっている。

#### 4号土塙墓

4号土塙墓は、3号土塙墓から70cmの位置にあって、主軸をN-34°-Eにとる。見掛け上、3号土塙墓の南東がわ側壁と、この4号土塙墓の南東がわ側壁が一線に並ぶようであるから、時間的にも、あまり隔たりはないものと思われる。3号土塙墓と同様、二段掘りで形成され、一段目の掘り込みは、長さ191cm、幅127cm、深さ27cmを測る。二段目の掘り込みは、一段目の掘り込みのはば中央に、長さ126cm、幅53cm、深さ46cmで形成される。二段目の掘り込みの内側に四壁が確認される。小口の突出はなかったが、木板状のものが、はめこまれていたのではなかろうか。四壁は長さ112cm、幅は南西がわ短側壁で28cm、北東がわ短側壁で34cmを測る。北東がわ短側壁の方が幅が広いことと、塙底の北東部分がやや高くなっていることからみて、北東に頭位をとっていたものと考えられる。



▲23 12号土塙墓実測図（縮尺1/30）

▼24 12号土塙墓



## 12号土塙墓

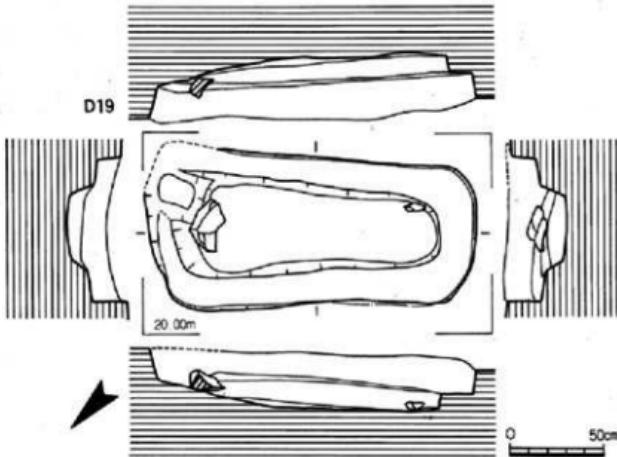
12号土塙墓は、14号土塙墓の北東90cmの位置にあって、主軸をN-24°-Eにとり、平面長方形を呈する。左右の長側壁と北東の短側壁の一部内側に、さらに二段目の掘り込みと思われるものがあるので、一応二段掘りの土塙墓と考える。一段目の掘り込みは、長さ181cm、幅90cm、深さ25cmを測る。二段目の掘り込みは、長さ158cm、幅66cm、深さは、北東部で9cm、中央部で20cmと南西にむかって深くなるが、足位の円形ピットを境にして、南西短側壁部で19cmと高くなる。また、横断面をみても中央部が最も深く、左右が高くなり、一見、塙底は舟底状を呈している。足位の円形ピットは、径30cm、深さ6cmを測る。

## 19号土塙墓

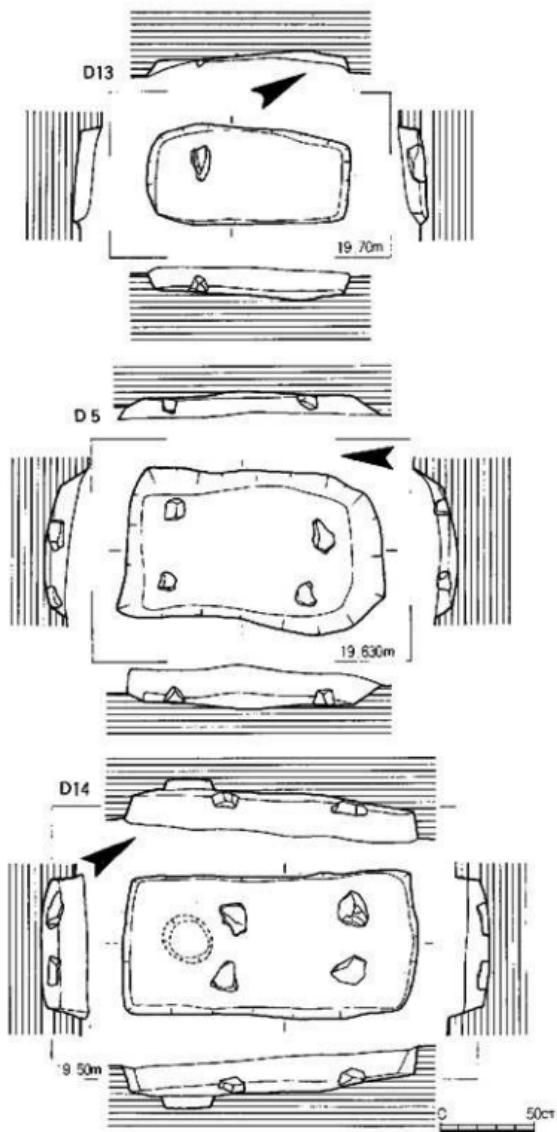
19号土塙墓は、4号土塙墓の北西1.5mに位置し、主軸をN-46°-Eにとる。平面は隅丸長方形で二段掘りで形成されている。また、下月隈天神森1号墳の横穴式石室右側壁の外側1mの位置にあるため、墳丘の下になると思われる。一段目掘り込みは、長さ178cm、幅78cm、深さ20cmを測るが、南西部は古墳構築の地山整形時に一部削平されたようである。二段目掘り込みは、長さ143cm、幅は北東で55cm、南西で35cm、深さ12cmを測る。塙底が南西にむかってゆるやかに下がっているが、この傾斜は、一段目掘り込み面も同様である。あるいは、旧地形にそったものかと思われる。頭位に28cm×15cm×10cmの石がある。石質は珪化木。足位の壁角にも10cm×4cm×3cmの角礫がある。頭位の石は、二段目の掘り込みの塙底に置かれたような出土状態を示していることから、置石の転落というよりも、一見、石枕様の觀を呈する。



25 19号土塙墓



26 19号土塙墓実測図(縮尺1/30)



27 5・13・14号土塙墓実測図(縮尺1/30)

## 13号土塙墓

15号土塙墓と20cmの間隔で並び、北東の長側壁がほぼ一線をなす。主軸をN-28°-Eにとり、長さ108cm、幅52cm、深さ13cmを測るが、上部は削平されていて塙底のみを残す。塙底は北東部がやや下がり、南西部に18cm×10cm×8cmの角礫がある。前記した14号土塙墓の角礫と同様に、塙底にえらべられているようで、置石の転落とは考えられない。土塙の幅は、南西の短側壁がわがやや広くなっている。

## 5号土塙墓

8・9号土塙墓の西側に位置し、主軸をN-2°-Eにとる。上部は下月隈天神森1号墳構築の際の地山整形時に削平されているが、長さ137cm、幅80cm、深さ11cmを測る。塙底北がわが最も高く、中央部はやや低く、北頭位であったと思われる。壁の四隅近くの塙底に10cm×10cm×8cmほどの



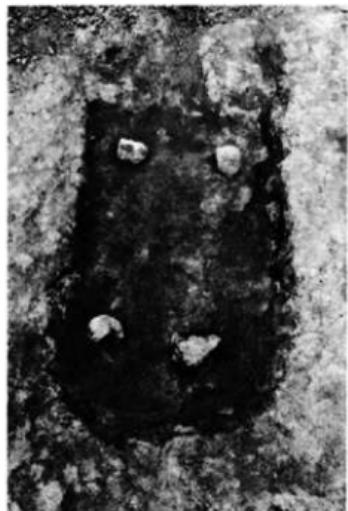
28 13号土塚墓

角礫が1個ずつ置かれている。北部の2個と南部の2個の石の間は70cmあり、北の2個の石の間隔は28cm、南部の2個の間隔は18cmで、南部の方が狭くなっている。

## 14号土塚墓

14号土塚墓は、15号土塚墓の西1mのところにあって、主

軸をN-35°-Eにとる平面が長方形の土塚墓である。下月隈天神森2号墳の墳丘下になっていたと思われる。長さ157cm、幅75cm、深さ25cmを測る。塚底が南西にむかって傾斜し、短側壁から20cm前後のところに径27cm、深さ6cmの円形ピットがある。塚底の傾斜は、土塚の掘り込み面の地山の傾斜に一致する。塚底の円形ピット北東がわには、15cm×15cm×5cmほどの4個の角礫を、平坦な面を上にして、ほぼ同一レベルになるように配列している。4個の石は、土塚墓の長軸平行に50cm、短軸平行に10cmから15cmの間隔をとって置かれている。

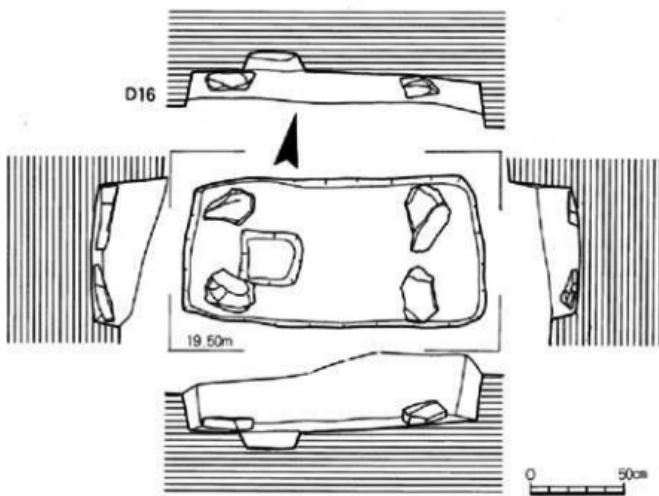


29



30

14号土塚墓



31 16号土塙墓実測図（縮尺1/30）

### 16号土塙墓

16号土塙墓は、群中最南端に位置する。天神森2号墳石室直下にあり、主軸はN-79°-Eで、方向が他と際立って異なる。長さ160cm、幅80cm、深さ38cmを測り、平面は長方形を呈する。塙底は東から西にゆるやかに傾斜しており、東頭位と考えられる。西の短側壁から30cmの位置に長さ32cm、幅28cm、深さ9cmの方形ピットがある。不明確だった3号土塙墓を除くと唯一の方形ピットである。塙底四隅近くに各1個の扁平角礫が上面のレベルをほぼそろえて置かれている。足位側の2個は14号土塙墓と異なって方形ピットと西短側壁の間に置かれている。石は30cm×20cm×5cmの相似た大きさで、西側の石は25cm間隔で、東側のは8cmの間隔をもって置かれている。



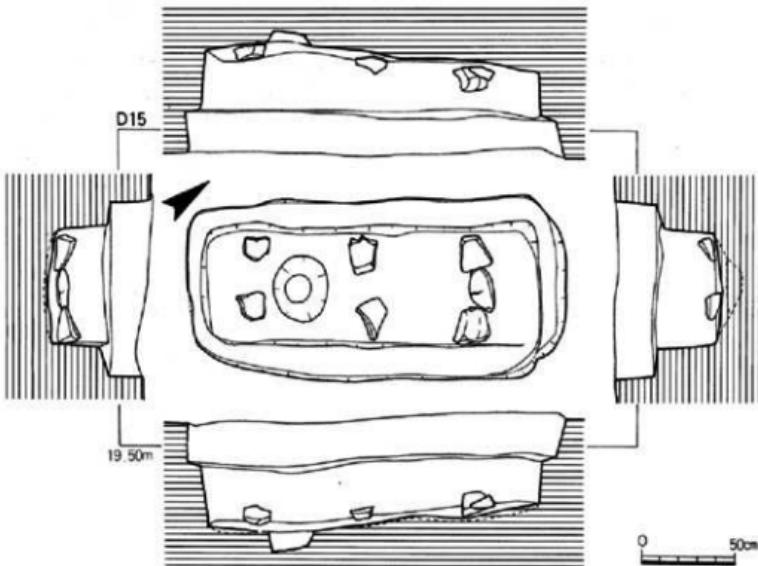
32 16号土塙墓

## 15号土塙墓

13号土塙墓から20cm南西がわに位置し、主軸をN-36.5°-Eにとる。14号土塙墓とは北東の短側壁が一線をなして並び、13号土塙墓とは南東の長側壁が一線をなす。二段掘り土塙墓で、一段目は長さ201cm、幅95cm、深さ20cm、二段目は一段目の中央部にあり、長さ181cm、幅65cm、深さ30cmを測る。塙底は南西に傾斜し、南西短側壁から35cmの所に径28cm、深さ11cmの円形ピットをもつ。塙底に並ぶ7個の扁平角礫の上面レベルは塙底の傾斜に添い、頭位がわと思われる北東短側壁平行位置に3個、塙中央部に13cm間隔で2個、さらに円形ピットより短側壁がわに15cm間隔で2個ある。北西長側壁がわの3個は一線に並ぶが、反対がわは足位の石がやや内側になっている。



33 15号土塙墓



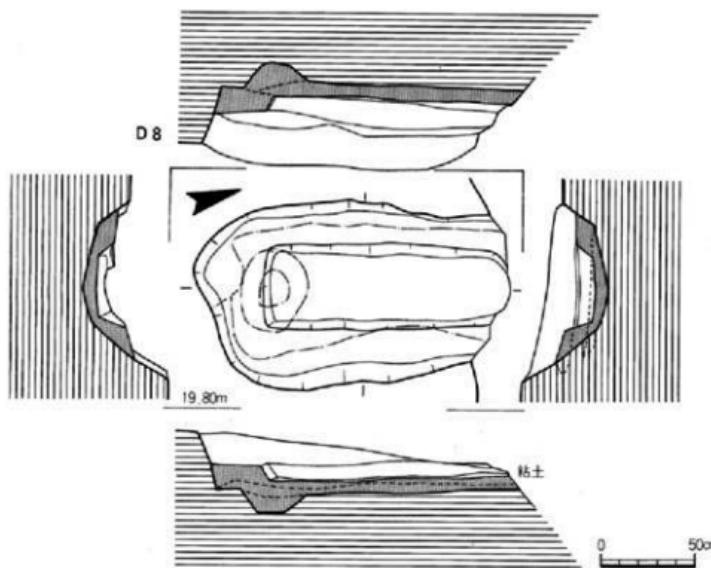
34 15号土塙墓実測図(縮尺1/30)

## 8号土塚墓

5号土塚墓の東にあり、主軸をN-14°-Eにとる。上部、特に西方は1号墳の地山整形時に削平され、北がわ短側壁は古墳時代以降の地下げにより破壊されており、復原長180cm、幅95cm、深さ45cmである。塚底は北から南へゆるやかに傾斜し、南がわ短側壁より13cm内がわに径35cm、深さ10cmの円形ピットがある。塚底に厚さ約7cmの灰白色粘土を敷きつめ131cm×45cm×9cmの埋葬主体部を形成する。粘土壁は外傾45度だが、木棺埋葬も考え得る。塚底のピットにも粘土が詰まっていたことは、この場合、遺体埋葬時には塚底のピットが不必要になっていたと考えられる。



35 8号土塚墓



36 8号土塚墓実測図(縮尺1/30)

## 9号土塙墓

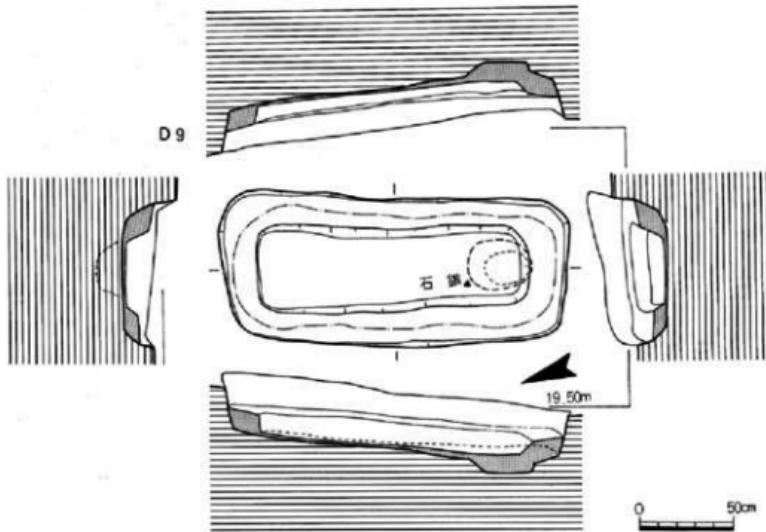
8号土塙墓の南で主軸をN-18°-Eにとり、長さ 183cm×幅78cm×深さ30cm。塙底は北から南へ土塙上面の地山とほぼ同角に傾斜する。南がわ短側壁近くに径38cm、深さ6cmの円形ピットがある。8号土塙墓と同様に、ピットも含めて塙底に灰白色粘土が敷き詰められ、厚さは中央部で1cm~2cm、両短側壁がわで10cmを測り、146cm×45cm×10cmの埋葬主体部を形成する。木棺葬の可能性を有する。円形ピット周縁附近より石鎧出土。石鎧は、安山岩製。最大幅1.5cmで先端部を欠失。両側の調整剝離は外側にやや湾曲して全体に丸みをもち、抉り込みは浅い。



◆37 9号土塙墓出土石鎧実測図  
(縮尺3/5)



38 9号土塙墓



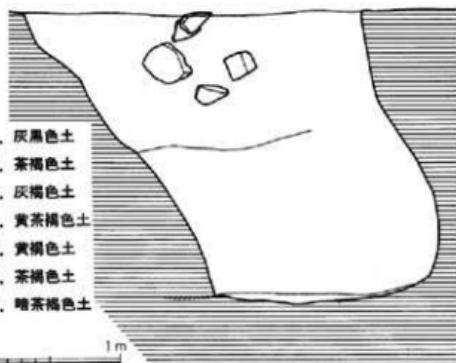
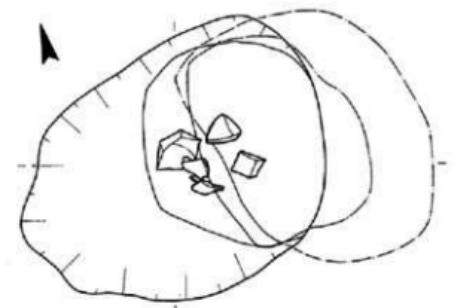
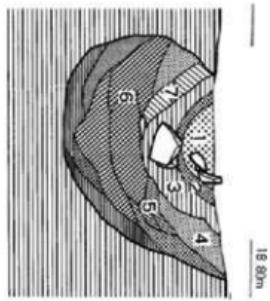
39 9号土塙墓実測図 (縮尺1/30)

## 2. 竪穴

土塙墓群の西方約30mの丘陵先端近くから単独に検出される。後述する掘立柱建物跡や弥生時代の溝状遺構から7mの所で、それらとの関係が考えられるが土器は出土せず時期は不明。竪穴上面は東西225cm×南北175cmの梢円形。



40 竪穴



41 竪穴実測図（縮尺1/40）

西壁は約45度で東に傾斜し、東壁は深さ60cmのところから大きく外方に湾曲して袋状を呈し、深さは205cmを測る。土層断面を見ると、竪穴はレンズ状堆積で埋まり、底から135cm附近から上に角礫数個の転落がある。最上層には、径70cm、中央部の厚さ23cmのレンズ状に堆積した木炭を多量に含む灰黑色土が観察される。

### 3. 下月隈天神森1号墳

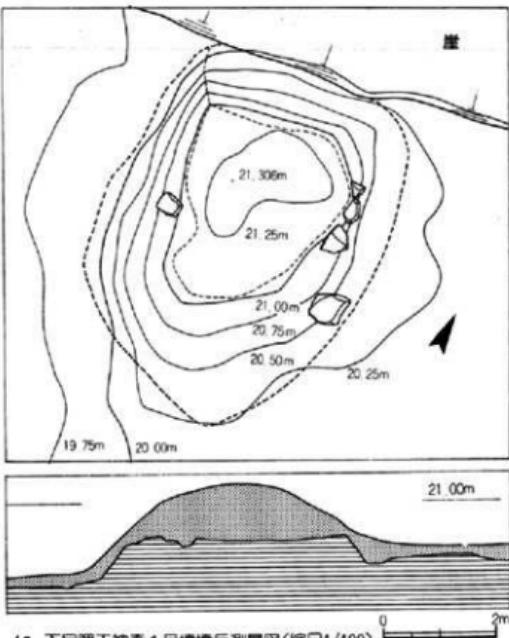
下月隈天神森2号墳の北に位置する1号墳は、地元の人々によれば、今回の調査で東がわの奥壁と確認された部分の一部は、すでに半世紀以上前に開口しており、石室内部をのぞくことができたという。すなわち、その頃までは天井石も残っていたと思われる。それを裏付けるように石室内部は荒らされ、副葬品の残存もわずかで、床に敷き詰められていた角礫も、開口していた奥壁寄りの部分が、かなり広範囲にはがされ、持ち出されていた。

また、天井石、両側壁、奥壁等も、腰石と一段目積み石の一部分を残すほかは、大半の石材がはずされて、持ち出されており、石室内部には土砂が充満していた。このため、下草、雜木の伐採後、現状写真を撮影し、現況図を作り、ただちに石室内部の覆土除去作業を開始する。

以下、項目別に下月隈天神森1号墳について詳述する。



42 下月隈天神森1号墳の発掘前のようす



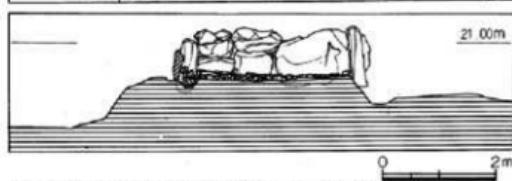
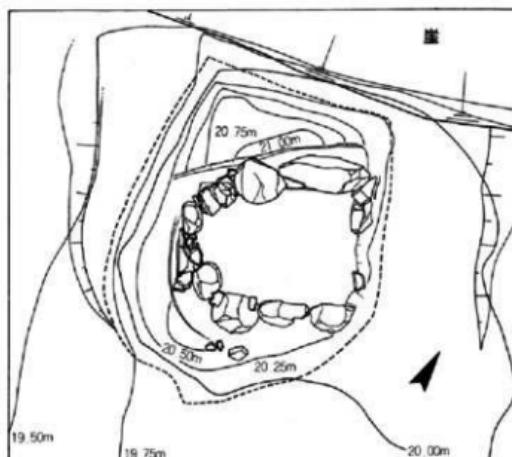
43 下月隈天神森1号墳墳丘測量図(縮尺1/100)

## 墳丘

墳丘は現状で東西約5m、南北約6m、高さ約1.3mを測る。東、北、西の等高線はほぼ直線をして走り、傾斜も急であるが南がわは丸みをもち傾斜もゆるやかである。平面が一見、方形を呈し、さらに地山整形痕と思われるものが封土除去後に北東と北西の墳丘裾部に当ると考えられる位置に認められ、それが直線をなしていたことから、一辺約7mの方墳だったとも考えられるが、周辺が最近まで畑であり、その耕作等によって削られてそのような形を呈するにいたった可能性もある。また、墳丘下には、5~9号、19号の各土塙墓がある。



44 下月腰天神森1号墳封土除去後のようす（南西から）



45 下月腰天神森1号墳封土除去後測量図（縮尺1/100）

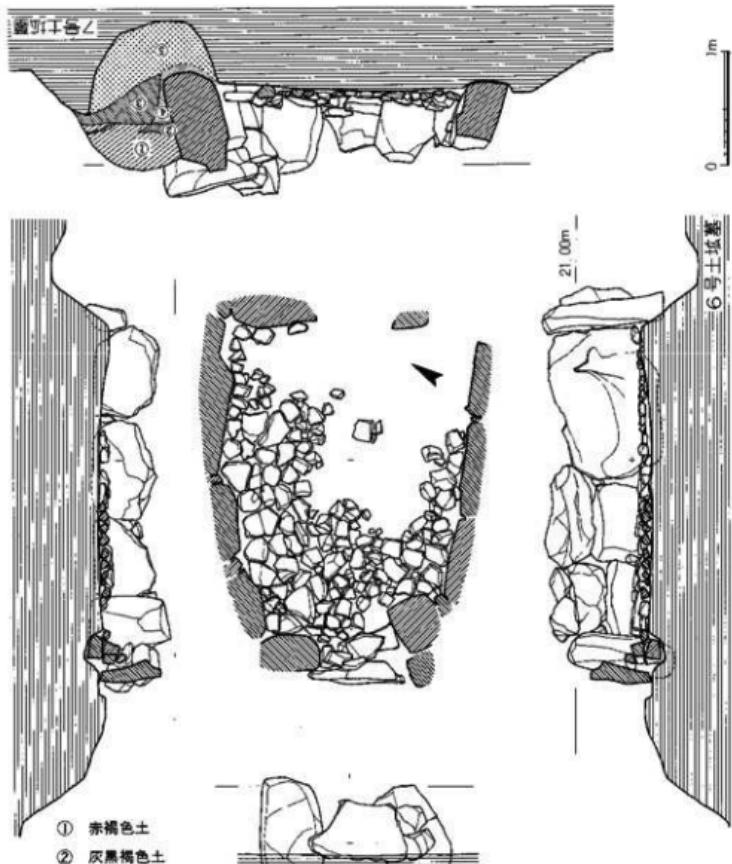


▲46 下月隈天神森1・2号墳全景（手前が2号墳）

▼47 下月隈天神森1号墳と土塁墓



34 3. 下月殿天神森1号墳



48 下月殿天神森1号墳石室実測図（縮尺1/50）



3. 下月限天神森 1 号墳



▲ 50 下月限天神森 1 号墳石室内部  
(石室入口がわから)



▲ 52 下月限天神森 1 号墳石室内部



▲ 49 下月限天神森 1 号墳石室全貌① (石室入口がわから)



▼ 51 下月限天神森 1 号墳石室底面

## 遺物出土状態

前述のように、すでに盜掘等にあっているため副葬品の出土はないものと思ったが、わずかながら貴重な遺物を得る。

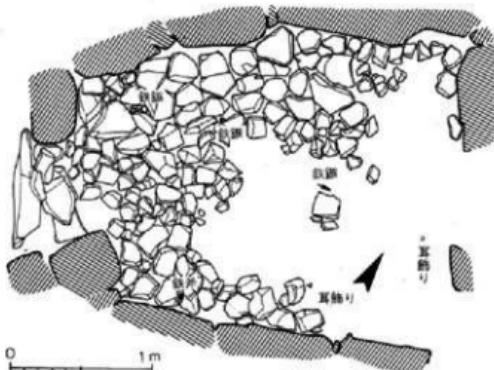
**須恵器** 石室内の覆土を除去している時に比較的上部から出土する。石室内副葬品と思われる。

**鐵 鐛** 原位置を保つものは1本もないと思えるが、すべて石室内床面の主軸線より左がわから出土。特に集中する個所はない。

**鍬 斧** 石室内右側の袖石から50cm、右側壁から10cmの位置の敷石の間に転落した状態で出土する。

**耳飾り** 対をなすと思われる一組が出土。その一方には中間飾が残されている。2個とも、すでに敷石がはずされていた奥壁部の、主軸線より右がわから出土する。複環だけのものは、奥壁から30cm、右側壁から70cmの位置から出土。中間飾のあるものは、そこから75cm離れた、右側壁から30cmの石室内中央部から出土する。

**刀 子** 2本出土するが、左側壁寄り中央部から出土する。



53 下月隈天神森1号墳石室内副葬品出土位置図(縮尺1/40)



▲54 耳飾りの出土状況



▼55 鉄鈴の出土状況

## 出土遺物

須恵器杯蓋 2個体出土する。1は墳頂部で表探する。

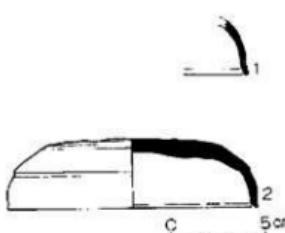
口径を測り得ないほどの細片であるが、かなり急な立ち上がりを示し、1条の凹線によって体部と天井部を区別している。口縁内面には明瞭な段をもち、口縁は丸くおさめる。濃灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。

2は、二分の一足らずの破片であるが、外径13.4cm、器高3.8cmを測る。体部はほぼ垂直に近い立ち上がりを示し、天井部はへら削りされ平坦である。口縁内面には段があり、天井部と体部との境は凹線で区別している。内面は横ナデによって仕上げる。灰色を呈し、胎土中に砂粒が多い。焼成は普通である。

鉄斧 1個出土している。両刃の張り出した小型の片である。鉄板を突き合わせて柄を挿入する袋部が形成されているが、断面は横円形で接合部はしっかりしている。全長約6cm、刃長約3cm、刃幅約3.2cmで刃部は弧状を呈し、断面は船刃状の両刃の片である。

刀子 10は全長13.8cm、刀身の長さ9.4cm、茎長4.4cmの平棟平造りの刀子である。関部から切先にむかって1cm位は、やや内反りになっているが、その先は徐々に細くなり、やや丸みをおびた切先に至る。刀身幅は関部から1.7cmの所で1.3cm、切先から3.7cmの所で1cmを測る。棟幅は全体を通じて0.3cmである。茎の棟は、関部を境にして刃部の棟に対してやや钝角をなす。茎も平棟造りであり、茎尻は丸みをおびている。完形品である。11は、現存長9cmの平棟平造りであるが切先部と茎部を欠失する。木質部が長さ4cmにわたって残存するが、この部分が蓋になるのである。岡上の推定復原によれば、刀身は長さ5.5cmで、身幅の0.8cmと相まって非常に小型の刀子ということになる。この他にもう1本、図示しなかったが刀子の残片と思われるものが出土しているので、合計3本以上副葬されていたことになろう。

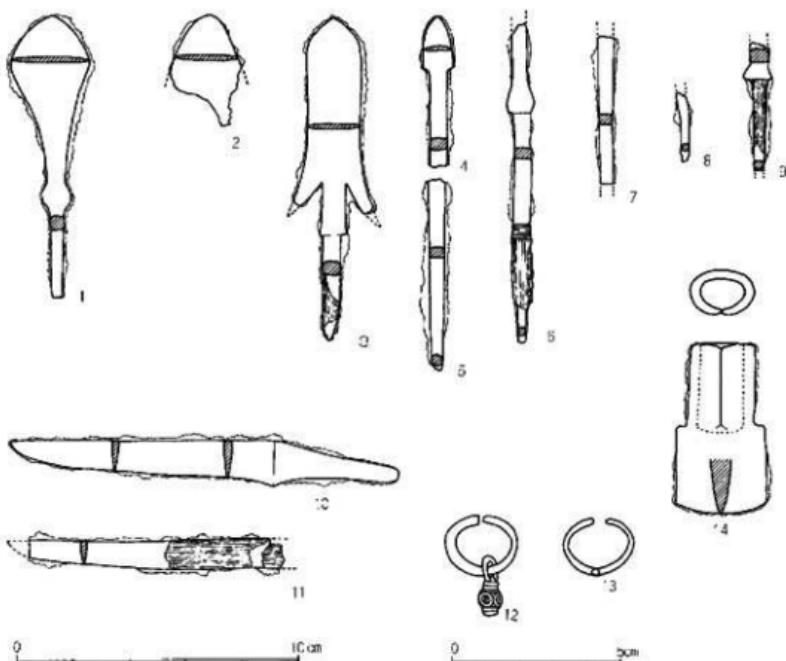
鉄鎌 1~3は平根式、4は尖根式の有茎鎌である。1は現存長10cmで、鎌身幅2.8cmを測る。切先のフクラが鎌身の中央部から内湾する定角形を呈しているが、左右対称ではない。鎌身は両丸造りというよりも扁平に近い。鎌身と茎との間には鍼状突起がみられる。2も1と同じ型式に属するものと考えられるが、鎌身部のみで長さ4cmを残存するものである。3は全長11.5cm、鎌身長5.8cm、鎌身幅1.9cmを測る。長い鎌身には、ゆるやかに外方へ開く逆刺がつき、長さ1.9cmの範囲がつづき、茎へと至る。茎には木質部の



56 下月隈天神森1号墳出土工遺物  
須恵器杯蓋 (縮尺1/3)



57 下月隈天神森1号墳出土遺物



58 下月限天神森1号墳石室内出土遺物実測図（縮尺1/2・3/5）

残存が認められる。この3の鉄鎌は、その形状が鎌のない点を除けば、三重県石山古墳出土の鎌鎌と酷似する。4と5は同一個体であろうと思われるが直接にはつながらない。全長約12.3cm、鎌身幅1cmの片刃造りの三角形式である。闊から長さ約8cmの笠被がつづき、茎へと至る。稜状突起は観察できない。6～9は笠被と茎部の破片である。6は現存長7cmの笠被の下に長さ4.2cmの茎部を残したものであるが、その笠被直下の茎部には1cmにわたって糸をまいた痕跡がある。9は、笠被の下部に稜状突起をもち、茎部へ至る破片であるが、茎部には本質部の残存が認められる。7は笠被の、8は茎部の、破片である。上記いずれの場合も笠被は断面が扁平である。

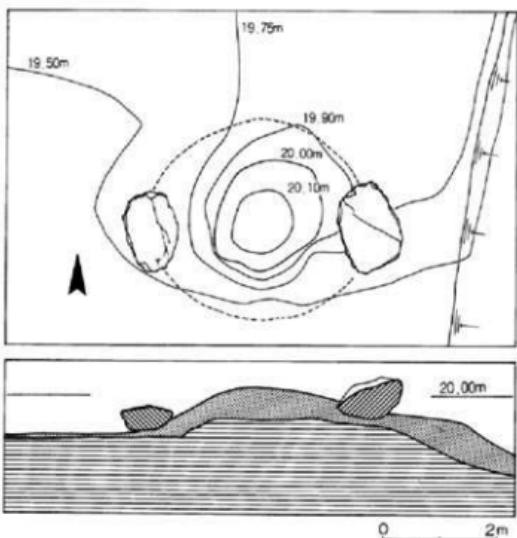


59 下月限天神森1号墳石室内出土遺物

耳飾り 2個出土しており、対をなすものと考えられる。耳飾り12には中間飾が残っているが、耳飾り13は耳環部のみである。耳環は12、13とも長径2.1cm、短径1.8cmで、断面は直径0.25cmの円形を呈す。中実の銅芯に金箔を置いたものであるが、金箔の保存状態は不良。耳飾り12は、耳環に小環を通して、この小環に幅約0.15cmの連結金具としての板金を折り曲げて懸垂し、中間飾の中をくぐらせている。更に下方の垂下飾へとつながっていたものと思われるが、発見されなかった。また中間飾は、径約0.4cmの小円環が鳥龍形に鍍付けされ、その天井部と底部は、各々2個の同規格の小円環が積み重ねられて鍍付けされている。全長約1cmで、表面の金箔が剥落した個所が黒色を呈していることからみて、銀芯に金箔を置いたものであろう。

#### 4. 下月隈天神森2号墳

下月隈天神森2号墳は、かなり以前から2個の大石が地上に露呈し、墳丘も大半が失われており、副葬品も残存しないと思われていたが調査の結果、以下の所見を得た。



60 下月隈天神森2号墳現況測量図（縮尺1/100）

##### 墳丘

東西の大石をはさみ、現状では径4mの円形を呈し、高さ約60cmを測る。北方で検出した幅1m、深さ約0.3mの弧状の溝状遺構は出土遺物がなく時期、性格とも不明であるが、構築時の墳丘縁線と考えると、直徑約15mの円墳だったことになる。

##### 内部構造

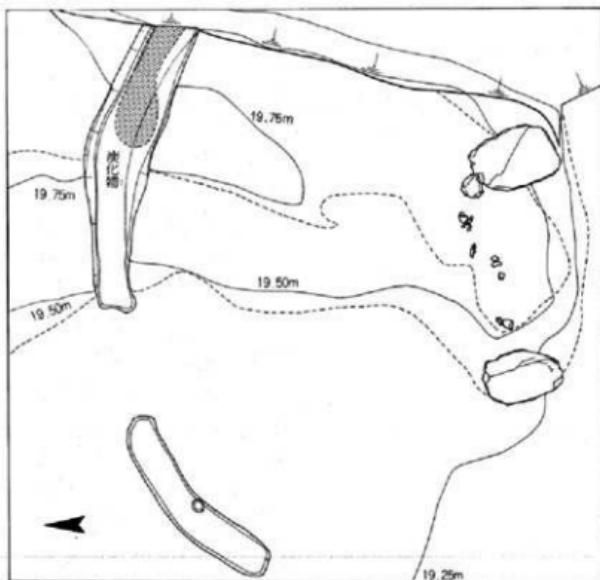
横穴式石室であろうが、破壊がひどく、規模、開口方向とも不明だが、東と西の大石間の床面が2.8mあることから、これを石室の長さとし、西に開口したものと考えられる。また床には、1号墳と同様に角礫が敷き詰められていたと思われる。

##### 遺物出土状態

1号墳以上に石室の保存状態がわるいが、鐵鎌と直刀、鎌の出土を見る。



61 下月隈天神森2号墳全景（奥に見えるのが1号墳）



0 2m

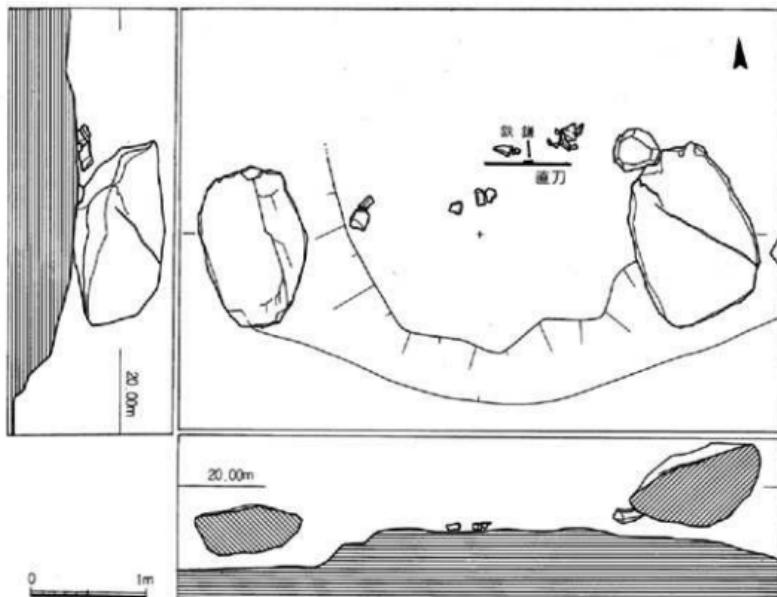
**直刀** 左側壁寄りの奥壁  
近くから、切先を西に、刃部  
を石室中央部すなわち南に向  
けた状態で出土する。

**鎌** 直刀と並べた状態で、  
先端を西に、刃部を南に向か  
て出土する。

**鉄** 鉄 残片ではあるが4  
本が石室中央部から出土する。  
床の敷石もすでになく、原位  
置ではないと思われる。



63 下月隈天神森2号墳全景(覆土除去後のように)



64 下月隈天神森2号墳石室実測図（縮尺1/50）

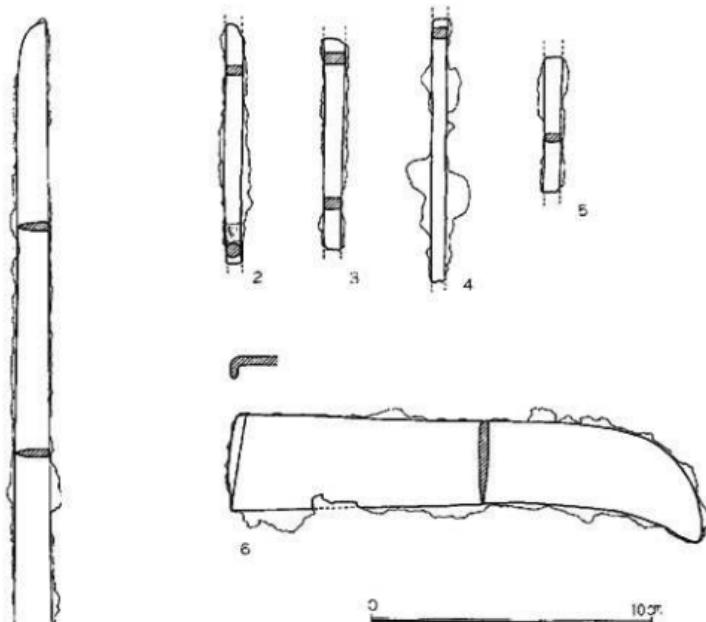
**線 削**  
東の大石（150cm×100cm×60cm）、すなわち奥壁の一部をなしていたと思われる石材の裏がわに断面V字状の、写真に示したような線削がある。  
石質は滑石。



▲65 石室裏がわに見える線削

▼66 直刀・錐の出土状況





67 下月隈天神森2号墳石室内出土鐵器実測図（縮尺1/2・1/4）

## 出土遺物

**直刀** 現存長75.6cmで茎尻を欠失するほかは保存状態良好な平棟平造りの直刀である。刀身の長さ63.4cm、刀身幅2.6cm、刀背の厚さ0.7cmを測り、フクラがつく。茎部は現存長12.2cm、幅1.2cm、厚さ0.4cmである。関(区)の部分は錆が厚く覆っているため判断しかねるが、一見、棟関刀闘ともに造られているようである。目釘孔も錆のために不明。なお関の部分には甥状の痕跡が認められる。

**鐵 鐵** 4本の出土を見るが、いずれも笠被あるいは革部の破片であって錐身の形態は不明である。2は現存長8.5cmを測るが、現存長7cmの断面扁平な笠被とそれに続く断面円形の茎部の破片である。茎部には、木質部の残存が認められる。3は現存長7.5cmで断面扁平な笠被の破片である。錐身寄りの方がやや太くなっている。4は、現存長9cmの笠被の破片である。5も現存長4.8cmの笠被の破片である。



直刀 (1/5)



鐵頭 (1/2)



鎌 (1/2)

## 68 下月隈天神森2号墳石室内出土鉄器

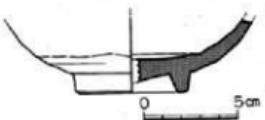
**鎌** 全長は約17cm、刃幅は基部で約3.4cm、中央部で約3cm、背部の厚さは約0.3cmを測る。刃部はやや内湾し、両刃で、刃部先端が鉤状に曲がる曲刀鎌の形態をとる。基部は直角に0.4cmほど折りかえし、刃部に対して鈍角をなす。基部寄りの刃部に一部欠失した個所があるが、ほぼ完形品である。

## 5. ピット群

下月限天神森1号墳に接した西側の丘陵斜面から、東西3m、南北8mにわたってピット群を検出する。ピットには、平面が円形のものと楕円形あるいは長方形のものがある。大半のものは不整形である。大きさは、最も大型の楕円形のもので、長径が100cm、短径が70cm、深さ50cm足らずである。小型の円形ピットは、径20cm、深さ10cm前後を測る。ピットからの遺物の出土はなく、一見、並びが認められるようであるが、建物にはならないと思われる。この種のピットが、丘陵西側先端部の掘立柱建物跡のピット以外には、この丘陵上のどこからも検出されなかつたということは、この丘陵の利用を考える上では、きわめて重要な意味をもつものと考えるが、残念ながら、性格、時期ともに不明である。ただし、表土除去の際、図示したような青磁の底部が出土している。青磁は現存高4cm、体部径、復原で12.9cmを測る。高台径6cm。高台の一部とその上部の残片である。釉には貫入はない。

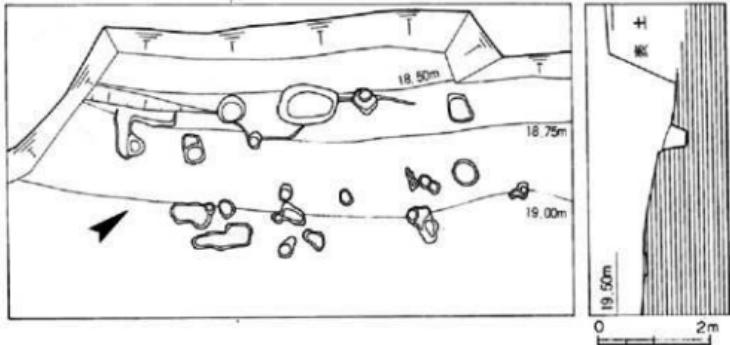


▲69 ピット群全景（南西から）



◀70 ピット群出土青磁実測図（縮尺1/3）

▼71 ピット群実測図（縮尺1/100）

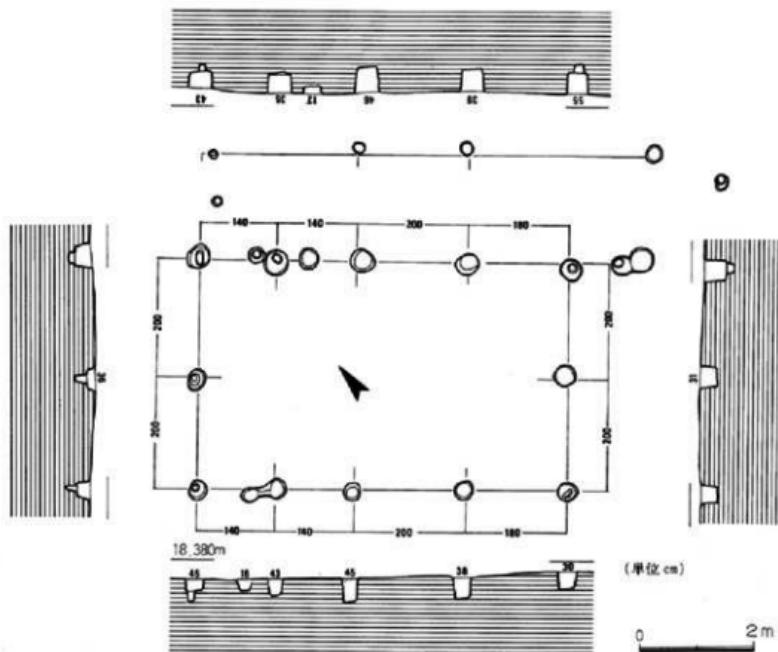


## 6. 掘立柱建物跡

丘陵西側先端部において検出される。柱間が4間×2間で、南西を向き、柱通りN-Eで、48°-Wをとる。北東の丘陵内がわに底をもつと思われる。桁行約660cm、梁行約400cm、柱穴径40cm、深さ40cm、柱痕跡の径約15cmを測る。時期、性格とも不明。調査区南東にも別棟建物が存在するらしい。



72 掘立柱建物跡（北東から）



73 掘立柱建物跡実測図（縮尺1/100）

## IV おわりに

下月限天神森遺跡では、完掘の結果、土塙墓と古墳、掘立柱建物跡、竪穴、ピット群が確認された。周知の遺跡であった天神森古墳群を、道路建設のためとはいいながら、破壊せざるを得なかつたことは、文化財が、文化財保護法にいうような国民共有の財産という理念からほど遠いという現実を改めて考えさせられた。それと同時に、今回、土塙墓の検出をみて、遺跡とは地下に埋蔵されている故に、表面の観察だけでは正確な内容を把握することが不可能であるということ、ひいては、遺跡の周知化の場合における遺跡の内容呈示のむずかしさ、問題点を改めて教えられた。

以上で、下月限天神森遺跡の報告を終わるが、最後にあたって、整理してまとめとしたい。

### 土塙墓について

月限丘陵における他の遺跡の在り方からみて、当然、襄棺墓の検出をみると考えていたが、予想に反して1基の検出もなかった。これに対して、土塙墓19基で構成された共同墓地が他に例をみないだけに、その歴史的・社会的背景等に特異なものを感じる。

特に土塙墓の中に、小型のピットや角礫を塙底に配したものが多いことは特記すべきことであろう。なかでも角礫は、本棺を安置する台の役目をもっていたのではなかろうか。ピットの中には、遺体埋葬の時点にはその役割を終えていたものと、そうでないものとがあった。また、6号土塙墓や9号土塙墓から出土した石鎚の、先端部あるいは基部が欠失していたということは、これらの石鎚が副葬品ではなく遺体に射込まれていたのではないかと考える。また、土塙墓が切り合わず、整然と並んでいたことは、短期間に墓地が形成されたことを物語るものであろう。その時期は宝満尾遺跡あるいは下月限宮ノ後遺跡の土塙墓を考慮すれば、弥生中期から後期にかけてであろう。

### 下月限天神森1・2号墳について

1・2号墳とも墳形不明であるが、内部構造に横穴式石室をもつ。1号墳からは、鐵鎌、刀子、鐵斧、耳飾りが、2号墳からは、直刀、曲刀鎌、鐵鎌等が出土する。追葬を考慮しなければならないが、1号墳の場合は、銅鎌の形を受けた鐵鎌、中間飾の残された耳飾り等からみて、その年代は5世紀後半を下るものではないと考える。また2号墳も、曲刀鎌を年代のよりどころとするならば、5世紀後半前後といえようか。しかし、1号墳と2号墳の先後関係については、決定づける資料を持ちあわせない。

以上簡単ではあるが、下月限天神森遺跡発掘調査のまとめとしたい。



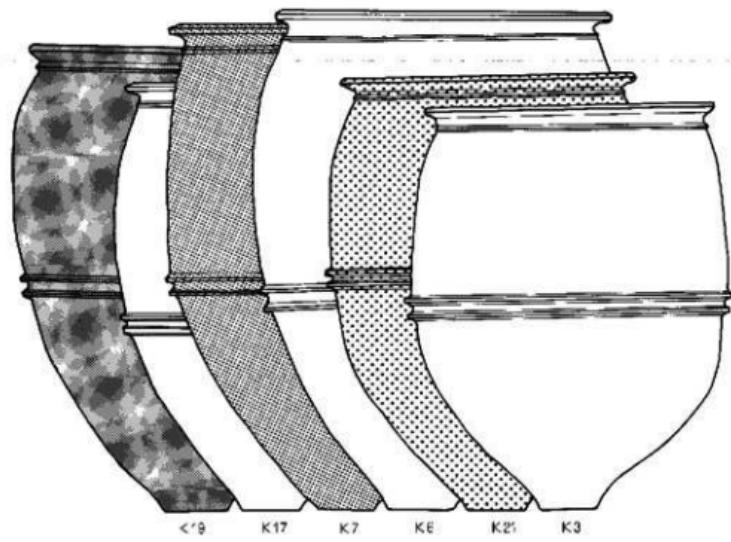
74 下月隈遺跡群遠景

宝満尾遺跡

下月隈天神森遺跡 下月隈宮ノ後遺跡

福岡市博多区

下月隈宮・後遺跡



## 本文目次

I はじめに	53
II 遺構	57
1. 裹棺墓	57
2. 土塙墓	103
III 下月隈宮ノ後遺跡裹棺墓出土の人骨	113
IV おわりに	119

- ・本書は、福岡市教育委員会が昭和54年度の国庫補助を受けて、1979年12月22日から1980年3月31日までの約3か月間にわたって発掘調査を実施した福岡市博多区大字下月隈字宮ノ後に位置する弥生時代の裹棺墓および土塙墓の発掘調査報告書である。
  - ・発掘調査の速報はすでに「福岡市埋蔵文化財調査報告書 第61集」として発行されているが、本書をもって正式報告書とする。
  - ・遺跡の発掘調査には、福岡市教育委員会文化課の飛高憲雄、力武卓治、岡島洋一(事務担当)が当り、本書の執筆・編集は飛高と力武が行なった。
  - ・本書に記載した裹棺墓、土塙墓の遺構実測図は縮尺 $\frac{1}{20}$ 、 $\frac{1}{10}$ 、 $\frac{1}{5}$ 、 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{1}$ 、裹棺の写真は縮尺 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{1}$ に統一している。
  - ・人骨の取りあげは九州大学医学部永井昌文教授と第2解剖学教室の郡須哲夫、中橋幸博、江口和洋、田中良之氏に依頼し、鑑定結果については永井教授より原稿をいただき本書に収録した。
  - ・遺跡の発掘調査、調査事務所の設置、裹棺の復原作業および本書の作成には、次の方々のご協力を得ました。ここに氏名を記して感謝の意を表します。(敬称略)
- 江越初代 関加代子 関政子 鶴出サヨ子 中山政子 平島龍吉 山内タツ子 荒津幸治  
実瀬栄治 河野徹也 藤田太 岩永真弓 中村満代 小島由美子 安武裕子 溝口博子  
武本延子 花畠照子 藤たかえ 月江英海 光安慎太郎

## 下月限宮ノ後遺跡挿図目次

1	宮ノ後遺跡遠景（東から）	54
2	宮ノ後遺跡発掘前（東から）	54
3	宮ノ後遺跡発掘前（西から）	54
4	宮ノ後遺跡周辺地形図（縮尺1/400）	55
5	宮ノ後遺跡遺構配置図（縮尺1/100）	56
6	宮ノ後遺跡祭祀風景	57
7	宮ノ後遺跡全景	57
8	第1号壇棺墓実測図（縮尺1/20）	58
9	第1号壇棺墓実測図（縮尺1/6）	58
10	第1号壇棺墓	59
11	第1号壇棺（縮尺1/5）	59
12	第2号壇棺墓実測図（縮尺1/20）	60
13	第2号壇棺墓	60
14	第2号壇棺墓実測図（縮尺1/6）	60
15	第2号壇棺（縮尺1/5）	61
16	第3号壇棺墓実測図（縮尺1/20）	62
17	第3号壇棺墓	63
18	第3号壇棺（縮尺1/10）	63
19	第3号壇棺墓実測図（縮尺1/8）	64
20	第4号壇棺墓実測図（縮尺1/20）	65
21	第4号壇棺墓	65
22	第4号壇棺墓実測図（縮尺1/6）	66
23	第4号壇棺（縮尺1/5）	66
24	第5号壇棺墓実測図（縮尺1/20）	67
25	第5号壇棺墓実測図（縮尺1/6）	67
26	第5号壇棺墓	68
27	第5号壇棺（縮尺1/5）	68
28	第6号壇棺墓実測図（縮尺1/20）	69
29	第6号壇棺墓	70

30	第6号墓棺（1・2は縮尺1/6 4は縮尺1/10）	70
31	第6号墓室実測図（縮尺1/6, 1/8）	71
32	第7号墓棺墓実測図（縮尺1/20）	72
33	第7号墓棺墓	73
34	第7号墓棺（縮尺1/10）	73
35	第7号墓棺室実測図（縮尺1/8）	74
36	第8号墓棺墓	74
37	第8号墓棺室実測図（縮尺1/10）	75
38	第8号墓棺室実測図（縮尺1/6）	75
39	第8号墓棺（縮尺1/5）	76
40	第9号墓棺墓実測図（縮尺1/20）	77
41	第9号墓棺室実測図（縮尺1/6）	78
42	第9号墓棺（縮尺1/5）	79
43	第9号墓棺墓	80
44	第9号墓棺墓	80
45	第10号墓棺墓	80
46	第10号墓棺室実測図（縮尺1/20）	81
47	第10号墓棺室実測図（縮尺1/8）	81
48	第10号墓棺（縮尺1/5）	82
49	第11号墓棺墓実測図（縮尺1/20）	83
50	第11号墓棺墓	83
51	第11号墓棺室実測図（縮尺1/6）	83
52	第11号墓棺（縮尺1/5）	83
53	第12号墓棺墓実測図（縮尺1/20）	84
54	第12号墓棺墓	84
55	第12号墓棺室実測図（縮尺1/6）	84
56	第12号墓棺（縮尺1/5）	84
57	第13号墓棺墓実測図（縮尺1/20）	85
58	第13号墓棺墓	85
59	第13号墓棺墓	85
60	第13号墓棺室実測図（縮尺1/6）	86
61	第13号墓棺下棺口縁部	86

62	第13号墓棺（縮尺1/5）	86
63	第14号墓棺墓実測図（縮尺1/20）	87
64	第14号墓棺墓実測図（縮尺1/6）	87
65	第14号墓棺墓	88
66	第14号墓棺（縮尺1/5）	88
67	第15号墓棺墓実測図（縮尺1/20）	89
68	第15号墓棺墓実測図（縮尺1/6）	89
69	第15号墓棺墓	90
70	第15号墓棺（縮尺1/5）	90
71	第16号墓棺墓実測図（縮尺1/20）	91
72	第16号墓棺墓	91
73	第16号墓棺墓実測図（縮尺1/6）	91
74	第16号墓棺（縮尺1/5）	91
75	第17号墓棺墓実測図（縮尺1/20）	92
76	第17号墓棺墓	93
77	第17号墓棺墓	93
78	第17号墓棺（縮尺1/10）	94
79	第17号墓棺墓実測図（縮尺1/8）	94
80	第18号墓棺墓実測図（縮尺1/20）	95
81	第18号墓棺墓	95
82	第18号墓棺（縮尺1/5）	95
83	第18号墓棺墓実測図（縮尺1/6）	95
84	第19号墓棺墓実測図（縮尺1/20）	96
85	第19号墓棺墓	97
86	第19号墓棺（縮尺1/10）	97
87	第19号墓棺墓実測図（縮尺1/8）	98
88	第20号墓棺墓実測図（縮尺1/20）	99
89	第20号墓棺墓	99
90	第20号墓棺墓実測図（縮尺1/6）	99
91	第20号墓棺（縮尺1/5）	100
92	第21号墓棺墓	100
93	第21号墓棺墓実測図（縮尺1/20）	101

94	第21号櫛棺実測図（縮尺1/8）	102
95	第21号櫛棺（縮尺1/10）	103
96	第1, 2, 3, 4号土塁墓	103
97	第1号土塁墓	104
98	第1号土塁墓実測図（縮尺1/40）	104
99	第2号土塁墓	105
100	第2号土塁墓実測図（縮尺1/40）	105
101	第3号土塁墓	106
102	第3号土塁墓実測図（縮尺1/40）	106
103	第4号土塁墓	107
104	第4号土塁墓実測図（縮尺1/40）	107
105	第5号土塁墓	108
106	第5号土塁墓実測図（縮尺1/40）	108
107	第6号土塁墓	109
108	第6号土塁墓実測図（縮尺1/40）	109
109	第7号土塁墓	110
110	第7号土塁墓実測図（縮尺1/40）	110
111	第8号土塁墓	111
112	第8号土塁墓実測図（縮尺1/40）	111
113	第9号土塁墓	112
114	第9号土塁墓実測図（縮尺1/40）	112
115	土取り残土採集の盤査測図（縮尺1/2）	120

### III 下月隈宮ノ後遺跡櫛棺墓出土の人骨 挿図目次

1.	第3号櫛棺墓人骨出二状況	116
2.	第7号櫛棺墓人骨出二状況	116
3.	第9号櫛棺墓人骨出二状況	117
4.	第17号櫛棺墓人骨出二状況	117
5.	第19号櫛棺墓人骨出二状況	118
6.	第19号櫛棺墓人骨出二状況	118

## I はじめに

本遺跡は1979年12月22日から1980年3月31日までの3か月間にわたって発掘調査を実施したもので、すでに速報として1980年3月に福岡市埋蔵文化財調査報告書第61集「下月限宮ノ後遺跡」を発行している。しかし、この速報の編集が発掘調査途中であったために、新たに検出した覆棺墓と土塙墓については未報告となっている。また人骨の検出もあり、九州大学医学部永井昌文教授の原稿もいただくことができたので、ここに合わせて報告し、速報と記述が重複している箇所もあるが、今回の報告を宮ノ後遺跡の正式報告書とする。

本遺跡は福岡市博多区大字下月限字宮ノ後にあることから、大字、小字名を合わせて遺跡名を、下月限宮ノ後遺跡と呼ぶことにした。本遺跡は三郡山地より派生した大城山の山麓に、南東から北西に長さ約7kmにわたって細長く延びた月限丘陵のほぼ中央部に位置している。この月限丘陵の西側には福岡平野が開け、板付遺跡をはじめとする弥生時代前期からの遺跡が知られている。月限丘陵の大部分は終戦後から米軍の弾薬庫などの基地施設が建設され長い間米軍の管理下におかれていった。また福岡空港の騒音で福岡市西区のような大開発はみられなかったが、いくつかの碎石場が山肌をむき出しにしており、地形の変貌は西区以上と言えることができる。また米軍基地が1972年に返還されると、福岡市は席田総合運動公園建設の計画を立てた。文化課は建設工事に先立って1975年より毎年調査を実施している。これまでに4次にわたる発掘調査で弥生時代から古墳時代までの住居跡、古墳等を検出している。この他にも金張遺跡、宝満尾遺跡、持田ヶ浦古墳等の発掘例がある。金張遺跡は1969、1970と1980の3次にわたって発掘が実施された。1次、2次調査では覆棺墓146基、土塙墓25基、石棺墓2基、支石墓らしいもの2基で、土器型式でいう金海式土器から桜馬場式土器まであり、覆棺編年の確立、あるいは人骨などの検討による墓地の構成など多くの成果を得ている。1972年に調査された宝満尾遺跡は宮ノ後遺跡の北900mに位置している。検出された遺構は円墳1基、袋状竪穴11基、石蓋土塙墓3基、覆棺墓6基、石棺墓1基、土塙墓13基等である。4号土塙墓からは漢式鏡が1面出土している。これら月限丘陵に存在する遺跡は、完結性のある遺跡として単独に取りあげるべき性格を有するものか、あるいは、福岡平野に分布する遺跡の後背地として理解されるべきかなどの問題について検討しうる段階になりつつある。

下月限宮ノ後遺跡も周辺遺跡の立地と同じように月限丘陵から西に向かって延びた支丘上にある。支丘の長さは約300m、幅約50mで、支丘先端からは東へ約40mの位置である。本支丘ではかつて覆棺の出土が知られていたものの調査されることとはなかった。1978年、土地所有者

による土取り作業中に数基の  
妻棺が発見され直ちに文化課  
に通報されたのが今回の調査  
の直接のきっかけである。こ  
のため文化課は昭和54年度の  
国庫補助を受けて発掘調査を  
実施したものである。発掘調  
査は土取りが中断されていた  
 $15.2m \times 16.2m$  の  $245m^2$  を発掘  
区として設定した。発掘区は  
昭和初期の地図によると標高  
は約24mあるが、現在は標高  
23mを測る。北側は土取りで  
丘陵が切断されており発掘区  
は北東方向にやや傾斜してい  
る。検出した遺構は妻棺墓21  
基、土塚墓9基で、5基の妻  
棺墓から人骨が出土した。副  
葬品や外部施設等は存在して  
いなかったが、土取り崩壊土  
から破壊された妻棺片と人骨  
が出土した。



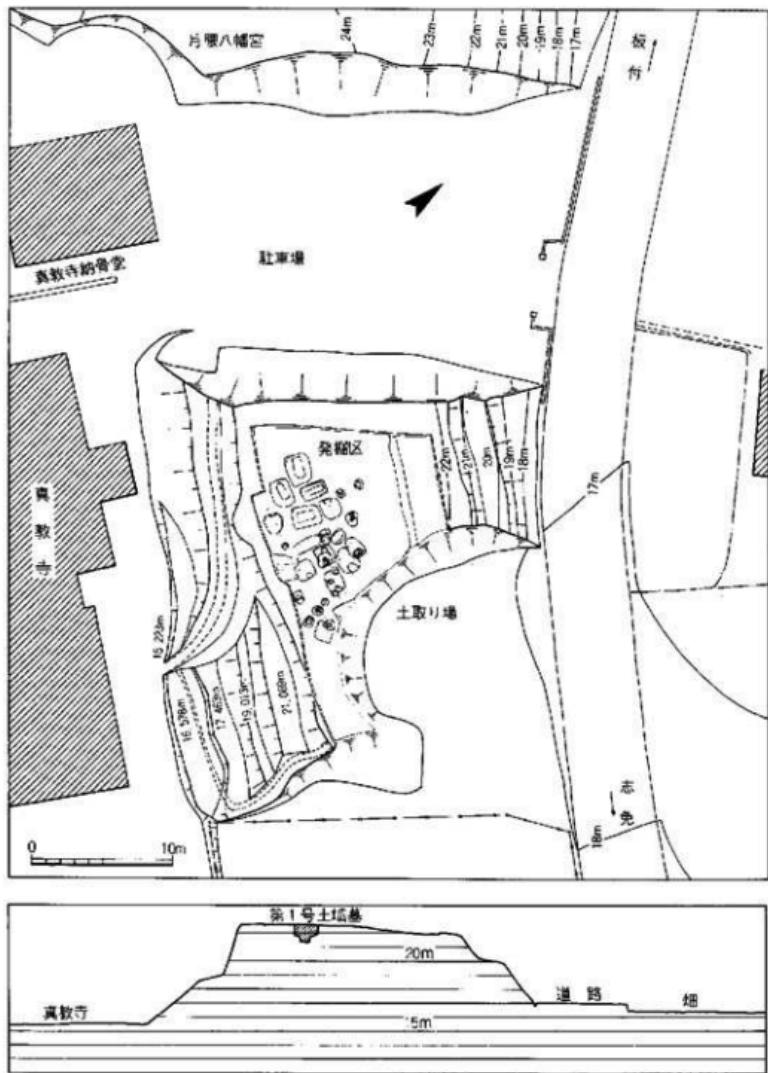
1 宮ノ後遺跡遠景（東から）



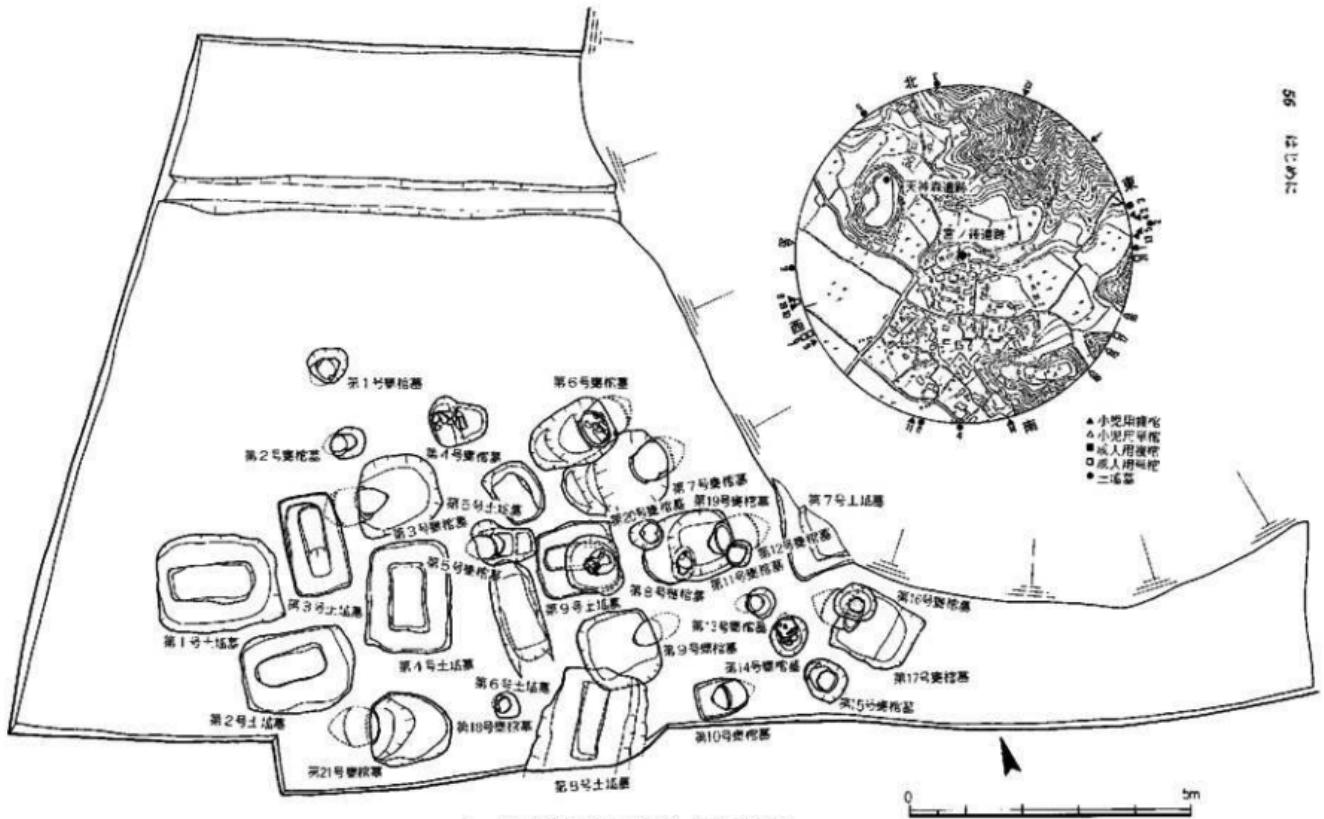
2 宮ノ後遺跡発掘前（東から）



3 宮ノ後遺跡発掘前（西から）



4 宮ノ後遺跡周辺地形図 (縮尺1/400)



5 宮ノ後道路遺構配図 (縮尺1/100)

## II 遺構

### 1. 裹棺墓

検出した裹棺墓の総数は21基で、検出順に第1号から第21号までの番号を付した。21基のうち大型櫛を用いたものは6基で、小児用裹棺が多数を占めている。人骨を多数出土した金隈遺跡も近いことから人骨の検出には最大の注意をはらった。



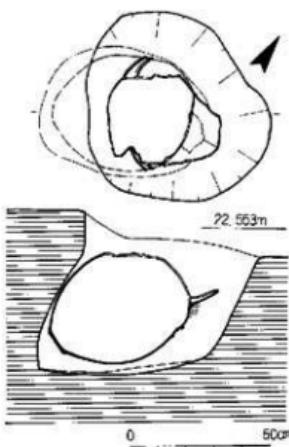
6 宮ノ後遺跡発掘風景



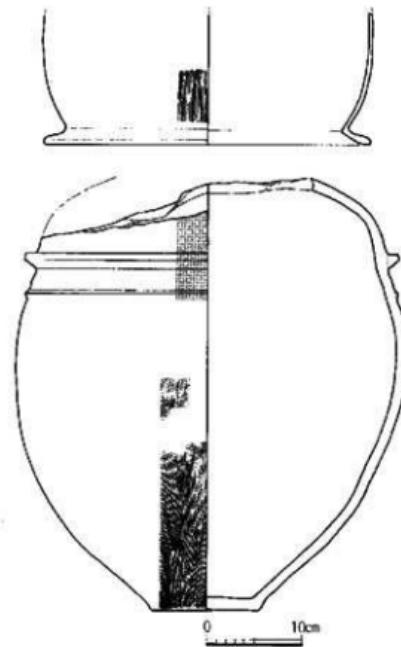
7 宮ノ後遺跡全景

## 第1号腰棺墓（8・10）

第1号腰棺墓は発掘区のもっとも北側に位置している。下棺に壺、上棺に小型壺を用いた複棺で、上棺の破壊状況から墓壠は20cm以上削平されているものと思われる。したがって墓壠上面プランは当初の形とは異なるであろうが現状は不整円形で径約65cmを測る。壠底はほぼ平坦で深さは約60cmある。下棺の壺は頸部より上部が打欠かれており、ここに上棺の甕口縁部を合わせる甕口式となっている。埋置傾斜は31度で覆口部にはわずかながら灰白色粘土が見られ目貼りをしている。2つの棺の復原全長が85cmであることから小児用腰棺墓であろう。



8 第1号腰棺墓実測図（縮尺1/20）



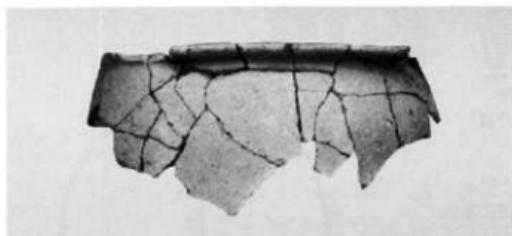
9 第1号腰棺墓実測図（縮尺1/6）

## 土 器（9・11）

下棺に用いられている壺は、頸部より上部を埋葬時に打欠かれているが、いわゆる瓢形の壺となるものと思われる。胴上部には2条の突帯があり、下段の突帯は断面三角形、上段の突帯はやや上向きの断面舌形を呈し鉤状となっている。胴中位より底部にかけてはハケ目調整で突帯部は横ナデしている。胴部最大径は41.2cm、現存器高は45.6cm、底部は平底で11.2cmある。外面の突帯部までは丹塗り痕が認められる。胎土には若干砂粒をまじえているが密といえる。内外面ともに茶色で、底部近くに黒斑が見られる。上棺は「く」字形口縁を持つ壺で、胴部下半を削平されている。口径は34.6cm、胎土には小

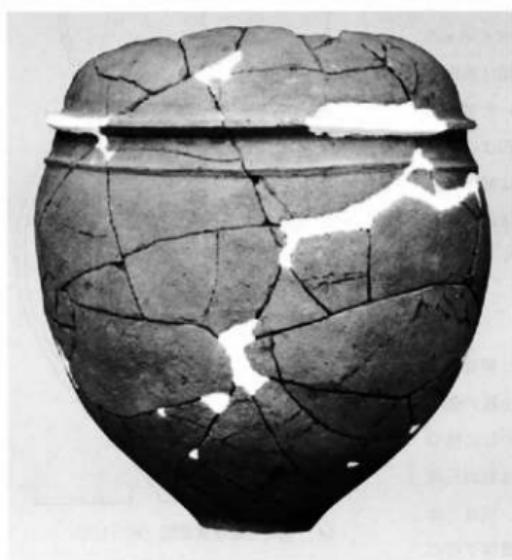
砂粒が多く混入されている。焼成はよく、内外面ともに明茶色を呈する。口縁部は横ナデされ内面屈曲部には、にぶい棱がつく。胴部の最大径は中位よりやや上にあり口径とほぼ一致している。胴部外面は継のハケ目調整である。

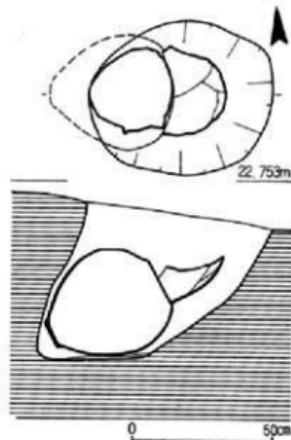
▶ 10 第1号墳棺墓



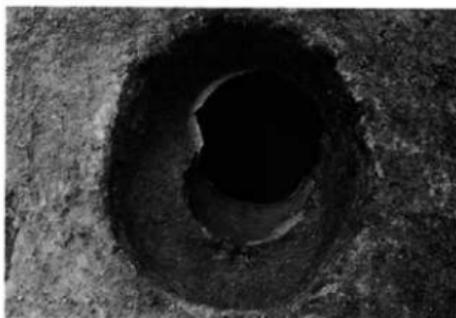
◀ 11 第1号墳棺（縮尺1/5）

\*墳棺の写真の縮尺  
は大型器を1/10とし、  
その他はすべて1/5  
に統一した。





12 第2号墓実測図(縮尺1/20)



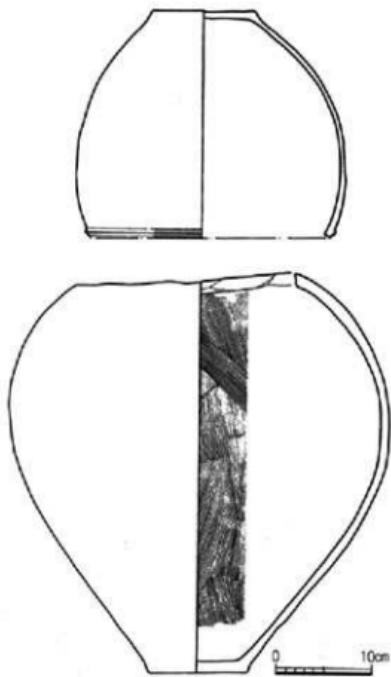
13 第2号墓

## 第2号墓 (12・13)

第1号墓の南約1mの位置にあり、墓壇は同じように西側に向かって掘りこまれている。墓壇の上面プランは65cm×55cmの楕円形で深さは55cmである。下棺は頭部を打欠いた壺、上棺も頭部を打欠いた壺を組み合わせた複棺で、互いに口縁部はないが接口式と言えよう。合わせ部には粘土の目貼りは見られなかった。壇底はほぼ平坦で埋置傾斜は29度である。主軸はN-95°-Eで、頭位は東側を向いている。

## 土 器 (14・15)

上、下棺ともに前述したように頭部から上半部が打欠かれた壺である。上棺の壺は底径10.4cmの平底から最大径を中位に持つ丸みのある胸部がつく。頭部には断面三角形の小さな突起がめぐっており、現状では1条のみである。器形は第1号墓下棺の

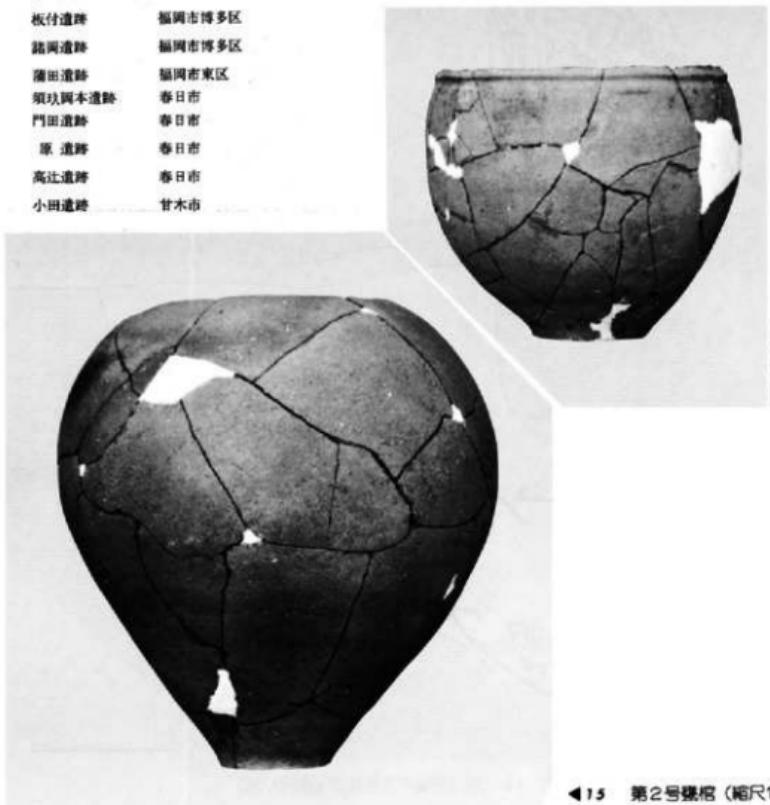


14 第2号墓実測図(縮尺1/6)

ように、三角形突帯上に鶴状の突帯をめぐらす瓢形の土器となるものと思われる。胎土は砂粒少なく密で精良である。突帯部は横ナデ、胴部は縱のナデ、内面は丁寧なナデ調整である。突帯部には丹が塗付されている。現状の器高は24.7cmである。下棺は平底の底部に倒卵形の胴部がつく壺である。口縁部は広口になるのであろう。胎土には小砂粒が入っているが密、焼成はよい。色調は内外面ともに茶色を呈している。調整は胴部外面が板ナデで、内面は底部近くまで粗いハケ目で下から上へ施されている。底径は10.2cm、胴部最大径は40cmで、現状の器高は42.3cmを測る。丹塗りの痕跡は認められない。第2号墓棺の下棺と同じ器形は第20号墓棺にも用いられている。

## 瓢形土器出土主要遺跡

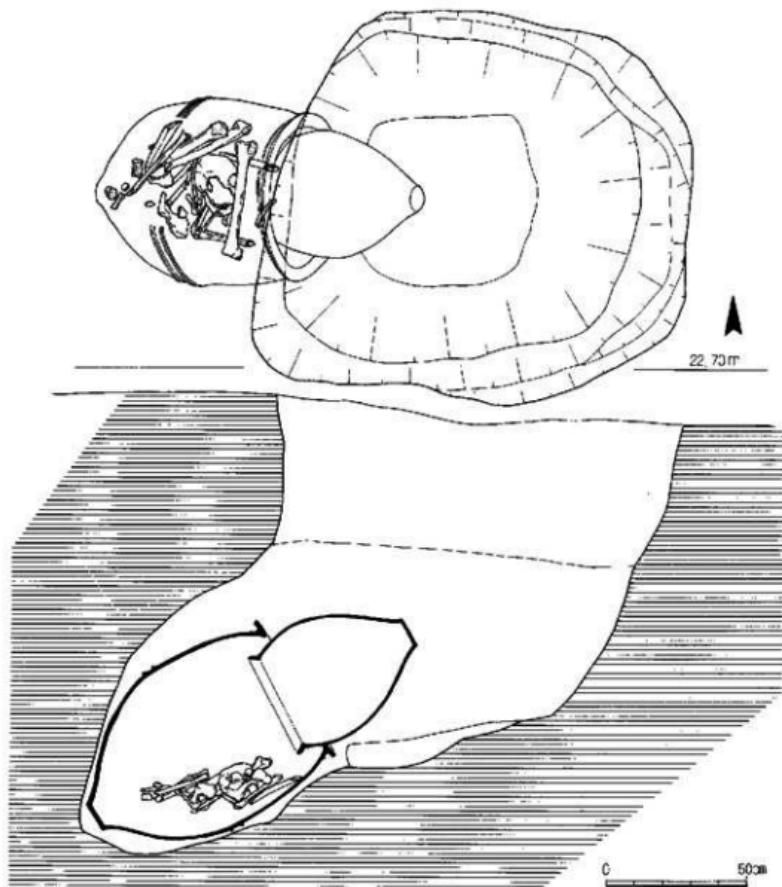
庵田久保園遺跡	福岡市博多区
板付遺跡	福岡市博多区
諸岡遺跡	福岡市博多区
蒲田遺跡	福岡市東区
須玖岡本遺跡	春日市
門田遺跡	春日市
原遺跡	春日市
高江遺跡	春日市
小田遺跡	甘木市



◀ 15 第2号墓棺（縮尺1/5）

## 第3号墓棺墓

第3号墓棺墓は大型の楕を下棺に用いた挿入式の墓棺で、本遺跡の墓棺墓ではもっとも西側の高い所に位置している。墓塚の上面アランは隅丸長方形で150cm×135cmを測る。さらに深さ130cmで西に向かって下棺の楕の形よりやや大きめの斜塙が掘りこまれている。主軸はN-92°-E、埋置傾斜は31度である。主軸方位は同隣りの第2号、4号墓棺墓と大差がない。上棺は



16 第3号墓棺墓実測図（縮尺1/20）



17 第3号墳棺墓

中型の甕が用いられており、胴部が下棺の口縁部に接するように入されている。挿入部には粘土の目貼りはされていない。下棺からはずれ込んだ状態で人骨が検出された。人骨の埋葬姿勢は仰臥屈葬で、熟年40才代の男性と推定されている。

#### 土 器 (18・19)

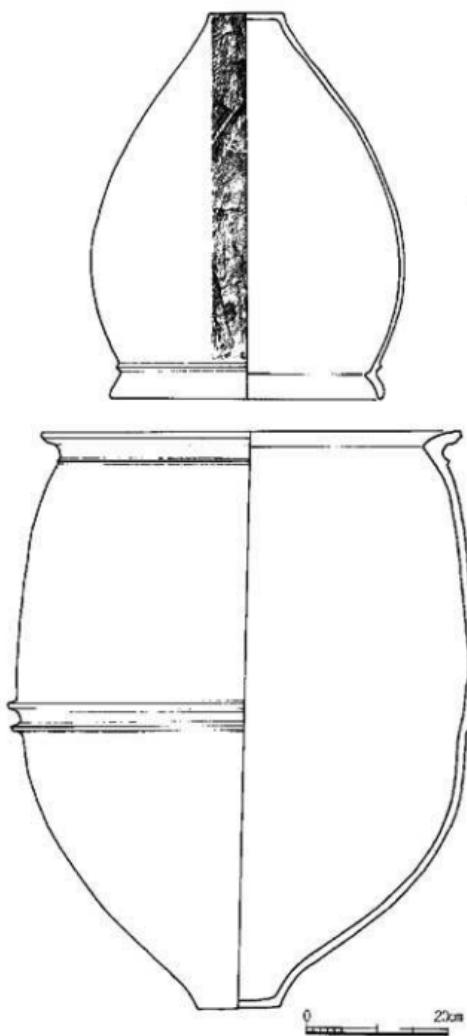
上棺は器高55cmの中型の甕である。底径10.2cmの平底に最大径を中位よりやや上に持つ倒卵形の胴部がつく。口縁部は「く」字形で、やや内湾ぎみにのび口縁端は丸くおさめている。屈曲部外面には断面三角形の突帯をめぐらしており、内面は小さく突出し、稜を持っている。焼成は良好で、内外面ともに茶色を呈している。口縁部は横ナデ調整、胴部外面は細かいハケ目調整、内面はナデ調整である。胴部最大径部に黒斑があり、胴部外面には煤が付着している。口径は38.8cmを測る。

下棺は内傾する逆「L」字形の口縁を

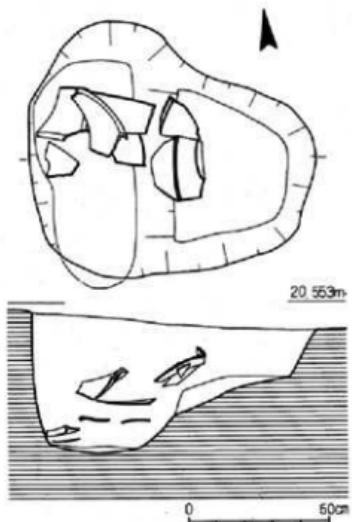
▼18 第3号墳棺 (縮尺1/10)



持つ大型の甕である。口径は60cm、器高82.3cm、底径11.6cmを測る。胴部は平底の底部から胴部中位よりやや下にめぐらせた2条の突帯まで大きく開きながらのび、突帯より上部は直立し、口縁部近くで湾曲しながら内傾し逆「L」字形の口縁部がついている。口縁外端部はわずかに窪み、その下方は肥厚し段を持っている。胴部の突帯は上向きの断面台形、口縁下の突帯は断面三角形である。口縁部と底部との中心を結ぶ中心線は垂直ではなく、また胴下半部のつくりもいびつである。焼成はよく、内外面ともに明茶色を呈する。調整は、口縁部と突帯部が横ナデ、口縁部突帯から胴部突帯までがナデ、胴部突帯部から底部へかけては、櫛のナデと細かいハケ目である。胴部突帯部から底部近くまでかなり大きな黒斑が見られる。



19 第3号甕棺実測図(縮尺1/8)



20 第4号墓実測図(縮尺1/20)

## 第4号墓(20・21)

第2号墓(20)の東側約1.5mの位置にある。墓壇は不整円形の上面プランで90cm×100cmある。二段掘りとなっており西側の深いところで上面からの深さは約50cmである。墓壇内には10点の土器片が見られた。これらの土器片は口縁部と胴部の破片で、3個体の蓋である。上部を削平されたのか底部は墓壇内に見出することはできなかった。このように土器の出土状態からすれば3個の土器は遺体を入れる棺として用いられたかは疑問と思われ、むしろ遺体にかぶせた蓋かあるいは墓域に対する祭祀構造などの性格を考えるべきかもしれない。いずれにしてもここでは覆棺墓と認定して取り上げた。

## 土器(22・23)

1は墓壇の中位ほどで出土したもので口縁部の小破片である。口縁部は「く」字形で屈曲部内面は丸みがある。胴部の最大径は頸部近くにあり、底部へすぼまりながらのびている。焼成はよく、内外面ともに明茶色を呈する。口縁部は横ナデ、胴部外面は細かい縦のハケ目調整である。口径は24cmを測る。

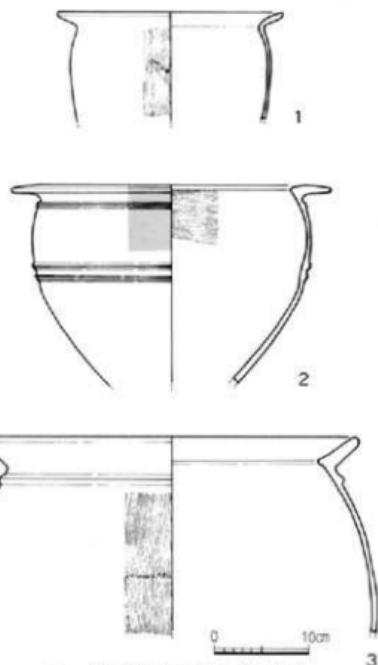
2は逆「L」字形口縁を持つ小型の蓋である。口縁部上面はほぼ平坦となっており、口縁外端部はわずかに突起しながら窪み口唇状の形態に近い。突



21 第4号墓(20)

帶は口縁下に1条、胴部最大部よりやや下に2条めぐらされており、断面は口唇状をなしている。2条の突帯部から底部へは急にすばまりながら続いている。胎土にはきめ細かい粘土が用いられており、焼成はよい。調整は口縁部が横ナデ、内面は細かい横のハケ目を口縁部から約11cmのところまで施している。口縁部上面から胴部外面は丹が塗付されている。口径は32.8cmである。

3は「く」字形口縁を持つ甕で、他の2個の甕に比べてもっとも大きい。口縁部は胴部の厚さの2倍ほどあり肥厚している。口縁下に断面三角形の突帯が1条めぐらしている。胴部下半から底部を欠いているが倒卵形に近い胴部となるのであろう。色調は茶色を呈し、焼成はよい。口縁部は横ナデ調整、内面は右上がりのナデ調整、胴部外面は粗いハケ目調整である。口径は39.8cmである。



22 第4号櫛棺実測図（縮尺1/6）



► 23 第4号櫛棺（縮尺1/5）

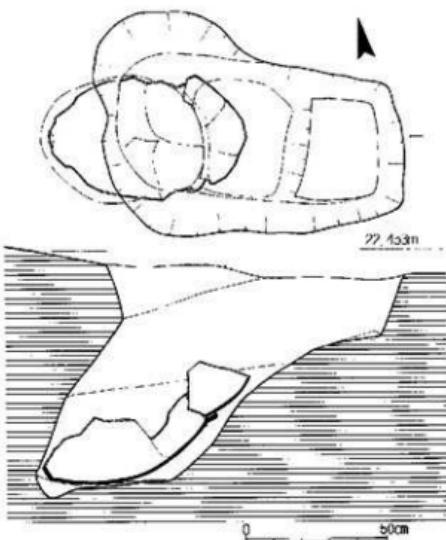
## 第5号墓棺墓 (24・26)

第5号墓棺墓は四方を第4、5、6、9号土塙墓にとり囲まれている。墓底は隅丸長方形で107cm×60cmの上面プランをなす。深さは25cmで、西側はさらに斜めに掘りこまれており2つの窓は36度の角度で埋置されている。下棺は器高53cmの中型壺が用いられ、上棺は胴部より上部を打欠いた土器が挿入されている。上棺は小破片となっているために全形を知りえないが、現存する破片は胎土が精良で器壁ももうすいことなどから壺と推測される。上棺は茶色を呈し、調整はナデである。主軸はN-101°-Eで、第5号墓棺墓の墓底は、第6号土塙墓を切っている。

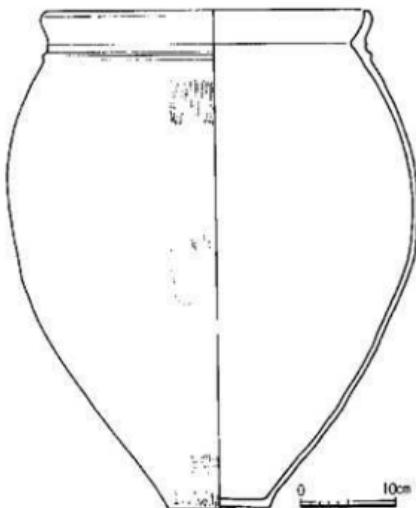
## 土 器 (25・27)

上棺は小破片のため復元できなかつたが前述したように壺の可能性があり、口径35.2cmの下棺に挿入されていることから、第10号墓棺と同じような器形が考えられる。ただ現存部の七器カーブからすれば倒卵形のやや長い胴部が推測される。

下棺は「く」字形口縁の中型壺である。屈曲部内面は、丸みがありにおい稜をなす。内湾しながらのびる口縁部は屈曲が弱く直立ぎみである。胴部の最大径は46.3cm



24 第5号墓棺墓実測図（縮尺1/20）



25 第5号墓棺墓実測図（縮尺1/6）



26 第5号櫛棺墓

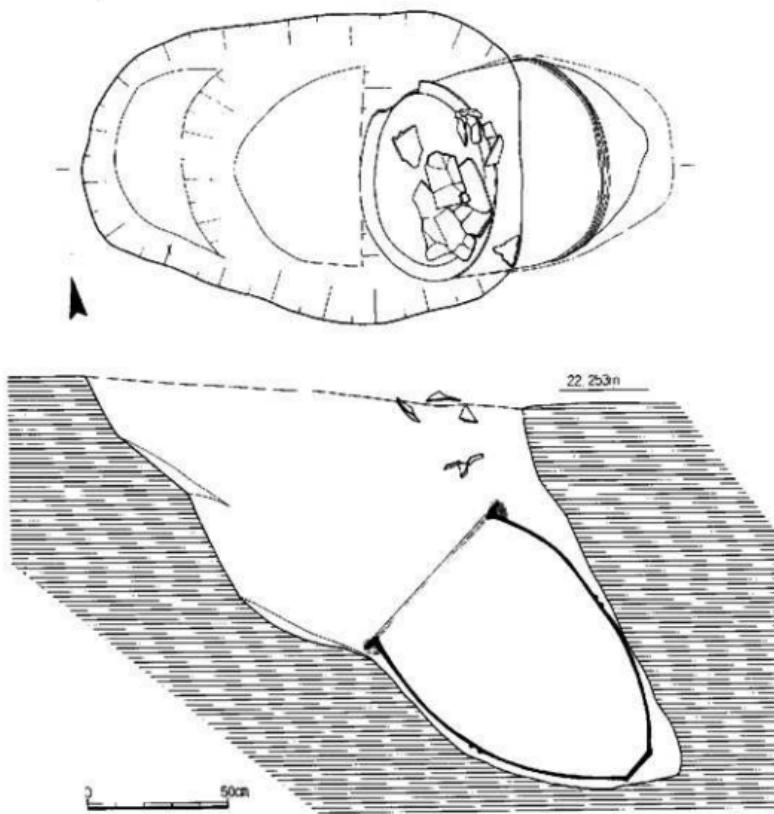
で口径より大きい。色調は濃茶色で、胎土には小砂粒が多く混入している。器面の調整は口縁部が横ナデ、胴部は縱の粗いハケ目で、内面はナデである。胴部から頸部にかけて黒斑があり、胴部には煤が付着しているのが観察される。

▼27 第5号櫛棺（縮尺1/5）



## 第6号墓棺墓 (28・29)

大型の甕を用いた單棺の墓棺墓である。墓底は150cm×110cmの長楕円形の上面プランで、さらに東に向かって斜めに掘りこまれている。底は第3号墓棺墓の墓底のように方形の堅穴を掘った後に甕棺を埋置するための斜坡を掘りこむというのではなく、最初から斜めに階段状に掘りこんでいる。口縁部には灰白色粘土があり、木蓋などの蓋がしてあつたものと思われる。大型甕の口縁部の上部付近に土器片が出土した。これらの土器片は2個体の甕と壺1個で、直接第6号墓棺墓と関連するかは明らかでない。墓底は第7号墓棺墓の墓底を切っており、第6号墓棺墓の埋置が後である。



28 第6号墓棺墓実測図（縮尺1/20）

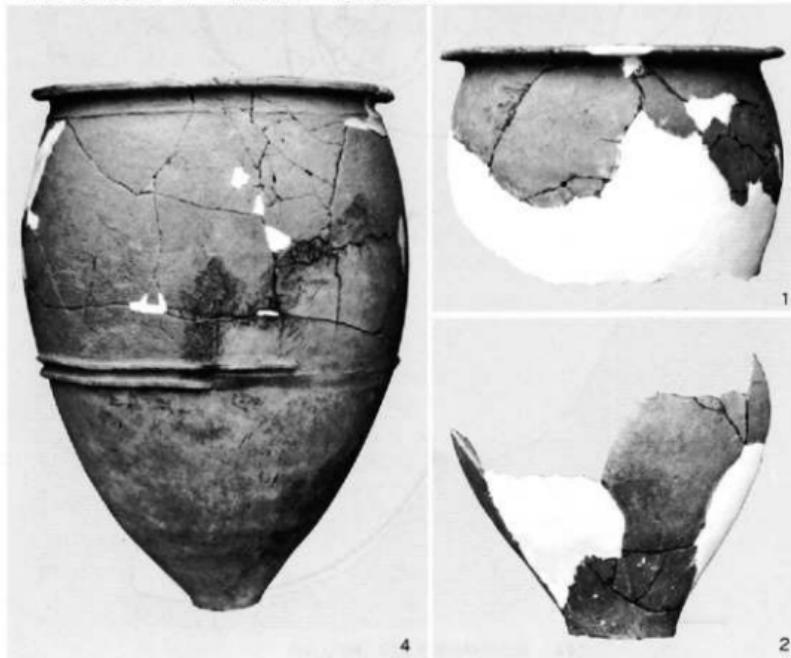
## 土 器 (30・31)

1～3は埋土中から出土したものである。1と2は小型甕で別個体である。4は口径69cm、器高101cm、底径12.6cmの大型甕である。形態は砲弾形に近いが、第7号墓に比べ口縁部の内傾が大きい。したがって胴部にやや張りが見られる。断面台形の2条の突帯は胴部中位よりやや下方にめぐらされている。つくりは中心線がずれいびつである。

▼30 第6号墓 (1・2は縮尺1/5 4は縮尺1/10)

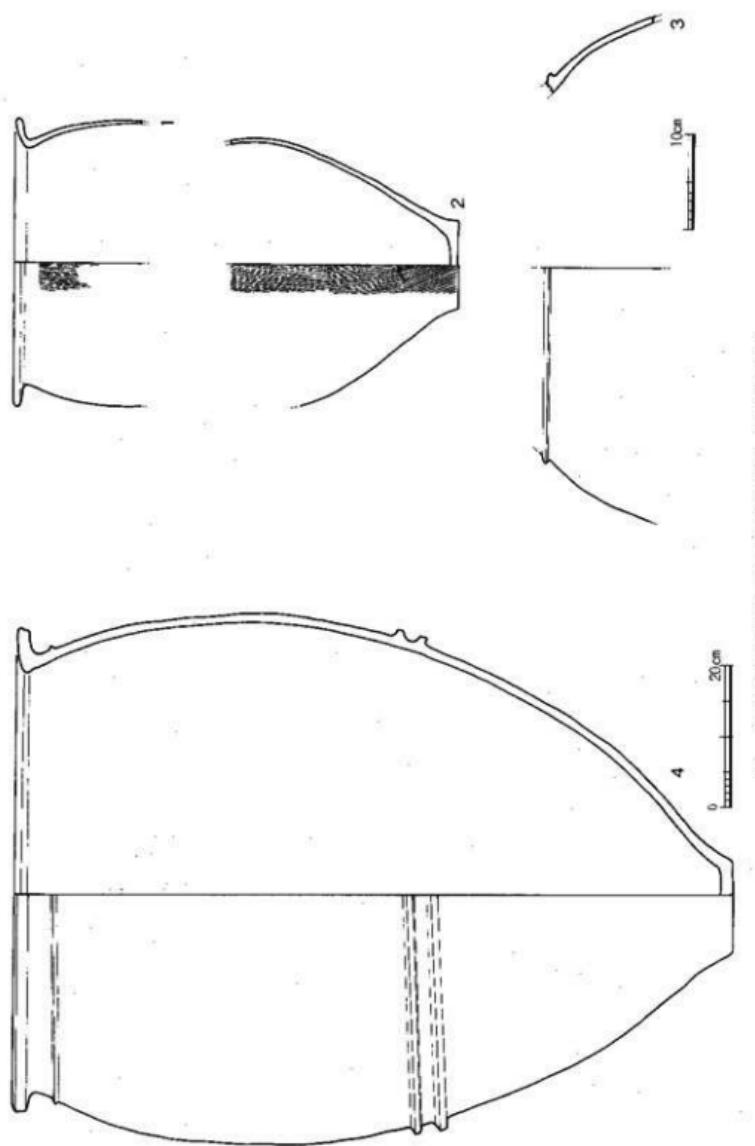


29 第6号墓



4

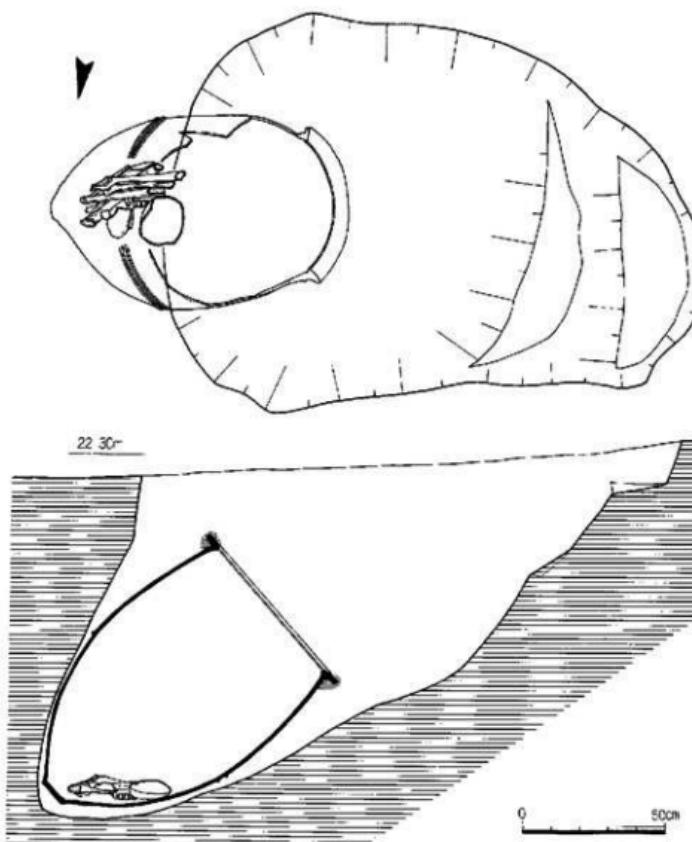
2



31 第6号墓剖面圖 (1~3是縮尺1/6 4是縮尺1/8)

## 第7号墓（32・33）

第7号墓は第6、19号墓の間にあり、墓底の一部を第6号墓から切られている。墓底は190cm×140cmの不整長楕円形。第6号墓と同じように東側に向かって階段状に掘られ、覆棺を埋置している。棺は大型甕が用いられており、埋置傾斜は41度である。主軸方位はN-99°Wで第6号墓と共通している。口縁部には、現在蓋は見られないが、灰白色粘土が認められ本來は木蓋などの蓋があったものであろう。底部付近に保存のよくない人骨がまとめて出土した。この人骨は、男性の成人骨と推定されている。



32 第7号墓実測図（縮尺1/20）

▶ 33 第7号腰棺墓



▼ 34 第7号腰棺 (縮尺1/10)

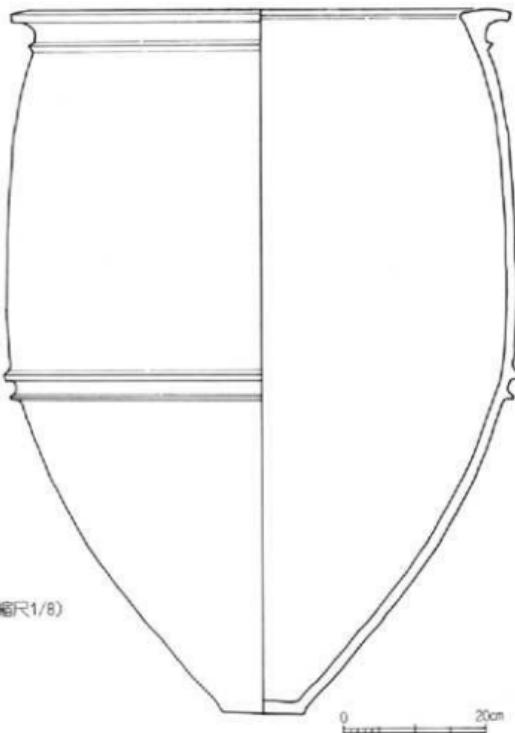
## 土 器 (34・35)

墓塚の切り合いから第6号腰棺墓より古い時期に埋置されていることがわかるが、棺として用いられている腰の型式にも矛盾がないようである。第7号腰棺墓の大型腰は口径70.6cm、器高99.8cm、底径11.4cmで法量はほとんど差がない。しかし形態は、第6号腰棺が胴部に張りがあったのに対し、第7号腰棺は、胴部突带上半部が直立ぎみにのび、口縁部近くでわずかに内傾し、逆「L」字形の口縁部へと続いている。口縁内端部の突出は明瞭であり、上端部もより平坦的で、「T」字形口縁の形状に近い特徴を持っている。

内外面の色調はやや赤みをおびた茶色で、焼成、胎土ともに良好



である。器面の調整は、口  
縁部と突帯部が横ナテで、  
胴部の内外面はナデ調整さ  
れている。胴部の2条の突  
帯は、胴部中位にあり、や  
や下向きに貼り付けられて  
いる。



▶ 35 第7号壺棺実測図（縮尺1/8）

## 第8号壺棺墓（36・37）

第8号壺棺墓は本遺跡の  
発掘区ではほぼ中央部から  
検出したものである。墓塚  
の上面プランは115cm×95cm  
の不整円形であるが、墓塚  
のレベルよりも棺の方が高  
く、墓塚はさらに深かった  
ものと考えられる。棺は上  
棺が鉢、下棺に壺を用いた

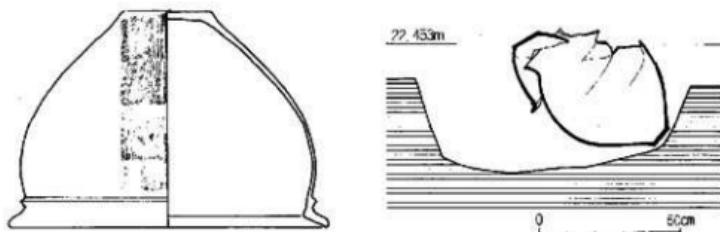


36 第8号壺棺墓

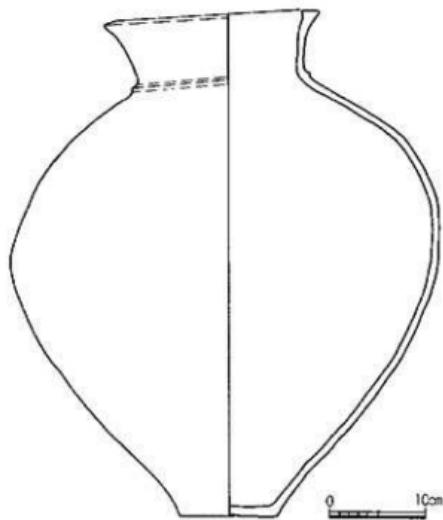
複口式の複棺である。主軸方位はN-86°-Wで西向きの櫛棺墓としては本遺跡ではもっとも西側に位置している。第8号櫛棺墓墓塚の下より第9号上塚基を検出した。

#### 土器(38・39)

上棺は「く」字形口縁を持つ鉢で、屈曲部外面には断面三角形の突帯を1条めぐらしている。口径は33.8cm、器高23cm、底径9.6cmである。胎土は砂粒を多く含有している。内面は器面の剥離がはげしく。



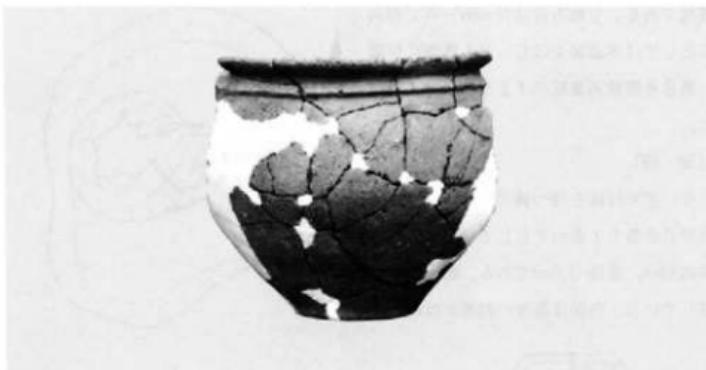
▲37 第8号櫛棺墓実測図(縮尺1/20)



38 第8号櫛棺実測図(縮尺1/6)

△調整法は明瞭にしない。外面は細かい綻のハケ目調整である。

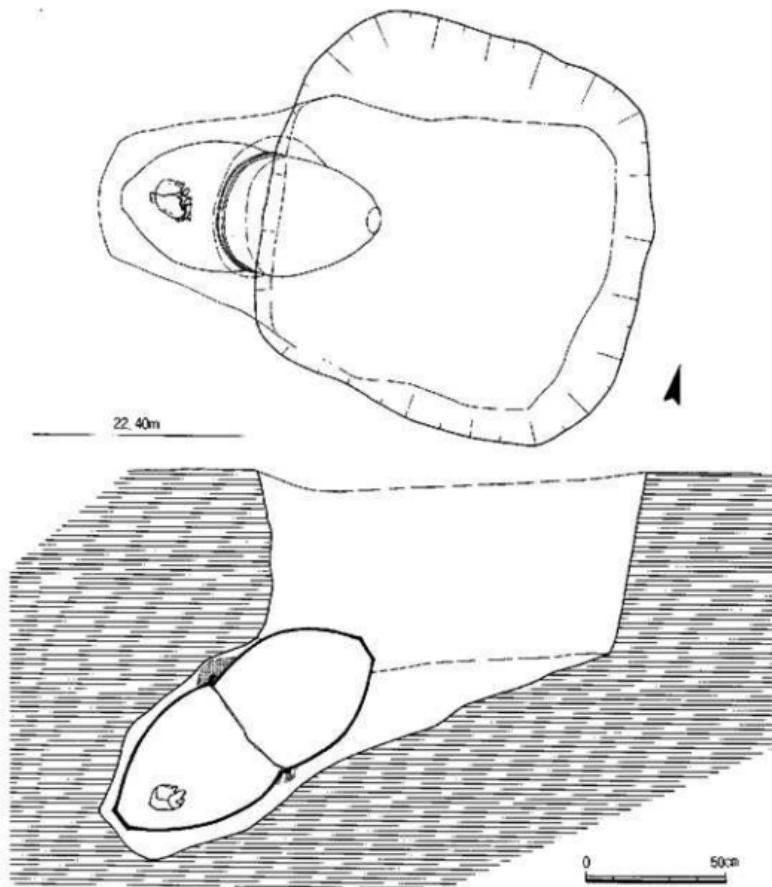
下棺は小さな底部に倒卵形の頸部がつき、頸部は直立し、上方やや外に開きそのまま口縁部とした壺である。口縁上端部は、平坦面をつくりており、わずかに外傾する。頸部には断面三角形の突帯を1条めぐらしている。胎土は精良ではないが、砂粒は少ない。口縁部は横ナデ、頸部外面は右下がりのナデ調整でハケ目状となっている。



39 第8号墓 (縮尺1/5)

## 第9号墓棺墓 (40・43・44)

墓地は136cm×140cmの隅丸方形で深さ65cmある。さらに墳底は東に向かって斜めに棺の大きさに掘りこまれている。主軸方位はN-102°-Wで、頭位を西側に置く。埋置傾斜は36度で本遺跡では平均的な角度である。棺は上、下棺とも中型甕が用いられている。この上、下棺の甕は口径がほとんど一致しているために、上棺の口縁部を省略欠き、下棺との主軸を変えて口縁部の一部を入れこんでおり、挿入式の変形といえよう。口縁部の合わせ部には灰白色粘土が厚く



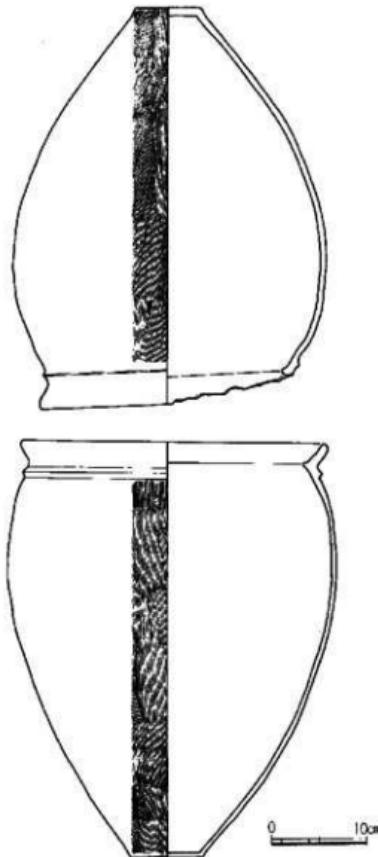
40 第9号墓棺墓実測図（縮尺1/20）

目貼りされており、人骨の保存を助けている。人骨は下棺に頭蓋骨のみが検出され、4才ぐらいの幼児と推定されている。

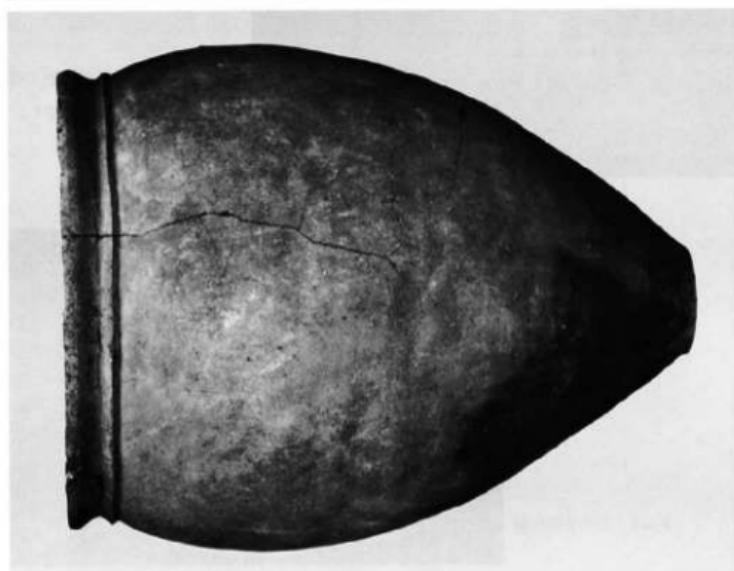
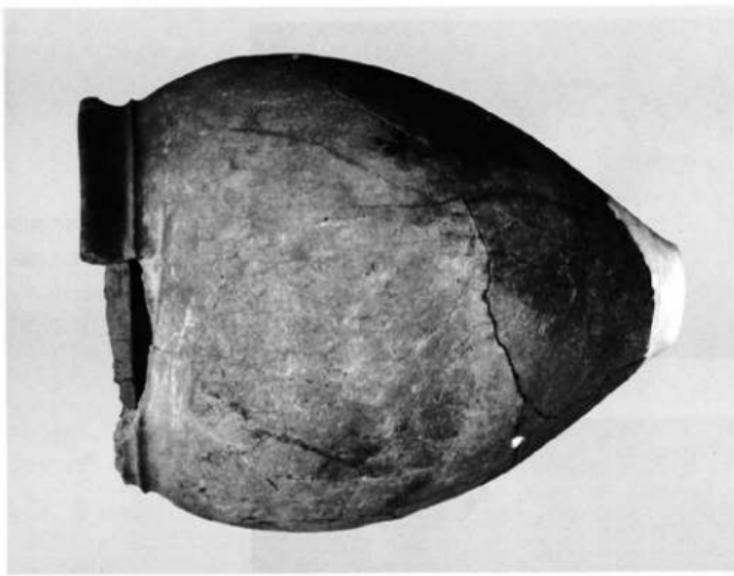
#### 土 器 (41・42)

上棺は前述したように口縁部が打欠かれている。復原口径38cm、器高56cm、底径9.6cmを測る。底部は平底で倒卵形の長めの胴部がのび「く」字形の口縁部がつく。屈曲部には小さな断面三角形の突帯が1条めぐらされており、内面への突出は頗著である。調整は口縁部が横ナデであるが、胴部の縦ハケ目後になされている。胴部最大部あたりには煤の付着が見られる。

下棺の法量は口径が42.5cm、底径は10cm、器高59cmで上棺とはほぼ同じ大きさである。形態の特徴もほぼ共通しているが口縁部のつくりにやや違いがある。上、下棺ともに「く」字形口縁であるが、下棺の口縁部がより肥厚しており、屈曲部内面への突出がより顕著である。胎上は砂粒が多く、色調は茶色である。調整法も上棺と同じであるが、胴部外面のハケ目は底部から上20cmまでを細かいハケ目、さらに屈曲部から下に7cmまでを粗いハケ目後に横ナデ、これらの中間部は粗いハケ目と三段に使いわけている。また胴部のハケ目は左から右の方に順につけられている。胴部下半分には黒斑が見られる。



41 第9号甕棺実測図 (縮尺1/6)



42 第9号墓棺 (图尺1/5)



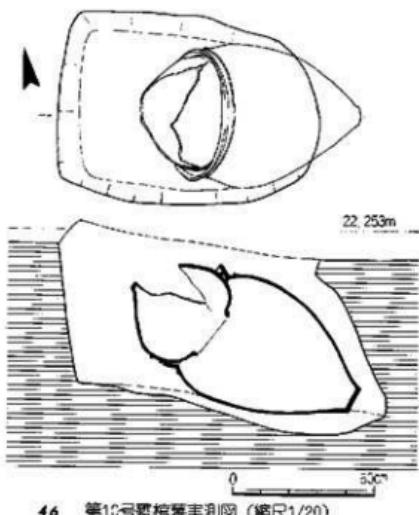
◀ 43 第9号漆棺墓の墓址を東西に切り、埋置法と粘土目貼りの状況を見る。



◀ 44 口縁接合部の粘土目貼りを取りのぞいた状況である。挿入された状況がわかる。



▶ 45 第10号漆棺墓



46 第10号墓棺墓実測図(縮尺1/20)

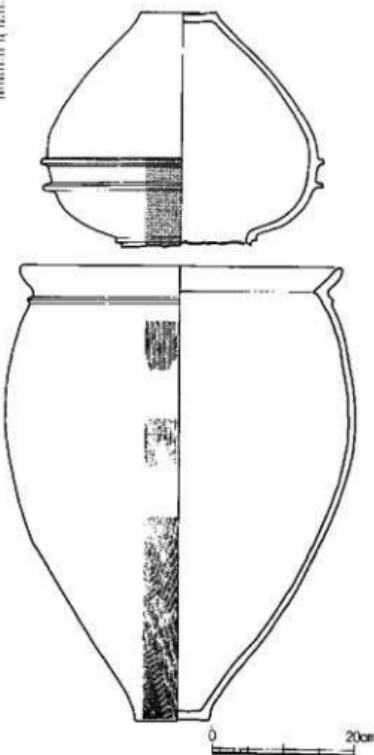
差しこんでおり挿入式である。巧みに組み合わされていたために棺内に土の流れこみはなかったが、人骨、副葬品などは見られなかった。

#### 土器 (47・48)

上棺は頭部より上部が打欠かれているが現存高は33.2cm、底径10.6cmを測る。頭部より上部は、大きく外に開き、広口の口縁部がつく器形であろう。胴部の最大径はやや上位にあり、ここに断面台形の突帯が2条、さらに頭部にも断面三角形の突帯が1条めぐらされている。器壁は3cmと厚めでたしかなつくりをなす。胎土、焼成ともに良好で、内外面ともに茶色の色調を呈している。頭部より胴部の突帯までは丹が塗付されている。

#### 第10号墓棺墓 (45・46)

第10号墓棺墓は発掘区の南端で検出されたものである。墓壇上面プランは92cm×62cmの隅丸長方形を呈する。まず垂直に掘り、塙底のレベルをあまり変えることなく東側に斜塙が掘りこまれているので棺の埋置傾斜は28度と水平に近くなっている。棺は複棺で上棺は頭部より上部を打欠いた壺、下棺は中型壺が用いられている。上棺は胴部の突帯部まで下棺に

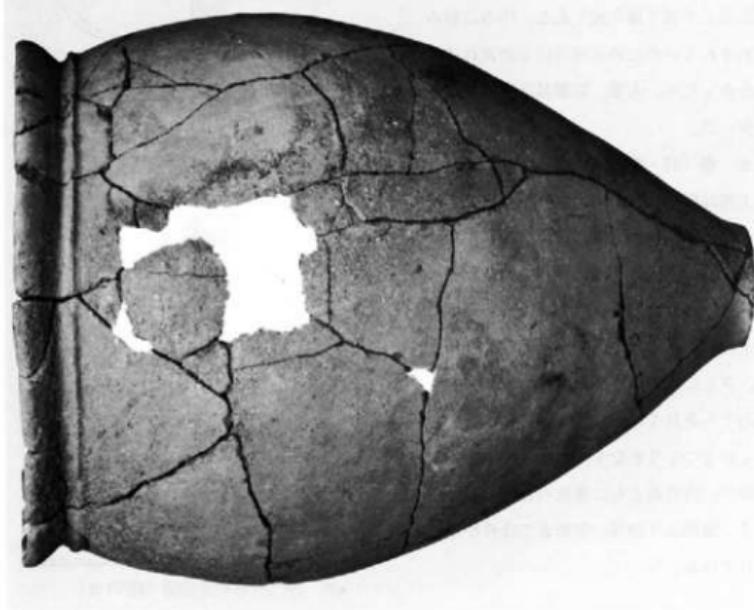


47 第10号墓棺墓実測図(縮尺1/8)

下棺は中型の甕で口径45.6cm、器高64.8cm、底径10.4cmを測る。肥厚した口縁部は「く」字形で、屈曲部内面の突出部は丸みがある。内外面ともに茶色を呈し、胎土には小砂粒が多く見られる。調整は口縁部が横ナデ、胴部外面は突帯部下方より底部までは縦の細かいハケ目調整である。同器形の中型甕は第5号喪棺墓下棺、第9号喪棺墓上・下棺に見られる。



▼48 第10号喪棺（縮尺1/5）



## 第11号腰棺墓 (49・50) 土 器 (51・52)

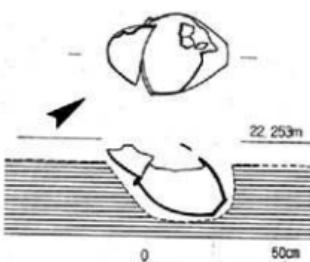
第19号腰棺墓と重複しているために墓壇のプランは明確にできなかった。棺は小型腰の合口式である。

上棺は口径28cmで「く」字形口縁をなす。屈曲部内面の棱は丸みがある。色調は茶色を呈し、胎土には小砂粒が見られる。調整は口縁部の横ナギ後に胴部の縱ハケ目を施している。下棺は口径23cm、器高30cm、底径8.6cmである。胴部外面の調整は縱のハケ目であるが、上半分は数回くりかえしている。

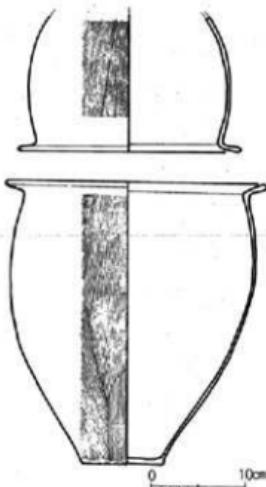


▲50 第11号腰棺蓋

▼52 第11号腰棺 (縮尺1/5)



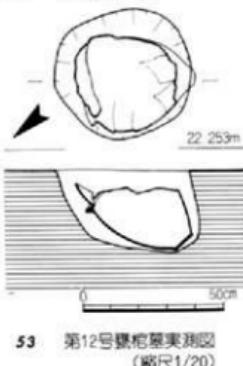
49 第11号腰棺墓実測図 (縮尺1/20)



▲51 第11号腰棺実測図 (縮尺1/6)



84 第12号櫛棺墓



53 第12号櫛棺墓実測図  
(縮尺1/20)

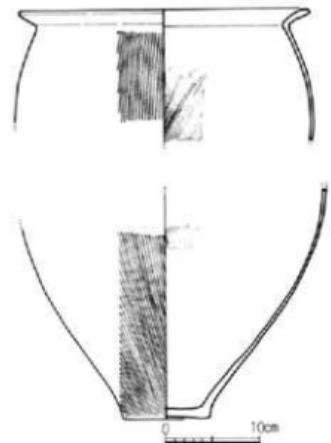
第12号櫛棺墓 (53・54)

第19号櫛棺墓の墓塚を切って埋置されており、2つの小型  
妻を用いた合口式である。埋置傾斜は46度で削平時にか合口  
部がずれている。上棺は口縁部のみが残る。

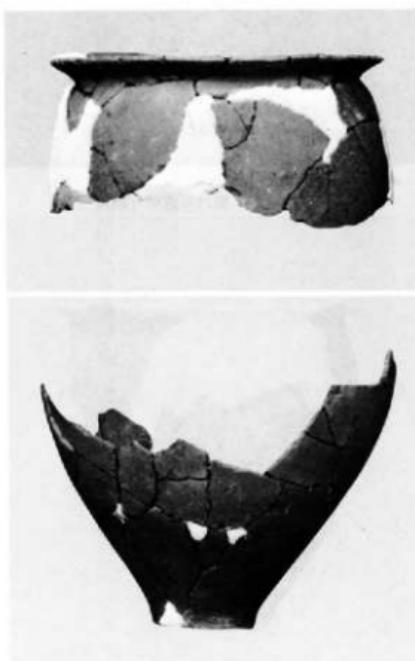
土器 (55・56)

上棺の妻は下棺と同じように「く」字形口縁を持つ。胴部  
は中位よりやや上に最大部があり径は約33cmを測る。下棺は  
胴部下半が接合できなかった。上・下棺ともに胴部外面は粗  
い縦のハケ目、内面は細かいハケ目調整されている。

◀ 54 第12号櫛棺墓



55 第12号櫛棺実測図 (縮尺1/6)



56 第12号櫛棺 (縮尺1/5)

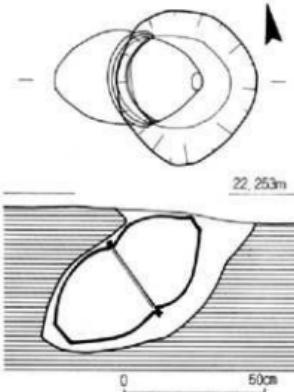
## 第13号櫛棺墓 (57・58・59)

墓塚の上面プランは53cm×54cmの円形で最初から棺の大きさに合わせて斜めに掘りこまれている。主軸方位はN-101°-Eで、埋置傾斜は38度である。棺は小型甕を用いた複棺で、合口式である。合わせ部には粘土の目貼りは見られなかつたが、完全に接合されている。

## 土 器 (60・61・62)

上棺は丹塗りの小型甕である。径6.6cmのわずかに上げ底となった小さな底部から大きく開く胴部がつき、最大径部に断面口唇状の2条の突帯をめぐらしている。突帯の上部からゆるやかに外溝しながらのびて逆「L」字形の口縁部へと続く。屈曲部の外面にも断面口唇状の突帯を1条めぐらしている。器面の調整は、内面が丁寧なナデ、胴部突帯部は横のミガキ、突帯部より底部にかけては縦のミガキで全体的に丁寧な調整である。口縁上端部は放射状のミガキで暗文風な効果が出ている。口縁部と突帯より上部は外外面ともに丹が塗付されており、内面は丹が流れている。口径は34.8cm、器高は27.8cmである。

下棺は「く」字形口縁を持つ小型甕が用いられている。口径33.2cmで上棺よりやや小さい。器高は34cm、底部は平底で径8.4cmを測る。屈曲部



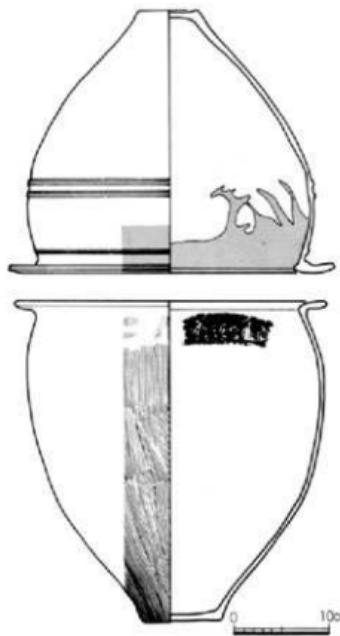
57 第13号櫛棺墓実測図(縮尺1/20)



(上) 58 第13号櫛棺墓



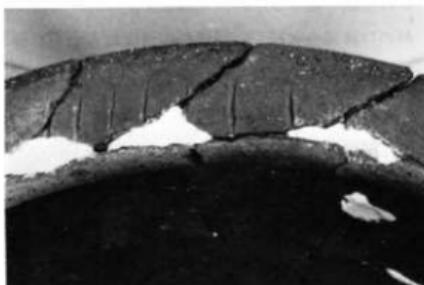
(下) 59 第13号櫛棺墓



内面は、にぶい棱となっており、口縁上端部はわずかであるが平坦面をつくる。胴部最大径は31.5cmで胴部上位にある。焼成はよく、外面とも色調は赤茶色を呈している。器面の調整は口縁部が横ナデ、胴部外面は底部まで継のハケ目で、口縁部近くは横ナデでハケ目を消している。口縁上坦部にはヘラ状のもので7本の刻み目がいれられている。

◀ 60 第13号櫛棺実測図（縮尺1/6）

▼ 61 第13号櫛棺下棺口縁部

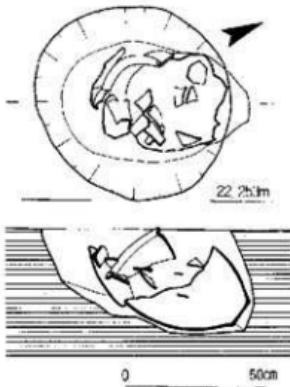


▼ 62 第13号櫛棺（縮尺1/5）

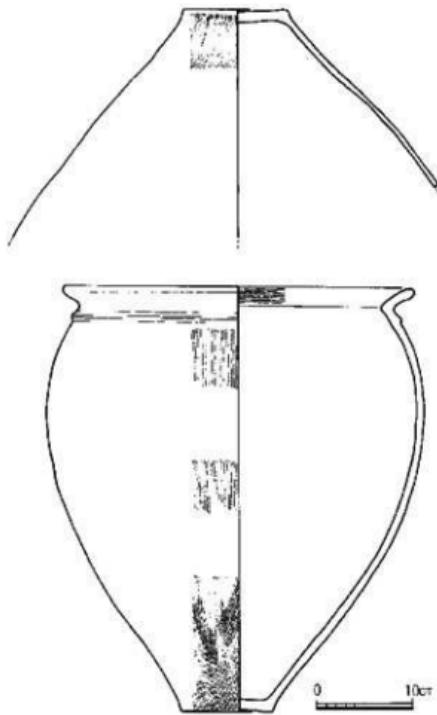


## 第14号甕棺墓 (63・65)

第14号甕棺墓は四方を第10、13、15、17号甕棺墓にとり囲まれている。墓塚上面プランは68cm×70cmの円形である。墓塚は第13号甕棺墓と同じように最初から傾斜を持って掘りこまれており、32度の傾斜で埋置されている。上部は削平され、かつ棺が移動しているようであるが、接合復原の結果、上棺は大型の鉢と思われる。下棺は中型甕が用いられており覆口式である。主軸方位はS-2° Wで、他の甕棺墓の多くが東西方向であるのに対しても塚墓と同じように南北方向をとっている。



63 第14号甕棺墓実測図  
(縮尺1/20)



64 第14号甕棺墓実測図 (縮尺1/6)

## 土 器 (64・66)

上棺の口縁部は墓塚内では見出すことができず、口縁部打欠きの可能性が強い。径11cmの平底から大きく開きながらのびる胴部がつく。大型甕の胴下半部に比して器壁がうすく、胴部の外側への開きが大きいために鉢と推定した。色調は内外面とも茶色で、焼成はよい。器面の調整は、内面が底部から継ぎのナデ、外面は縦のハケ目である。底部近くには小さな黒斑が見られる。

下棺は中型甕で、「く」字形口縁を持つ。胴部の最大径は中位よりやや上にあり40cmを測る。屈曲部には1条の断面三角形突帯をめぐらすなどの特徴は、第5、9、10号甕棺と類似しているが、これらの口縁部が



▶ 66 第14号墳棺（縮尺1/5）

屈曲部から内湾しながらのびるのに対して、逆に外湾ぎみにのび端部を丸くおさめている。また屈曲度も大きい。この部分には粗い横ハケ目後にナデを加えている。胴部外面の調整は全面縦の粗いハケ目である。口縁部から突帯部にかけては横ナデであるが突帯部は強く横ナデされていて、ために突帯はつぶされている。

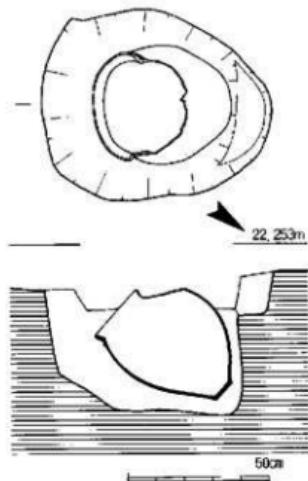
▼ 65 第14号墳棺墓

## 第15号墓（67・69）

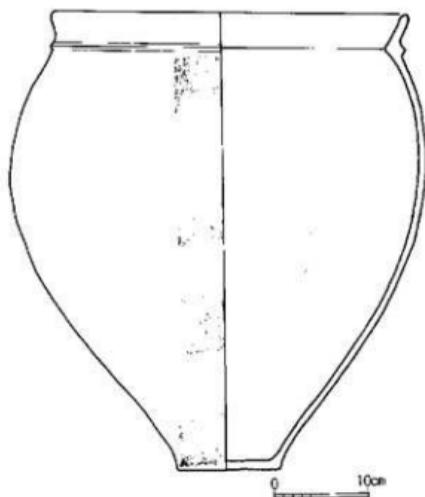
墓壇上面プランは81cm×68cmの楕円形で、ほぼ垂直に掘りこまれている。棺は中型甕の単棺で、墓壇の北側によせ埋置されており、壇底よりやや上にある。主軸方位はN-142°-Eで、埋置傾斜は41度である。頭位を南東側に置いているのは第15号墓の他には、第16、17、18号墓の計4基で、うち第15、16、17号墓の3基は、発掘区の南端部に集中している。同じように東側に頭位を置く第1、2、3、4、5号墓は、西側に頭位を置く第6、7、8、9、10、19、20号墓は同じ主軸方位のものが接近して埋葬されているようである。

## 土器（68・70）

口径は37cm、器高は49cm、底径は41cm、胴部の最大径は中位よりやや上部にあり、44.2cmを測る。平底の底部に倒卵形の脚部がつく。口縁部は「く」字形に屈曲している。屈曲部は肥厚しており、外面には断面三角形の突帯が1条めぐっている。内面の突出部はふくらみ、口縁部へ内湾しながらのび、端部を丸くおさめている。他の類似する甕に比べ口縁部の湾曲は小さく、かつ直立ぎみである。胎土には小砂粒が多く、内外面ともに器面が剥離し砂粒が露出している。色調は外面が茶色、内面が褐色をおびている。器面の調整は脚部外面の縦ハケ目後に口縁部を横ナデしている。

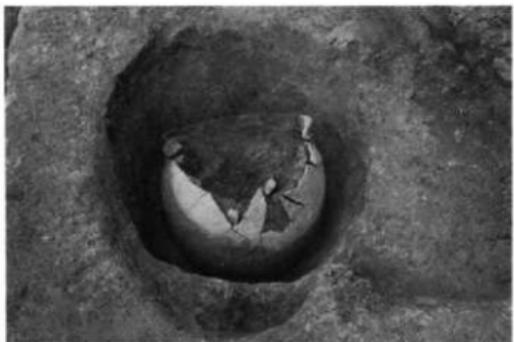


67 第15号墓実測図（縮尺1/20）



68 第15号墓実測図（縮尺1/6）

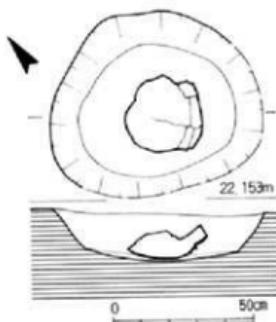
90 第15号墓  
图



◀ 69 第15号墓  
图

▼ 70 第15号墓  
图





71 第16号墓実測図(縮尺1/20)

## 第16号墓 (71・72)

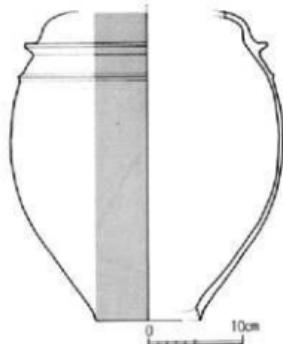
第16号墓は第17号墓の墓壇を切って埋置されている。墓壇上面プランは75cm×63cmの楕円形である。墓壇の壁は傾斜をもたせて掘りこまれ深さは18cmを測る。坑底のプランも上面と同じで楕円形を呈す。主軸方位はN-129°-Eで、下に埋置されている第17号墓の主軸方位とはほぼ同じである。埋置傾斜は、発掘中に細片となり正確でないが19度である。



72 第16号墓

## 土器 (73・74)

いわゆる瓢形土器を用いた单棺で、頸部は打欠かれた可能性がある。とすれば複棺であるかもしれないが上部は削平されており明確でない。胴部最大径は中位にあり、上部には断面三角形の突帯と上向きの鉤状の突帯をめぐらしている。外面は全面にわたって丹が塗付されている。底径は11.2cm、器高は32.4cm、胴部最大径29cmを測る。



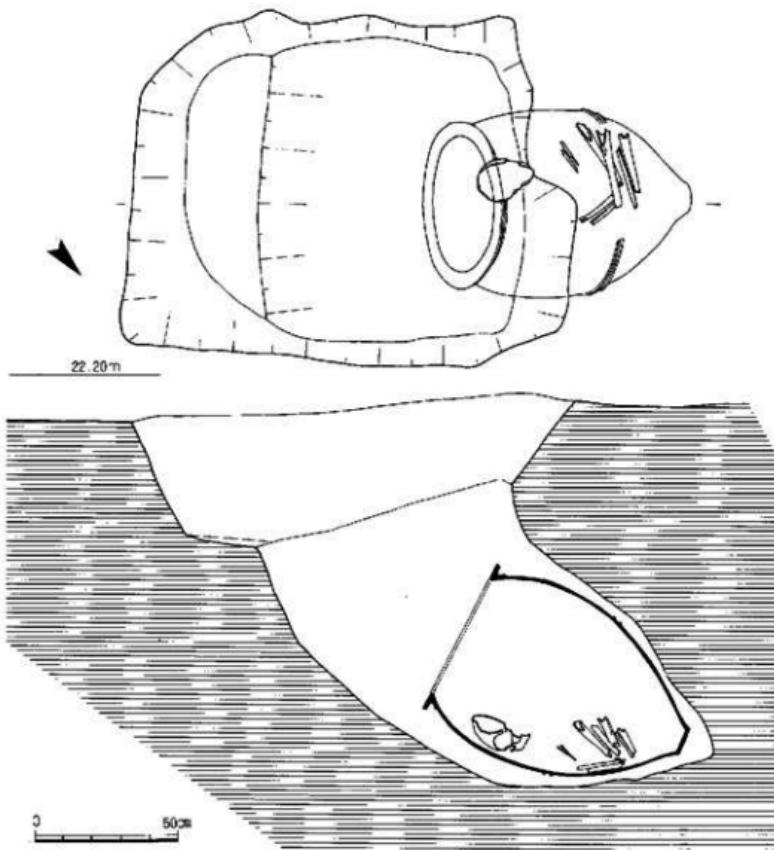
73 第16号墓実測図(縮尺1/6)



74 第16号墓 (縮尺1/5)

## 第17号葬棺墓 (75・76・77)

第17号葬棺墓の埋置方法は、まず 123cm×140cm に平面形が隅丸長方形の竖穴を45cmの深さに掘り、東短壁側の底を26cm残して、ここを階段状にしさるに西短壁側を斜め下に棺の大きさよりやや大きめに掘りこみ、大型甕をすべりこませている。大型甕を用いた葬棺墓は第3, 6, 7, 17, 19, 21号の6基であるが埋置傾斜角度の平均は34度であるのに対し第17号葬棺墓は25度でもっとも水平に近い。これは棺を埋置した斜坡がより大きいことを示している。主軸方位は、N-136° Eで東南側に頭位を置いている。甕の口縁部には粘土の日貼りは見られない。



75 第17号葬棺墓実測図 (縮尺1/20)

かったが、棺内にはあまり流土は見られず、人骨の保存を助けたようである。人骨は成年の女性（？）と推定されている。第17号妻棺墓の被葬者が女性と推定されたことから、上部に主軸方位を同じくし、あたかもそえるようにして埋葬されている第16号の小児用妻棺墓とは直接的な根柢はないものの母子の関係ではなかったかと想像される。ただし、第16号妻棺墓の墓壇は第17号妻棺墓の墓壇を切っており、同時に埋葬されたのではなく、ある程度の時間を考へるべきであろう。

同じように大型妻の上部に小児用妻棺墓が埋置されている例は第19号妻棺墓と第12号妻棺墓にも見られる。ただし主軸方位を異にしており、また第19号妻棺墓の被葬者は出土人骨から老年の男性と推定されている。



76 第17号妻棺墓



77 第17号妻棺墓

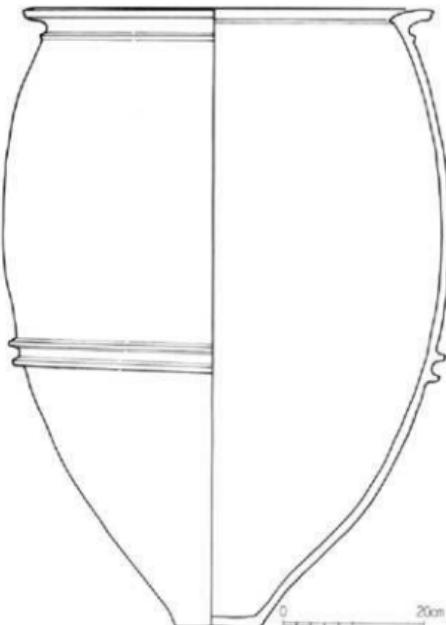
## 土 器 (78・79)

口縁部が逆「L」字形をなす大型  
壺である。径12.2cmの平底に卵形の  
胴部がつく。胴部の上位はやや内傾  
して口縁部がくびれており全体的に  
丸みがでている。逆「L」字形の口  
縁部は内傾し、内端部は突出し面取  
りされている。外端部は強く横ナデ  
され凹状となっている。胴部の最大  
径は63.3cmで、中位よりやや上にあ  
り、58.4cmの口径よりも大きい。突  
帯は口縁部直下に断面三角形の突帯  
を1条、胴部中位よりやや下に断面  
台形の突帯を2条めぐらしている。  
胴部の突帯はやや上向きに貼りつけ  
られている。胎土、焼成とともによく、  
色調は茶色を呈する。胴部の突帯は  
水平にめぐらされていないか、たいへん整った器形をなす。

▶ 79 第17号墓実測図 (縮尺1/8)



78 第17号墓 (縮尺1/10)



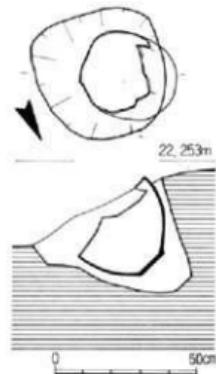
## 第18号墓 (80・81)

第18号墓と第21号墓の  
2基は、他の大部分の墓よりや  
や離れた所に位置している。第18  
号墓はいわゆる瓢形の壺を用  
いた单棺である。墓塚の上面プラ  
ンは45cm×45cmの不整円形である。  
器壁がうすいこともあって残存状  
態はたいへん悪く、かつ上部を削

平されているために、検出時には胴下半部を残すのみであった。墓埴は西側に向かって斜めに掘りこまれ、壺が埋置されている。

#### 土 器 (82・83)

径11.8cmの底部はやや上げ底ぎみで、最大径を中位にもつ胴部がつく。胴部の上部はくびれて、ここに上向きの断面台形の突帯が1条めぐり、さらに内湾しながら頸部へと続いている。胎土には2mm大の大きめの砂粒が多く入っており、焼成不良のためか軟質で、淡黄茶色を呈する。



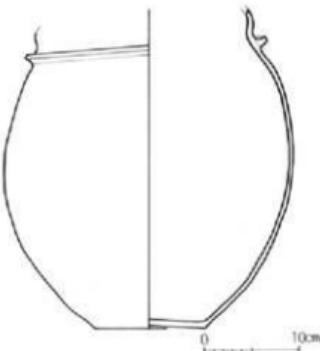
▲80 第18号墳棺基実測図  
(縮尺1/20)

◀81 第18号墳棺基



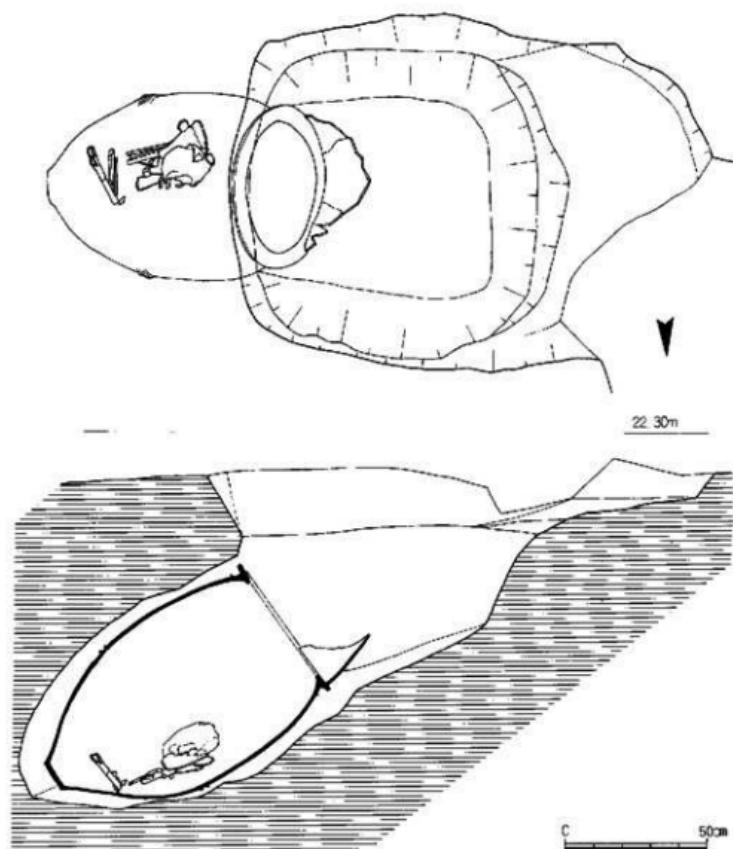
◀82 第18号墳棺 (縮尺1/5)

▼83 第18号墳棺実測図 (縮尺1/6)



## 第19号墓（84・85）

第19号墓の墓壙は第11, 12, 20号墓によって切られており、第19号墓が先に埋置されている。主軸方位はN-87°Wで第6, 7号墓と同じ西側を頭位としている。墓壙上面プランは170cm×120cmの隅丸長方形で、深さ70cmの壙底から東側に向かって斜坡が掘りこまれている。棺は上棺が口縁部を打欠いた鉢、下棺が大型甕の複棺で接口式である。上棺の鉢は土圧のためか早くつぶれ下棺の鉢内は土で半分ほど埋まっていたが人骨は残っていた。人骨は、老年の男性と推定されている。



84 第19号墓実測図（縮尺1/20）



▲ 85 第19号墓



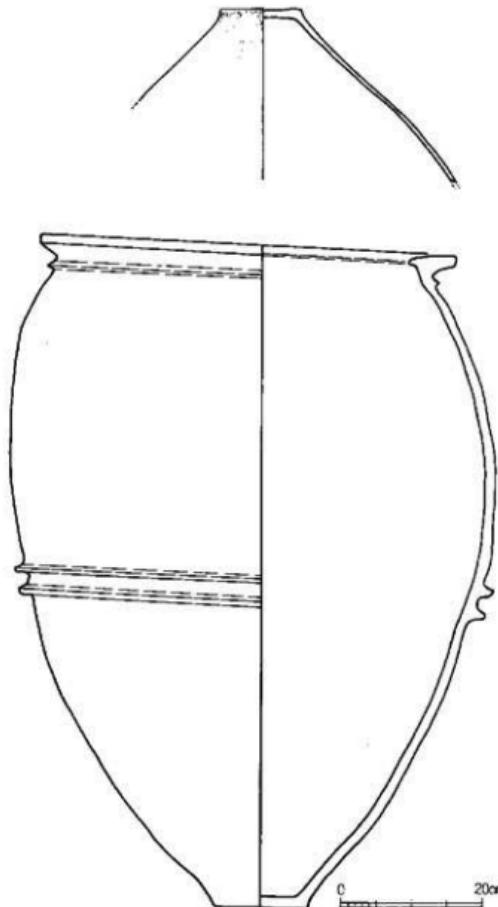
► 86 第19号墓 (缩尺1/10)

## 土 器 (86・87)

上棺は口縁部打欠きである。やや上げ底ぎみの底部から、大きく外に開きながら胴部がのびる、底径は11.4cmを測る。器壁のうすさ、胴部の開きなどから、第14号妻棺上棺と同じように鉢と判断した。胎上には小砂粒が見られ、焼成良好で、色調は茶色を呈する。調整は胴部内面が縫のナデ、外面は縫のハケ

目である。

下棺は大型妻で逆「L」字形の口縁部を持っている。底径13cm、器高94.8cm、口径は59.2cmを測る。胴部最大径は68.4cmで中位よりやや上にある。胴部上位で湾曲しながら内傾し、口縁部へと続く。口縁部は肥厚しており、上坦部は内傾するが平坦面をつくっている。内端部は内側へ大きく突出しており「T」字形に近い断面である。口縁直下には断面三角形の突帯が1条めぐらされている。この突帯はやや下向きに貼りつけられている。胴部の突帯は中位に2条ある。突帯の断面は台形で斜めにめぐらされている。焼成はよく、茶色を呈する。器面の調整は口縁部と突帯部が横ナデ、胴部外面は粗いハケ目調整で、突帯より上部15cmまでは細かいハケ目調整である。細身の妻棺であるが、かなりいびつな器形である。



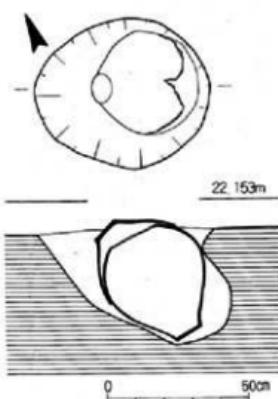
87 第19号妻棺実測図（縮尺1/8）

## 第20号妻棺墓 (88・89)

第20号妻棺墓は、第19号妻棺墓の墓址を切って埋置されている。墓址上面プランは $62\text{cm} \times 53\text{cm}$ の楕円形で、最初から棺の大きさに斜めに掘りこまれている。棺は上棺が胴部上半部を打欠いた壺で、下棺は頭部を打欠いた壺である。上棺が下棺を覆う覆口式で、接合部は完全に密着している。粘土の目貼りは見られなかった。

## 土器 (90・91)

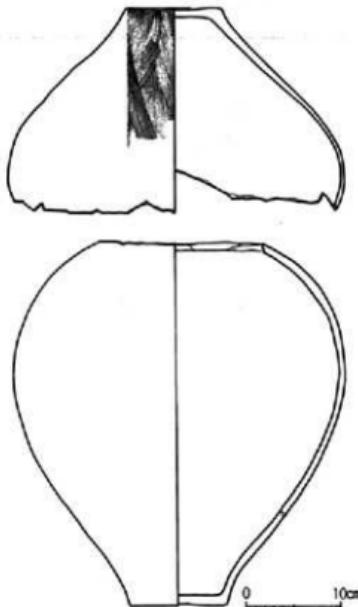
上棺は前述したように胴部上部が打欠かれており、全形を知りえないが、最大径を胴部上位に持つ広口の壺となるのであろう。径 $10\text{cm}$ の底部はわずかながら上げ底ぎみとなっている。胴部最大径は $35.6\text{cm}$ を測る。色調は内面が黒茶色、外面は赤茶色。胎土は密で精良である。器面の調整は内面がナデ、外面は細かいハケ目が施されている。



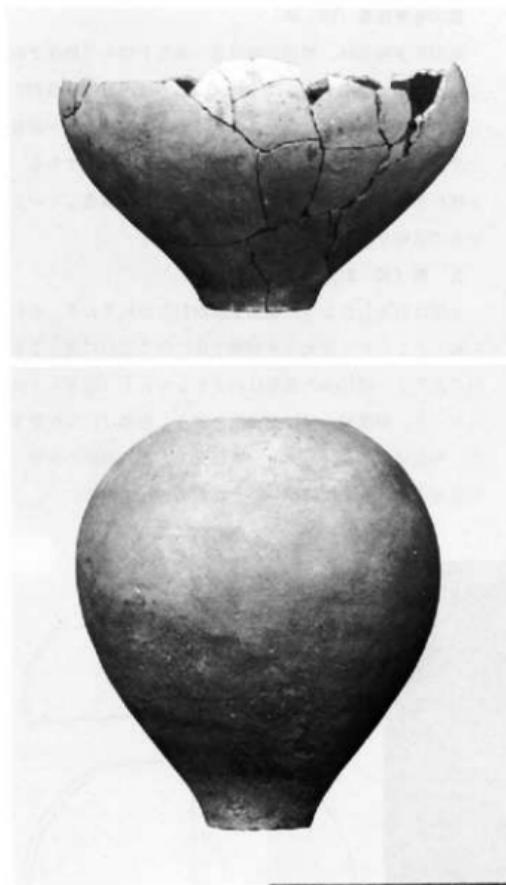
88 第20号妻棺墓実測図  
(縮尺1/20)



89 第20号妻棺墓



90 第20号妻棺実測図 (縮尺1/6)



下棺は頸部より上部が打欠かれている。平底に倒卵形の胴部がつく。胴部の最大径は35.2cmでやや上位にある。器面は丁寧なナテ調整が施されている。色調は明茶色を呈し、焼成良好である。胎土には砂粒の混入が見られる。胴部の下部に3mm大の小孔が穿たれている。底径10.2cm、器高は38.6cmを測る。

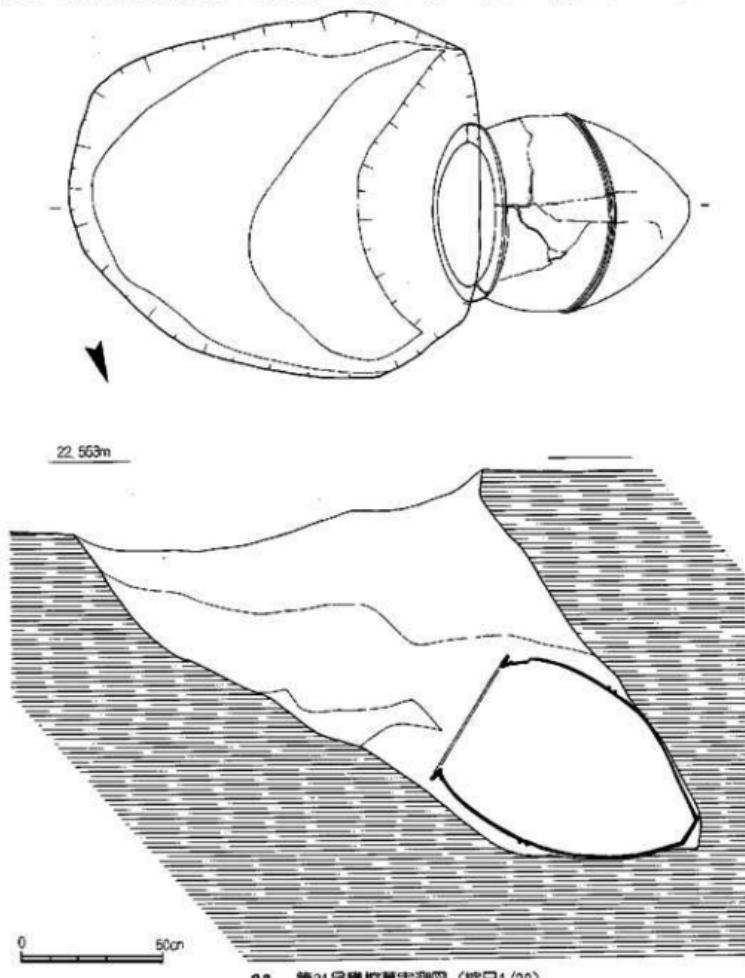
◀91 第20号墓（縮尺1/5）

▶92 第21号墓



## 第21号櫛棺墓 (92・93)

第21号櫛棺墓は本道跡ではもっとも西端に位置している。墓壇上面プランは  $130\text{cm} \times 145\text{cm}$  の不整隅丸長方形である。大型甕を用いた第3、6、7、17、19号櫛棺墓の墓壇がまず軽穴を掘り、その底底の一方を斜めに掘りこんでいるのに対して第21号櫛棺墓の墓壇は最初から斜坡を掘っている。棺は大型甕を用いた単棺で、口縁部には粘土の目貼りは見られなかった。



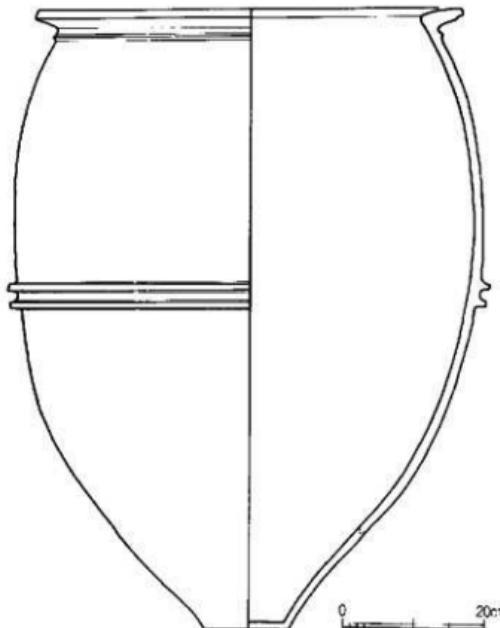
93 第21号櫛棺墓実測図（縮尺1/20）

## 土 器 (94・95)

口径61cm、底径12cm、器高は89cmの大型甕である。平底から胴部へは内湾しながら開き、胴部中位にめぐらされた突帯からは、直立ぎみにのび上部でわずかに内傾している。この上部に逆「L」字形の口縁部がつく。口縁内端部は突出している、外端部は肥厚している。突帯は口縁直下に断面三角形の突帯を1条、胴部中位に断面台形の突帯が2条めぐらされている。焼成は良好で色調は明茶色を呈している。器面の調整は口縁部と突帯部が横ナデ、胴部外面はナデ、底部付近は緞のナデ調整である。

大型甕法量対比表 (単位cm)

No.	口 径	底 径	器 高	胴部最大径	人骨、その他
3	60.0	11.6	82.3	65.0	男性、熟年(40才代)
6	69.0	12.6	101.0	75.2	人骨ナシ
7	70.6	11.4	99.8	71.8	男性成人
17	58.4	12.2	87.4	63.3	女性(?) 成年
19	59.2	13.0	94.8	68.4	男性 老年
21	61.0	12.0	89.0	66.2	人骨ナシ

▶ 94 第21号櫛柄実測図  
(縮尺1/8)

▶ 95 第21号甕棺（縮尺1/10）



## 2. 土 坑 墓

検出した土坑墓の総数は9基である。これらの土坑墓は検出順に番号を付したが、第7号土坑墓がやや離れた東端にあるのに対し他の8基は西側に片寄っている。土坑墓の掘り方は、第6号を除いてすべて二段掘りである。これらの土坑墓は一段目か二段目に木などの蓋がしてあったものと思われるがその痕跡をとどめているのは第4号土坑墓のみである。甕棺墓との先后関係は、第6、8、9号土坑墓が甕棺墓によって切られしており、甕棺墓より時間的に古いことがわかる。



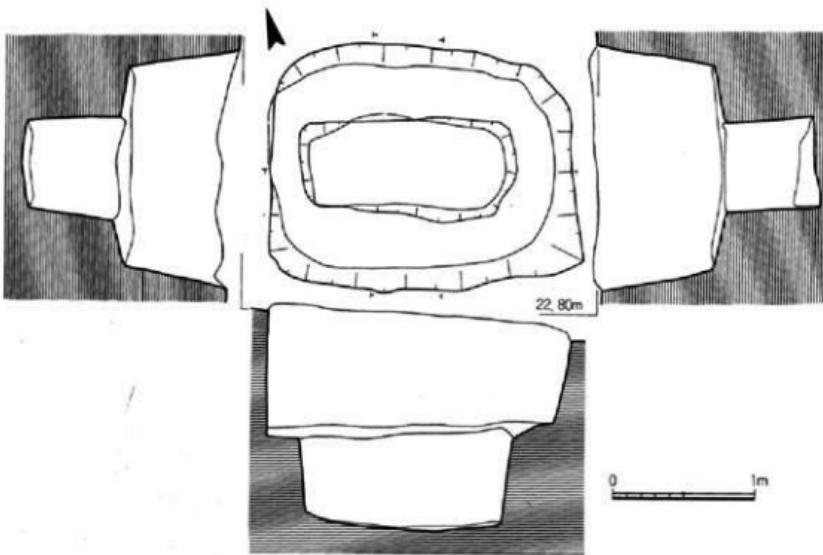
▶ 96 第1, 2, 3, 4号土坑墓

## 第1号土塙墓（97・98）

第1号土塙墓は発掘区の西端部に位置し、発掘区ではもっとも標高が高いところにある。主軸方位はN-106°-Eで東西方向の主軸をとっているのは第1, 2, 9号土塙墓の3基のみである。上面形は隅丸長方形で、一段目を214cm×174cm、深さ90cmに掘っている。四壁はやや傾斜があるが西短辺の壁は垂直に近い。一段目のほぼ中心に二段目が掘りこまれており、四壁は一段目の壁より垂直に近い。塚底は中心部がわずかに窪んでいるが、ほぼ平坦といえよう。一、二段目ともに蓋があった痕跡は認められなかった。二段目の掘りこみ幅から西辺側が頭位にあたると考えられる。



97 第1号土塙墓



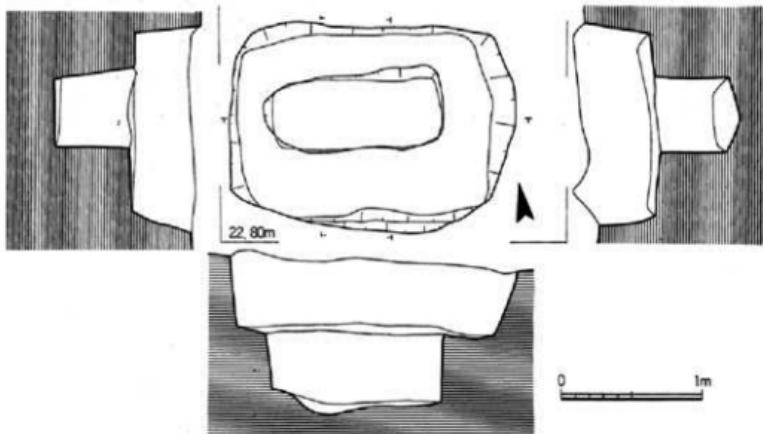
98 第1号土塙墓実測図（縮尺1/40）

## 第2号土塙墓 (99・100)

第2号土塙墓は二段掘りの土塙墓で、第1号土塙墓の南側に位置している。主軸はN-100°-Eで第1号土塙墓と大きな差はない。一段目の平面形は隅丸長方形で、長さ206cm、幅145cmを測る。深さは50cmで第1号土塙墓よりもやや浅く、四壁は東短壁をのぞいてほぼ垂直に掘られている。遺体を埋葬する二段目の底は、中心よりやや北長壁に片寄って掘りこまれており、長さ128cm、幅56cm、深さ56cmを測る。底は西側に窪んだ部分があるが、東短壁側に比べると約10cm西短壁側が高くなっている。副葬品、および蓋の木材や目貼り用粘土は見られない。



99 第2号土塙墓



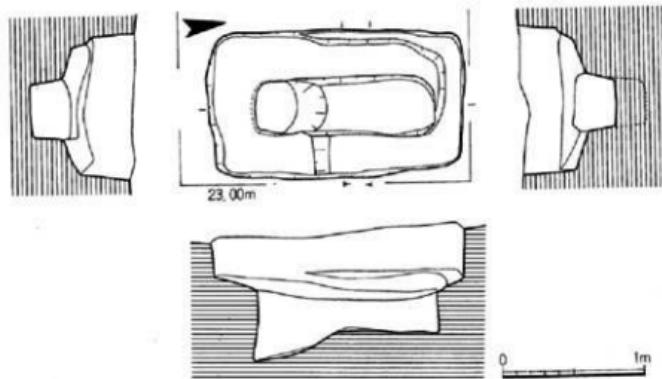
100 第2号土塙墓実測図 (縮尺1/40)

## 第3号土塙墓 (101・102)

第3号土塙墓は第1号土塙墓と第3号槨棺墓の間に位置する。第1、2、4号土塙墓とはかなり接近しているが切り合いは見られない。第3号槨棺墓とは平面的には重複しているが、第3号槨棺墓の下棺は第3号土塙墓の塙底を破壊することなく埋置されている。一段目掘りこみの平面形は長方形で $180\text{cm} \times 105\text{cm}$ 、深さ42cmに掘られている。一段目の塙底は平坦でない。二段目も隅丸長方形で、 $128\text{cm} \times 43\text{cm}$ を測り、北短辺側が幅広い。塙底は南側で急に深くなっている。二段目の掘り方からは50cmの深さである。出土遺物や、粘土目貼りなどは見られなかった。



▶101  
第3号土塙墓



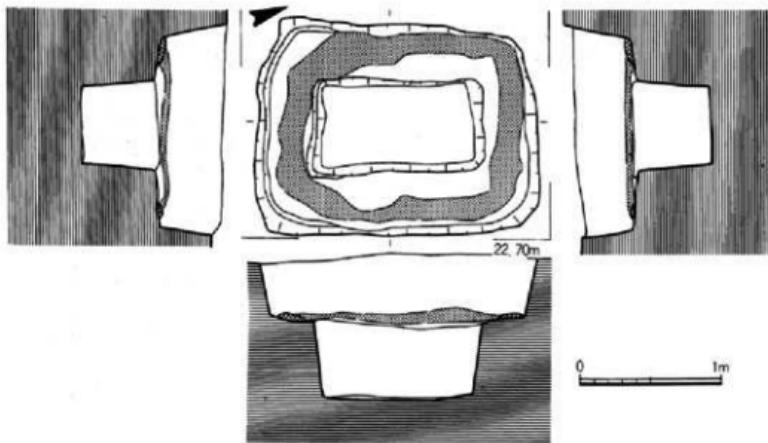
102 第3号土塙墓実測図 (縮尺1/40)

## 第4号土塙墓 (103・104)

第4号土塙墓は第3号覆棺墓と第21号覆棺墓の2つの覆棺墓の間に位置している。主軸方位はS-19°-Wで第3号土塙墓と同じように南北方向の主軸をとる。一段目掘りこみは196cm×151cmの長方形で44cmの深さに掘りこまれている。二段目はほぼ中央に長方形に掘りこまれ、長さ118cm、幅69cmを測り、塙の深さは58cmで本遺跡の土塙墓では深い部類に入る。幅は南短辺が北短辺に比べ5cm程広く、頭位と考えられる。このことは一段目の平面形にも指摘でき、南短辺が北短辺より16cm幅広い。二段目の塙底はほぼ平坦で塙底レベルは21.54mである。一段目の塙底には四壁にそって灰白色粘土が厚さ約5cmでめぐっており、蓋の目貼りであろう。粘土の残存状況から蓋はかなり大きかったものと推定される。遺物の出土はなかった。



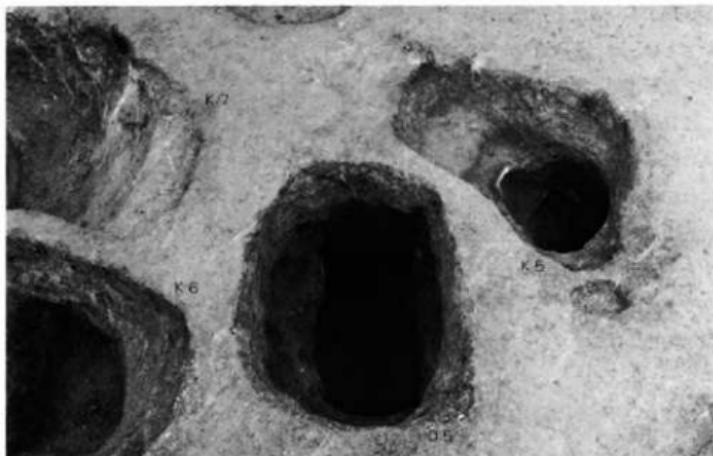
103 第4号土塙墓



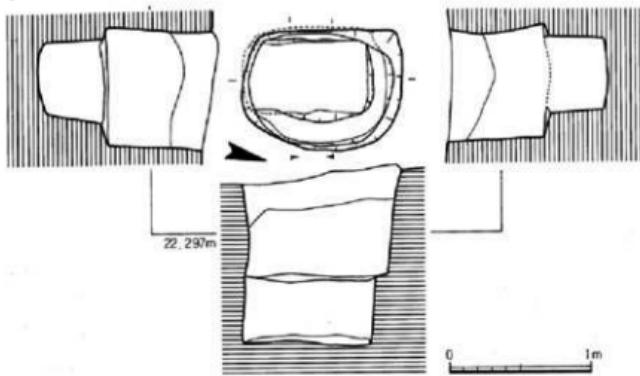
104 第4号土塙墓実測図 (縮尺1/40)

## 第5号土塙墓 (105・106)

第5号土塙墓は、第1～4号土塙墓が互いに接近していたのに対して東側にやや離れて位置している。一段目の平面形は隅丸長方形で113cm×85cm、深さ76cmであり、長辺と短辺の長さに大きな差がなく方形に近い形となっている。一段目の壁はほぼ垂直で、西長辺はえぐりこまれている。二段目は中心線より西南側にやや片寄って掘りこまれる。平面形は長方形で92cm×57cm、深さ48cmを測る。塙底はほぼ平坦で、塙底レベルは21.13mと本遺跡の土塙墓では2番目に低い。ただし上面からの深さは124cmで、第1号土塙墓の155cmにおよばない。



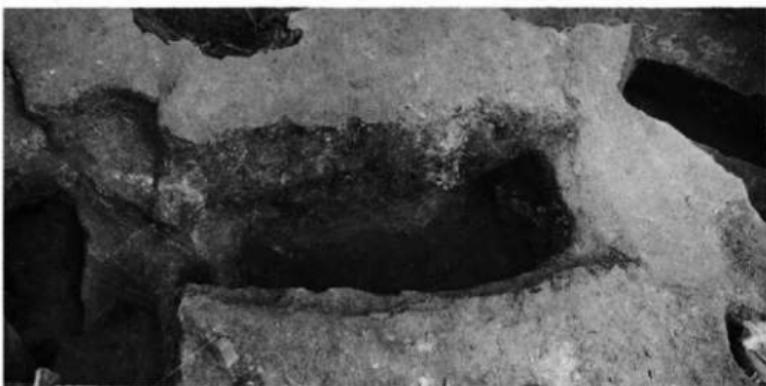
105 第5号土塙墓



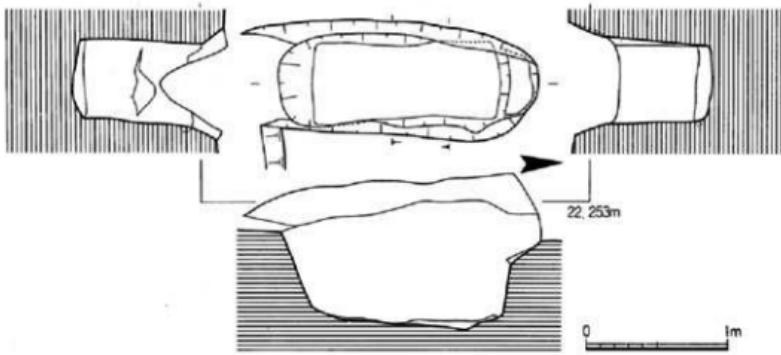
106 第5号土塙墓実測図 (縮尺1/40)

## 第6号土塙墓 (107・108)

第6号土塙墓は、発掘区のほぼ中央部に位置している。主軸方位はS-9°-Eである。平面形は隅丸長方形で、210cm×78cmを測る。北短辺壁は第5号豪棺墓の墓塙で切られている。また南短辺壁も掘りこみが明瞭でない。両長辺壁はほぼ垂直に掘りこまれているが、南短辺壁はかなり傾斜をもっており、北短辺壁は深さ60cmに段がある。断面で観察すると、上面より約30cmの深さまでは壁を斜めに掘り、その下部は垂直に掘りこんでいる。したがって北短辺壁に小さな段があるものの二段目に蓋をかぶせるようなことはできず、二段掘りの土塙墓というよりも素掘り土塙墓とすべきであろう。塙底のプランは長方形で長さ163cmを測り、幅は南短辺が57cmで北短辺より3cm幅広く、頭位と考えた。塙底は平坦でなく凹凸がある。



107 第6号土塙墓



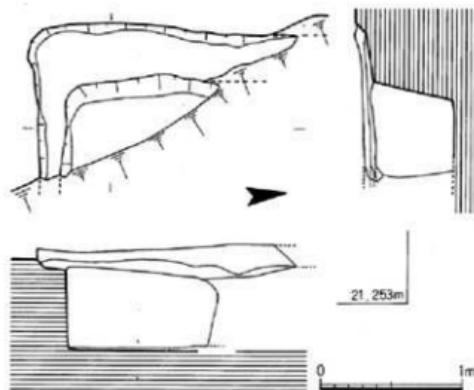
108 第6号土塙墓実測図 (縮尺1/40)

## 第7号土塙墓 (109・110)

第7号土塙墓は発掘区の東端で検出したもので、全体の $\frac{1}{2}$ ほどが土取り時に破壊されている。二段掘りの土塙墓であるが、一段目の掘りこみが浅く第1～4号土塙墓とは異にしている。残存部から推測される一段目の平面形は隅丸長方形である。二段目の塙の大きさが不明なので全形を知りえない。一段目の深さは22cmで、上部が削平されているとしてもかなり浅い。二段目も隅丸長方形で深さ52cmを測る。この深さは、二段目深さの平均値が53cmなのでほぼ等しい。塙底は平坦である。頭位は不明。



▶ 109 第7号土塙墓



110 第7号土塙墓実測図 (縮尺1/40)

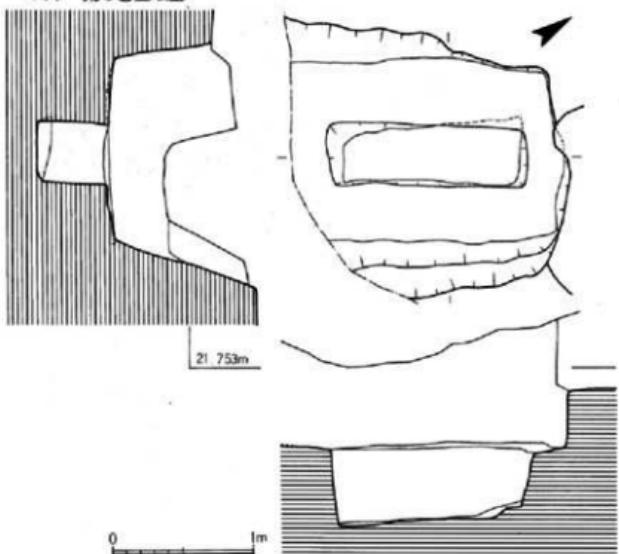
## 第8号土塙墓 (111・112)

第8号土塙墓は発掘区の南端部にあり、その一部は調査区外のため発掘できなかった。一段目の深さが90cmあり、たいへん深い二段掘りの土塙墓である。一段目の平面形は隅丸長方形で南短辺壁に向かって広がっている。長辺壁は傾斜があるが、北短辺壁はほぼ垂直である。南短



111 第8号土塙墓

辺壁は第9号槨棺墓の墓底で切られており、先後関係がわかる。二段目は中心線上に掘りこまれている。二段目は長方形で長さ141cm、幅43cm、深さ52cmである。南短辺が43cmで北短辺より3cm幅広く、頭位であろうか。塙底は南に向かって傾斜している。塙底のレベルは、20.63mでもっとも深い位置に埋葬したことになる。なお、もっと高い塙底は第3号土塙墓の21.79mでその差は1.16mある。



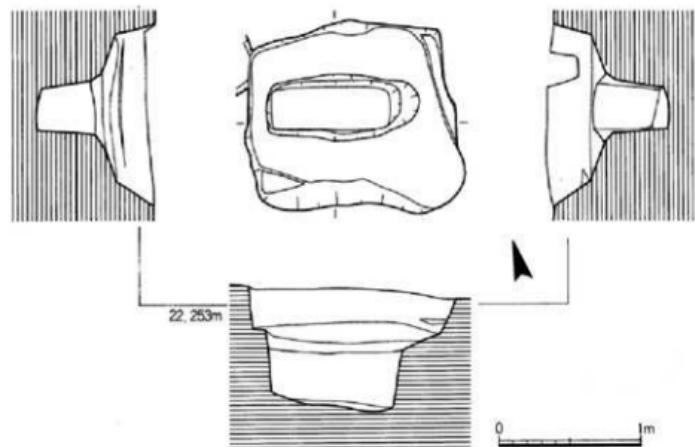
112 第8号土塙墓実測図 (縮尺1/40)

## 第9号土塙墓 (113・114)

第9号土塙墓は発掘区のはば中央部に位置しており、第5号覆棺墓の墓壠でわずかに切られている。また上部に第8号覆棺墓が埋置されている。二段掘りの土塙墓であるが、二段目の墓壠に対して一段目の掘りは大きい。一段目は $146\text{cm} \times 128\text{cm}$ の隅丸長方形で深さは35cmである。二段目は長方形で長さは108cm、最大幅47cm、深さは50cmである。両短辺の幅はほとんど差はないが、塙底は東に向かって傾斜しており、西側が頭位であろうか。



▶113  
第9号土塙墓



114 第9号土塙墓実測図 (縮尺1/40)

### III 下月隈宮ノ後遺跡甕棺墓出土の人骨

九州大学医学部解剖学教室 永井昌文

全般的に見て保存状態は不良で、幸うして5体が得られている。以下、各人骨について主な所見を摘記する。

K-3号人骨：男性、熟年

保存状態 上記5体のうちでは最も残りが良いが、それでも完全人骨量の約しかなく骨質も不良である。これらの骨片はすべて下腹内にずれ込んだ状態で見出されたが、もともとの埋葬姿勢は仰臥屈曲であったらしい。残存骨は右側上頸部ならびに底部を欠失した頭骨（下顎はある）と四肢の主要長骨および両側寛骨片などである。

推定性別 寛骨および頭骨の所見から男性であることはほぼ確実である。

推定年齢 齧牙の咬耗（M氏の2度ないし3度）、冠状縫合の癒合度、および左側恥骨結合面の状態より40代の初めと推定した。

頭形 頭最大長180mm、同最大幅144mmで、示数80.0を示し、中頭型に近い短頭型である。額高および眼窓高とともにやや高い。

四肢骨 大腿骨の柱状形成強く、胫骨はヒラメ筋線が発達し扁平であり、全身的に筋肉付着部の浮彫像は著明である。

推定身長 右脛骨最大長より推算した身長は163.0cmとなり、この地域の弥生人としては平均的な値をとる。

なお、抜歯風習の痕跡は認められない。

K-7号人骨：男性、成人（成年か熟年か不明）

保存状態 下腹の底部に集塊をなして出土した。残存量は約、骨質は不良である。残存骨は、頭骨では冠の一部であり、四肢骨ではその多くが骨端部を欠く主要長骨である。

推定性別 幸い残っている右側の大座骨切痕の形状から男性とした。

推定年齢 確実な年齢推定の根拠に乏しいが、成人骨であることに間違いない。ただ、成年であるか熟年であるかは決め難い。

その他 四肢骨はK-3号人骨ほどの頑強性はない。頭形、推定身長、抜歯風習の痕跡など一切不明である。

K-9号人骨： 幼年（4才くらい）， 性別不明

保存状態 頭蓋冠のみ下顎底に残存， 他の骨は見当らず。

推定年齢 咬耗のある乳歯と未萌出の永久歯とが混在しており， 後者の中切歯および第一大臼歯の形形成時相から4才程度と推定した。

推定性別 未成年骨であるため推定は困難である。

K-17号人骨： 女性（？）， 成年

保存状態 残存骨量は3%， 骨質不良。頭骨は右側頭骨がやや良く残り， 他部は細片に破碎している。四肢骨は骨体部のみの長骨が7本認められる。

推定性別 困難であるが， 四肢骨がやや細く， 辛うじて残った上顎大臼歯冠が小さく， 側頭骨頸突起の基部上縁が明確に側頭線に移行していない， などからむしろ女性である可能性の方が高い。

推定年齢 これも明確ではないが， 残存歯冠の咬耗からみると成年であろう。

その他は一切不明である。

K-19号人骨： 男性， 老年

保存状態 残存骨量は3%， 骨質不良。頭骨は左半が残っているが， 頭面及び下顎は見当らない。四肢骨は骨端部のない長骨6本が残っているだけである。

推定性別 頭骨は骨壁厚く， 著明な外後頭隆起を有し， 左眼窩上縁も厚いことなどから男性と推定した。

推定年齢 ほとんどの縫合が癒合を終っているので老年とした。

その他 四肢骨の性状は， むしろ年齢に起因すると思われる退縮的傾向を示している。

#### 附記事項：

ここで人骨の保存度に関して南々東約1.3kmの近さに位置する金隈遺跡と比較してみる。

「金隈」では墓棺142基中62基(43.7%)に人骨を検出しているが， ここ「宮ノ後」では21基中5基(23.8%)しか見出していない。人骨探索の努力如何にも関係するであろうが， 大まかに見て「宮ノ後」のほうが保存に関してはやや不良であったとしてよいであろう。

ところで， 埋葬人骨の保存には経過年代よりもむしろ埋葬土壤の水蒸イオン濃度(pH)や埋葬施設が大きく関係するらしいことを筆者は経験的に感じている。

この両遺跡は同じ月隈丘陵上に位置し， 遺体は花崗岩のバイラン土壤中に， 同様な葬法で， 時代もあまり差のない時期に埋葬されている。当教室の中橋孝博助手の測定した未発表資料に

よれば、廻周辺の土壤の pH ( $H_2O$ ) は「金限」4.72、「宮ノ後」4.75ではなく、共に酸性はかなり高い。これを裏書きして土壇中には人骨を検出し得なかった。人骨の保存に差を生じた原因として残るのは焼棺の密閉度（亀裂の多少、それに関係する廻の大小や胎土の良否）と埋葬地域の排水の問題であろう。排水には標高も関係すると思うが、「金限」30m前後、「宮ノ後」23m前後と、やや前者に有利を感じる。

一方、人骨の側にも性別、年齢に応じて耐蝕性に差のある傾向は認められるので、諸種の観点から今後も注目して行きたい。



▲ 1 第3号银棺墓人骨出土状况

▼ 2 第7号银棺墓人骨出土状况





▲ 3 第9号裹棺墓人骨出土状况

▼ 4 第17号裹棺墓人骨出土状况





▲ 5 第19号墓人骨出土状况

▼ 6 第19号墓人骨出土状况



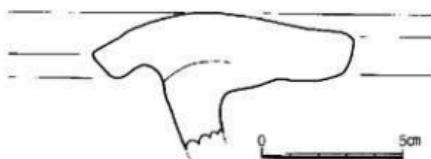
## IV おわりに

下月隈宮ノ後遺跡は土取りで残された 245 m<sup>2</sup> という狭く限られた面積の調査であったが、甕棺墓 21 基、土塙墓 9 基を検出し、弥生時代の共同墓地の一部であったことがわかった。甕棺墓、土塙墓の個々については前述したとおりであるが、ここでは宮ノ後遺跡の発掘調査で明らかになったこと、あるいは問題として残ったことなどをまとめてみたい。

宮ノ後遺跡は甕棺墓と土塙墓とによって構成される共同墓地であるが、両者の切り合は 3 例で見られ、いずれも土塙墓が甕棺墓によって切られており、土塙墓が古いといえる。ただし、9 基の土塙墓は 1 か所に集中せず、第 7 号土塙墓のようにやや離れたものもあり、すべての土塙墓が古いとは決めがたい。21 基の甕棺墓のうち大型甕を用いているのは 6 基のみである。他は中型甕、小型甕、あるいは壺などによる甕棺墓である。これら 15 基の甕棺墓は明らかに小児用と思われるものがあるが第 9、10 号甕棺墓のように二つの棺の全長が 80~105 cm と大きいものもある。しかし第 9 号甕棺墓より出土した人骨は 4 才ぐらいいと推定されたことから大型甕 6 基以外はすべて小児用と考えていいだろう。小児用が圧倒的に多いが、土塙墓が甕棺墓より古い状況を示してはいるものの、あるいは土塙墓が甕棺墓で少なかった成人用として使われた可能性もある。小児用と判断した甕棺墓に丹塗りや瓢形の特殊な土器が使用されているのも宮ノ後遺跡の特徴の一つである。特に瓢形上器は、福岡市南部を中心に数か所の遺跡で出土例が知られているが、ほとんどは墓地から出土しており、祭祀と関連づけが行なわれている。宮ノ後遺跡では瓢形土器は第 1、2、16、18 号甕棺墓の 4 基に見られるが、第 1、2 号甕棺墓は、口頭部を打欠き、上、下棺と合わせており、明らかに棺として用いられており、從来考えられてきたような特別な用いられ方はしていないようである。むしろ棺として用いたこと自身に意味があったとすべきである。この外に丹塗り土器は第 10、20 号甕棺墓にも見られるが祭祀として使用されたものではない。第 10 号甕棺墓は上棺が丹塗り上器で、下棺の中型腹脚部には煤が付着した日常容器との組みあわせである。第 4 号甕棺墓は甕棺墓と認定したが、あるいは祭祀遺構として考えるべきかもしれない。また第 6 号甕棺墓の墓塙上部より出土した土器片も祭祀行為の一つであろうか。つぎに土塙墓と甕棺墓の主軸方位であるが、土塙墓は東西と南北の二つに大きく別けることができる。甕棺墓は前述したように頭位に東、西、南東の三方向があり、同一方向のものは場所的にも集中しておりグループとして把握できそうである。第 1 のグループは第 1、2、3、4、5 号甕棺墓の 5 基、第 2 のグループは第 6、7、8、9、10、19、20 号甕棺墓の 7 基、第三のグループは第 15、16、17 号甕棺墓の 3 基であり、いずれのグループに

も1基以上の大型窓を用いた槨棺墓が入っている。さて宮ノ後遺跡の時期であるが、大型窓の口縁部はいわゆる「T」字形口縁の内側突出部が退化し、口縁部上面が内傾した逆「L」字形口縁を持っており弥生時代中期後半という時期が考えられる。また内消ぎみにのびた「く」字形口縁の中型窓は後期前半に比定されることから、槨棺墓の時期は弥生時代中期後半から後期初頭と考えられる。上塙墓は槨棺墓との切り合いから一時期古いようであるが上限は明らかにしえない。なお土取り残土中より採集した大型窓口縁部は6基の大型窓口縁部よりも、より「T」字形口縁の特徴を強く持っている。これらのことから宮ノ後遺跡は、本来は丘陵全体が墓域となっていたのである。今回の調査はその一部を発掘したにすぎない。ただ今回の発掘区でも西側や南東側では土塙墓、槨棺墓の分布がとぎれしており、一つの丘陵がいくつかの共同体の墓地として利用され、その結果として一大共同墓地となった可能性が強い。

#### 下月隈宮ノ後遺跡槨棺墓、土塙墓の切り合い



115 土取り残上発生の種実測図(縮尺1/2)

下月隈宮ノ後遺跡墓一覧表

No.	主軸	傾斜	墓坑平面形	単・複	合 口	上棺	下棺	備 考	插 図
1	N-57° E	31°	不整円形	複	打欠き覆口	壺	壺	瓢形土器	8, 9, 10, 11
2	N-95° E	29°	横円形	複	打欠き接口	壺	壺		12, 13, 14, 15
3	N-92° E	31°	隅丸長方形	複	挿 入	甕	大甕	男性熟年(卯才代)	16, 17, 18, 19
4	N-96° E		不整円形		不 明	甕×3	甕	祭祀遺構か?	20, 21, 22, 23
5	N-101° E	36°	隅丸長方形	複	打欠き挿入		甕	D6を切る	24, 25, 26, 27
6	N-99° W	43°	長横円形	単			甕	K7を切る 埋付に上部片	28, 29, 30, 31
7	N-99° W	41°	不整長横円形	単			甕	男性成人	32, 33, 34, 35
8	N-86° W	42°	不整円形	複	覆 口	林	壺	D9を切る	36, 37, 38, 39
9	N-102° W	36°	隅丸方形	複	接口挿入	甕	甕	D8を切る 幼児	40, 41, 42, 43 44
10	N-89° W	28°	隅丸長方形	複	挿 入	壺	甕		45, 46, 47, 48
11	S-35° W	39°	横円形	複	接 口	甕	甕	K19を切る	49, 50, 51, 52
12	N-39° E	46°	横円形	複	接 口	甕	甕	K19を切る	53, 54, 55, 56
13	N-101° E	38°	円 形	複	接 口	甕	甕		57, 58, 59, 60 61, 62
14	S-2° W	32°	円 形	複	覆 口		甕		63, 64, 65, 66
15	N-142° E	41°	横円形	単			甕		67, 68, 69, 70
16	N-129° E	19°	横円形	単			壺	瓢形土器 K17を切る	71, 72, 73, 74
17	N-136° E	25°	隅丸長方形	単			甕	女性(?)成年	75, 76, 77, 78 79
18	N-119° E	49°	不整円形	単			壺	瓢形土器	80, 81, 82, 83
19	N-87° W	33°	隅丸長方形	複	打欠き接口	林	甕	男性老年	84, 85, 86, 87
20	N-68° W	61°	横円形	複	覆 口	壺	甕	K19を切る	88, 89, 90, 91
21	N-109° E	32°	不整隅丸長方形	単			甕		92, 93, 94, 95

(主軸は南北を基準に頭位方向を測定した。)

## 下月隈宮ノ後遺跡土塙墓一覧表

(単位 cm)

No	方向	平面形	一段目 長さ×幅(図の右・中・左)	深さ	二段目レベル 塙底レベル	備考
			二段目 長さ×幅(図の右・中・左)			
1	N-106°-E	隅丸長方形	214×146・174・157	90	21.95m	頭位は東
			156× 66・ 66・ 56	65	21.30m	
2	N-100°-E	隅丸長方形	206×124・145・123	50	22.19m	頭位は東
			128× 56・ 54・ 42	56	21.63m	
3	N-9°-E	長方形	180× 93・ 105・ 103	42	22.29m	頭位は北?
			128× 43・ 41・ 34	50	21.79m	
4	S-19°-W	長方形	196×135・150・151	44	22.12m	頭位は南 一段目に粘土 目貼り
			118× 64・ 64・ 69	58	21.54m	
5	N-17°-W	隅丸長方形	113× 80・ 85・ 66	76	21.61m	頭位は南
			92× 52・ 57・ 49	48	21.13m	
6	S-9°-E	隅丸長方形	210× 65・ 78・ 68	60	21.95m	K5によって 切られる
			163× 54・ 64・ 57	48	21.47m	
7	N-3°-E	隅丸長方形		22	22.00m	頭位?
				52	21.48m	
8	S-32°-W	隅丸長方形	200×147・171・ ?	90	21.15m	K9によって切 られる 頭位南
			141× 40・ 43・ 43	52	20.63m	
9	N-76°-W	隅丸長方形	146×125・128・102	35	22.00m	K5,8によって 切られる 頭位西
			108× 37・ 47・ 35	50	21.50m	

福岡市博多区  
下月限天神森遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第76集

©1981年3月31日発行

編集 発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神一丁目7-23  
電話 (福岡) 771-4667(文化課)

印刷 祥文社印刷株式会社  
福岡市博多区博多駅南四丁目15-17  
電話 (福岡) 411-1611(代表)

福岡市博多区 下月限天神森遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第76集

1981

福岡市教育委員会